
清家未森
MIMORI SEIKE
六蓮国物語
宮廷の二セ御使い
角川ビーンズ文庫

# 六蓮国物語

## 宮廷のニセ御使い

清家未森

BEANS BUNKO
17571
角川ビーンズ文庫

# 六蓮国物語

## 宮廷のニセ御使い

清家未森

17571

角川ビーンズ文庫

# 六蓮国物語

## 宮廷の二七御使い

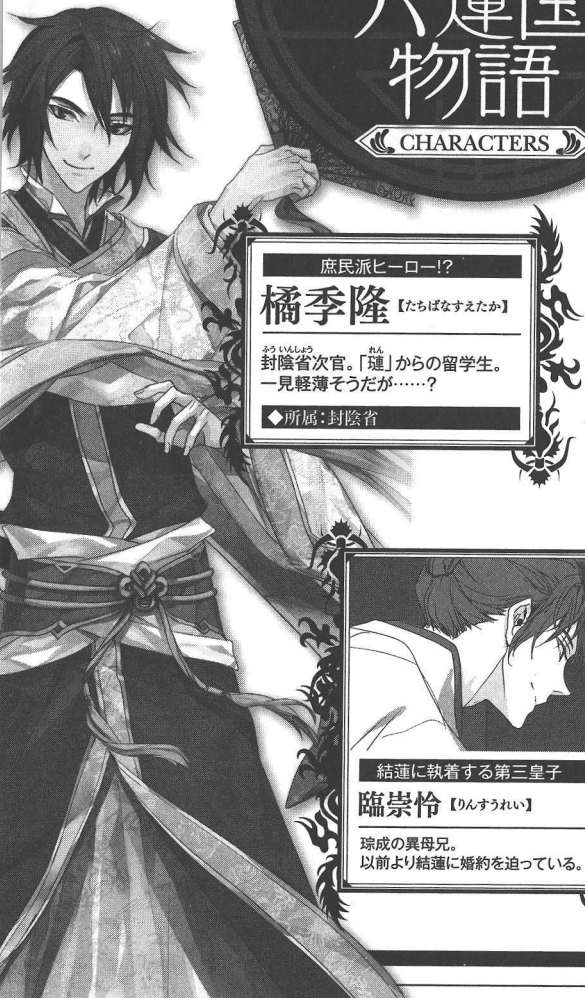
Contents

—目次—


| | | |
|---|---|---|
| 序章 | 希望の船出 | 007 |
| 第一章 | 御使い様との再会！ | 011 |
| 第二章 | 謎の美姫の影 | 066 |
| 第三章 | 花街の交錯 | 121 |
| 第四章 | 蓮花の節 | 180 |
| 終章 | 告白 | 230 |
| あとがき | | 254 |

# 六蓮国物語

## CHARACTERS



庶民派ヒーロー!?

### 橘季隆【たちばなすえたか】

封陰省次官。「蓮」からの留学生。
一見軽薄そうだが……？

◆所属：封陰省



結蓮に執着する第三皇子

### 臨崇怜【りんすうれい】

琮成の異母兄。
以前より結蓮に婚約を迫っている。

CHARACTERS



結蓮を愛する太子

## 臨琮成【りんそうせい】

煌国太子で、結蓮の幼なじみ。
悪鬼妖怪の類に狙われやすい体質。

一途で堅物な少女

## 豊結蓮【ほうゆいれん】

太子の命が何よりも大切な女武官。
怪力で大食らい。
大商家・豊家のお嬢様。

◆所属：柚梨軍

### 物語の世界観

六雄と呼ばれる六つの国があり、その一つ・煌国が舞台。
煌国の太祖は龍の血を引く碧眼の娘で、代々碧眼を
持つ者だけが玉座にのぼることが許されている。

イラスト／Izumi

本文イラスト／Ｉｚｕｍｉ

# 序章　希望の船出

小さな波が絶え間なく寄せては、港の岸壁を洗っている。
暗く透きとおった不思議な色の海は、少年の視界いっぱいに広がっていた。
これが内海。荒ぶる龍神が支配する、留学生にとっての最初の難関。
「――何してるんだ？　季隆。もうみんな集まってるぞ」
明るい声に呼ばれ、肩をたたかれて季隆は振り向いた。
立っていたのは、温厚な顔で微笑む青年。これからともに留学生として煌への船に乗り込む仲間の一人だ。その笑顔を見たらほっとして、軽口の一つも言いたくなった。
「無事に煌までたどり着けるように、願掛けだよ」
「そんなの、専門の役人がいくらでもやってくれるぞ？　でもおまえがやったほうが効くかもしれないな」
屈託なく笑った青年を、季隆は思わずじっと見つめた。
「ん？　なんだ、そんなに見て」

「いや……、ほんとにおまえも行くんだなぁと思って」
「おいおい。私が同行するのは不満か？」
「そうじゃない、嬉しいさ。けど……、おまえんちは璉で一、二を争う名門じゃないか。しかもおまえは跡取りだし……」
同じく呪禁道の大家を一族に持つ二人だが、地方に本拠を構える季隆の一族と、都で皇帝に仕えている彼の一族ではまた事情が違ってくる。それも片や気ままな次男坊、片や正式な跡取り。本来ならこうして友人づきあいしていることすらありえないのだ。
「大丈夫だよ。私だってちゃんと父上にお許しをもらっているんだから」
青年は穏やかに笑ってみせると、少し表情をあらためて海へと目をやった。
「仮に今、私が家督を継いだところで、仕えるのは偽帝とその一派だ。父上はその立場に甘んじておられるが、ご先祖代々に申し訳が立たないと常に嘆いておられる。私に同じ気苦労をさせるくらいなら、一度異国へ出して修行させたほうがましだとお考えなのさ。璉に戻る頃には皇帝陛下の正統が都にお帰りになっているかもしれないし」
それが単なる希望だということを、おそらく彼自身もわかっている。実際はどうなるのか、この国の未来は高名な巫女にすら読むことができない。
「というか、おまえのほうこそよくお許しが出たな。まだ十五の御曹司を異国へやるなんて」
「もう十六だ」

むすっと眉を寄せて訂正し、季隆は軽く息をつく。
「兄貴が取りなしてくれたんだ。もともと風来坊なんだし、煌に渡って異国の呪禁術を学んでくるのもいいんじゃないか、どうせ璉に居たって家には寄りつかないんだから、って。それで長老らも納得したらしい」
「なるほど。したり、だな」
おかしそうに青年が破顔する。つられて笑いながら、季隆は持っていた太刀を差し出した。
目にした青年が驚いた顔になった。
「〝鬼狩姫〟……」
「持ってっていいかって兄貴に文を出したら、しょうがねーな餞別だ、って。まあ、もう一本は家に残ってるし」
上機嫌に言って、すらりと太刀を抜き放つ。曇天の下で刃が鈍く光った。
「連れてってやらないとへそ曲げると思うんだ。こいつ、おまえのこと気に入ってるし。――なあ、弟媛？」
ぐわん、と太刀が鳴った。
まるで抗議でもしているかのようなそれに、二人は目を見交わし、笑った。
「な？」
「ああ」

港に重々しい太鼓が鳴り響く。出航が近い合図だ。
二人はしばし黙り込んだ。
奸臣に半ば乗っ取られた形の祖国。だが離れるのはやはり名残惜しい。異国に対する憧れや探究心も、荒ぶる龍神が支配する海を越える畏怖を完全には消してくれない。
けれどこの海の先にある希望の地に対する高揚は胸にあふれて止まらなかった。
「――よし」
振り切るように声をあげると、季隆は太刀を収めて振り返った。
「煌に行ったら、俺たちも一応官吏扱いなんだよな？　階級が上がることもあるんだろ？」
「歴代の留学生の中でもすごい出世をした人がいたらしいよ」
「じゃあさ、どっちが先に出世するか競争しようぜ！」
青年が一瞬きょとんとする。しかしすぐに楽しげに笑い出した。
「いいとも。面白そうだ」
二人は笑ってうなずきあうと、停泊中の船団に向かって先を争うように駆けだした。
「行こう！」

希望の国に通じる海。
きらめく波は、どこまでも続いていた。

# 第一章　御使い様との再会！

翠玉の御使い様

お元気でいらっしゃいますか。桃霞は今、夏の盛りを迎えています。

今年の夏は暑さが厳しいようですが、御使い様の涼やかなお声を思い出すだけで、すこぶる快適な日々を送れています。結蓮が夏疲れを起こさないのはあなた様のおかげです。

御使い様は、夏疲れなど起こしておられませんか？　ごはんはちゃんと食べていらっしゃいますか？　それとも、夏場になると暴れ出す不届きな妖怪たちに手を焼いておられるのでしょうか。

三日にあげずお返事をくださったあなた様から三月近くも音沙汰がないなんて、何かあったとしか思えません。

御使い様。

結蓮は、とても心配しています。

赤い紗幕で飾られた部屋で、男は陶然と目を閉じていた。
どこからか流れてくる胡弓の怠惰な音色が、また心地よい。
「ねえ、お大尽様……」
男の肩口に、ゆっくりと女がしなだれかかる。あざやかな衣装を身にまとった彼女は、酒器を傾けながら囁いた。
「お願いしますよ。あたしの後見になってくださいな。皇帝様にお会いしたいの……」
耳に寄せられた唇が、はっとするほど赤い。この世のものではないような妖艶さがただよう。
「ねえ。お願い……」
ふいに、びくりと男の身体が跳ねた。
糸が切れたように横へ倒れ込む。目は開いているが、何も映していないようだった。
「――またやったのか」
別の男の声が響き、女はぺろりと舌なめずりをして振り向いた。赤い唇があやしく艶を放つ。
声がしたのは部屋に置かれた水盤の中からだ。水面にうっすらと男の姿が映っている。
「魂を食らう暇があったら、言いつけられたことをしろ」

「ふふ……わかってますよ。主さま」
媚びるように笑んでみせると、そっと唇に指を這わせる。
「久々に出てこられたんだ。食事くらいさせておくれよ……」
微動だにしない男を見下ろし、女はクク、と凄艶に笑った。

濃い緑の匂いと、さやさやと笹の鳴る音。
あたりは一面の竹林だ。人の気配はなく、ただただ静寂が落ちている。
早朝。結蓮は愛用の太刀を手に、静かに目を閉じていた。
風が止み、竹がゆっくりとしなる。
その動きが緩慢になるのを感じ、カッと瞼を開けた。
「――はッ！」
気合いを発し太刀を走らせる。鈍い光がひらめくと、周囲の青竹が一斉に傾いた。
結蓮はなおも止まらず竹林を駆ける。母の形見である愛刀が軽やかに竹を切り裂き、笹に覆われていた空が徐々に明るさを増していく。
「まだまだッ」

額から汗が飛ぶのも構わず、竹林を蹂躙し駆け抜ける。春に生えたばかりであろう若竹すらも容赦なく刈り、あたりは見る間に無惨な有様となった。

「！」

ふいにめまいを覚え、足下がふらつく。目の前が白くかすみ、急いで頭を振った。白い風景の中に浮かびかけたきらめきが、すっと消える。

（まだ……もう少し！）

歯を食いしばり、力を振りしぼって最後の竹の群生を薙ぎ払うと、ようやく足を止めた。大きく息をつき、太刀を収める。

（また、あのめまい――）

以前からたびたび起きていたが、近頃明らかに回数が増えた。言いしれぬ不安がこみあげるのを振り払おうと結蓮は鍛錬に打ち込むようになった。

今朝も、同居している婚約者の「竹炭を作りたいから竹取ってきてもらってもいい？」という要望に応え、庭の隅に配された竹林の小山を丸裸にしたところである。

（これだけあれば、季隆どのの竹炭作りも無事に済むことだろう）

汗をぬぐって気持ちを切り替えると、結蓮は次の仕事のため急いで部屋へと走ったのだった。

水浴びして着替え、厨房へと向かう。すでに回廊にまで良い匂いがただよっている。近づくにつれ、覚えのあるわめき声も聞こえてきた。
「きさまーッ、そんなみだらな恰好で、ちい姫を誘惑するつもりかーっ」
「しょうがないだろー、暑いんだから」
「ぬううっ、許さん！　やっぱりおまえは色魔じゃー！」
厨房に入ると、いつものように小さな従者が槍を構えて季隆に突進していくところだった。
「九郎！　やめなさい」
結蓮が止めたのとほぼ同時に、季隆がひょいと九郎の攻撃をかわす。勢いあまった九郎は
「ぎゃー」と悲鳴をあげて土間に転がったが、すぐさま首根っこをつままれ引き起こされた。
「こら。ここで遊ぶな、危ないだろ」
「遊んでおらんわっ。おまえに天誅をくだそうとしとるんじゃっ！」
「へー。天誅ねえ」
じたばたと暴れる九郎をぶらさげ、季隆はにやにやしている。見た目はせいぜい二、三歳児でしかない彼にそんなことを言われても微笑ましいだけだろう。
「おはようございます。早朝から九郎がご迷惑をおかけして申し訳ありません」
「ああ、おはよう」
九郎をぶらさげたまま季隆がにっこり笑う。結蓮は訝しげに彼を見た。

「ところで、ずいぶんと身なりが乱れておいでですが……」
普段から官服ですらきちんと着ない人だが、今朝はまた、あからさまに大きく胸もとを開けている。九郎が騒ぐのも無理はない乱れぶりだ。強盗に遭って身ぐるみ剝がされかけでもしたのだろうか。
彼はにやりと笑い、袷に手をかけた。
「もっと見てみる？　結蓮ちゃんにだけ、特別」
結蓮は冷静に見つめ返すと、一礼した。
「いえ、間に合っています」
「どういう意味!?」
「私は武官です。演習中に同僚の裸など嫌と言うほど目にしています」
「一緒にするなよ！　あんな筋肉達磨たちとうるわしの婚約者を！」
目をむいて抗議した彼は、大げさに嘆き始めた。
「ちょっとくらいときめいてくれてもいいだろー。俺の渾身の色仕掛けだったのにさぁ」
ぶつぶつ言い出した彼に、結蓮もひそかに息をつく。朝っぱらから毎日軽口をたたかれる身にもなってほしいものだ。
祖父の命令で〝婚約者〟と同居するようになってから、早三月が過ぎた。
料理が趣味だという彼は厨房の仕事をすべて仕切ってくれている。上官でもある彼にだけや

らせるわけにはいかず、結蓮も簡単な手伝いをしていた。それを心配してか従者たちも押しかけるようになり、豊家別邸は毎朝こんな調子でにぎやかなのだった。

いつものように自分の仕事である根菜洗いをしようとした結蓮だが、ふと思い出して振り向いた。——ちなみに、怪力すぎて別邸にあるまな板をすべて割ってしまったため、包丁仕事は任されていない。

「季隆どの。先日仰っていた青竹を刈っておきましたので、どうぞお使いください」

「え、ほんと？　悪いね、自分で取りにいくつもりだったんだけど」

「いえ、鍛錬のついでですから。庭に置いていますので」

「ありがとね。いやー、ちょうど竹炭がほしくて……」

ほくほくした様子で厨房の裏口を出た季隆が、ぴたりと足を止める。

広大な豊家別邸、その敷地内に複数ある竹林が一つ消滅し、代わりに裸の小山が出現していた。そのふもとにはおびただしい量の青竹が折り重なっている。

季隆の顔が引きつった。

「俺に炭焼き職人になれってか」

「多すぎましたか？」

「見るからにね！」

はー、と力なくため息をついて彼は顔を覆う。

「やりすぎ……つか、朝から元気すぎ」
「申し訳ありません。汗を流したい気分だったので止まらなくて……」
「……いいよ。頑張って炭焼くよ……」
やるせなさそうにつぶやくと、彼はふいに顔をしかめて空をふりあおいだ。
「にしても……、今日も暑くなりそうだな」
まだ早い時間だというのにすでに陽は強さを増している。結蓮も思わず手を額にかざした。
桃霞の夏は、例年にない猛暑となっていた。
龍神が機嫌をそこねているのかと人々が噂する中、うだるような暑さが続いている。乾ききった蔓にぎらぎらと陽射しが照りつけ、いっそう熱気をかもしだしていた。
都の一等地に広大かつ豪華な屋敷を誇る豊家別邸も、もちろん例外ではない。
ただでさえ体力のなさを自認している季隆にはこの暑さは応えるようだ。
「やばい。このままいったら俺完全に溶けるわー」
「やはり季隆どののようなひ弱な方にはおつらい季節なのですね」
「ひよ……」
季隆が絶句する。失言に気付いて結蓮は急いで頭をさげた。
「失礼しました。非力の間違いでした」
「一緒じゃん！」

結蓮は「すみません」とさらに恐縮する。ただ心配だっただけなのに、それを伝えることすらうまくいかない。

もっとも彼のほうも、やさぐれた顔をしつつも怒っているわけではないようだ。文句をたれながらも厨房に戻って朝食作りの続きを始めた。

「そうじゃそうじゃ、おまえみたいなひよわな小僧は引っ込んでおれっ」

解放された九郎が足下でここぞとばかりに囃し立てる。季隆はといえばそれを流しながら漬け物を刻み始めた。

「おまえに言われるとむかつくなー。つか、遊んでる暇あるなら手伝えよ。四郎を見ろ、あんなに頑張ってるだろ。あと翡翠丸のことも見習え」

騒ぎにも我関せずといった様子で手伝いに励む従者たちを彼は讃えたが、九郎はなぜかえらそうに胸を張った。

「ふん！　四郎はともかく、なんでわしがあんなひよっこを見習わねばならんのじゃ」

「……若さん。こいつ甕に詰めていいすか」

無表情に九郎を一瞥する翡翠丸を、季隆が「まあまあ」となだめている。

根菜を洗い終えた結蓮は、他に手伝うことはないかと彼の手元をのぞきこんだ。

大根と青菜の塩漬けが、さくさくとあざやかに刻まれていく。その手つきの見事さに見とれてしまった。

「前から思っていましたが、なぜ季隆どのはそんなに料理がお上手なのですか？　どこで覚えられたのです？」

「師匠に弟子入りしてからずっとやってたからねー。仙道修行の時って、食えるものが限られてるからさ。自然といろいろ工夫して作るようになったんだよ」

「確か、辟穀というのもその一種ですね。やったことがあります」

仙人を志して修行する者は五穀断ちをするという。御使い様の弟子になるため結蓮も一時期励んでいた。

「他にも魚はだめだし肉もだめだし、何を食えばいいんだよっていう状態だったからねえ。つか辟穀してたの？　お嬢様なのにすごいな」

「やはり神仙道の修行は過酷なものなのですね……」

食の制限があるだけでなく、支度も自分でしなければならないとは。

結蓮は眉をひそめてうなずいていたが、ふと思いついて声をはずませた。

「季隆どの、私にも料理を教えてくださいませんか？　御使い様にお仕えするようになったら私が作って差し上げたいので」

漬け物を刻んでいた包丁が、ぴたりと止まる。

「……いや、別にしなくていいよ？　自分で作れるし……」

「そうかもしれませんが、弟子がお師匠様に食事を用意させるなんてできませんから」

「ほんとにいいって。なんか……想像したらすげー楽しそうっていうか、照れる……」

ぼそぼそ言いながら、また漬け物を刻み始める。それきり黙ってしまった彼を結蓮は怪訝に思って見つめた。

（私、何か変なことを言ったのかしら？）

竈にかけた鍋から香ばしい匂いが立ち上っている。胡麻をきかせた羹のようだ。

「も、もう、そろそろ火から下ろしてもいいと思うがの！　忙しいなら、わしが味見してやってもいいがの！」

「わかったわかった。うまいもんたらふく食わせてやるから、お利口さんで向こうで待ってろ」

季隆があしらうと、すでによだれ全開で鍋に釘付けになっていた九郎は、他の小さな従者たちと一緒にぱたぱたと厨房を駆け出ていった。

と思ったら、すぐさま転がるような勢いで戻ってきた。皆青ざめて怯えた様子だ。

「どうしたの？」

裙子の陰に隠れようとする従者たちに驚いていると、カンカンカンという鐘の音が聞こえた。

「――橘ー！」

若い女の叫び声が近づいてくる。結蓮は思わず季隆を見た。彼もすばやく包丁を置く。

「急げ！」

「はっ」

二人は慌てて幼児たちを回収し、あちこちの物入れに入れていく。本性が家付きのあやかしである彼らを見られるのはまずいのだ。

なんとか全員隠し終え、息を切らしているところに、ちょうど彼女が入ってきた。

「……あら？　どうかしたの、なんだか忙しないわね」

はたきを振り回していた彼女が、不思議そうに首をかしげる。浮き足立っているのに気付かれたらしい。すかさず季隆が意味ありげな笑みを向けた。

「夫婦の朝の交流をしてただけですよ」

「まあっ、いかがわしい！」

彼女は顔を赤らめ、非難するように季隆をにらむ。結蓮は急いで前へ出た。

「これは、公主様。何かご用でしょうか？」

「華瑛と呼んでって言ってるでしょ」

不満げに頬をふくらませた彼女に、さらにかしこまって一礼する。

「はっ。申し訳ありません、公主様」

「謝ったそばから間違えてるじゃないのっ」

華瑛がキッと季隆をにらみつけた。

「橘！　なんなの、お嬢様のこの堅物ぶりは。許嫁なのでしょう、責任をとってなんとかしな

さい！」

「ハハ……、俺のことはやっぱり下僕扱いなんですねー……」

乾いた笑いをあげる季隆の隣で、結蓮は恐縮していた。

（頭ではわかっているけれど、公主様を侍女として扱うなんて……難しい……）

現在、豊家別邸には二人の他に極秘の住人がいる。彼女、臨華瑛と李青慎だ。

皇帝の娘、つまり公主であった華瑛と彼女の宮の家令だった青慎は、とある事件がきっかけで城下へ下りた。皇后の意向により、この屋敷で預かることになったのである。

そのことには一切不満はないし、むしろ望むところなのだが、もう公主ではなくなったのだからと侍女として働き出した華瑛に対し、結蓮は対応に苦慮していた。官吏として朝廷に仕える身にとって、公主であった人に「お嬢様」と呼ばれるのはなかなか慣れないものだ。

「それにしても、朝からそんなもの振り回して、すでに汗かいてらっしゃるじゃないですか。そんなに張り切ってちゃ倒れちゃいますよ。ぼちぼちやってればいいんですよ」

あっさりとこの環境に慣れたらしい季隆は、華瑛相手にも軽く取りなしている。

「何よ、橘だってそんなだらしない恰好しているじゃない。……でも、お嬢様は涼しそうね。どうして？　朝のお稽古をしていたんじゃなかったの？」

急に視線が集まり、結蓮は急いでかしこまる。

「わかりませんが……どうやら人より体温が低いようで」

「へー。いいこと聞いた。じゃあしばらくくっついていよう」
にやりと笑って季隆が肩に手を回してくる。結蓮が見上げると、彼は満足げに目を細めた。
「いいね。ひんやりしてて最高。君のその視線も含めて」
「……そんなに暑くていらっしゃるなら、池にお連れしましょうか？」
「俺を投げ込む気か！」
顔を引きつらせた季隆だが、すぐさま笑みを浮かべてのぞきこんできた。
「でも、二人で水遊びするのも楽しいかもね。やってみる？」
「朝から何度も水浴びというのは、いかに非番の日といえど憚られます。訓練ならまだしも」
「なるほど。確かに、夜の薄闇のほうが別の意味で楽しそうだな。じゃあ今夜、池の前で熱い逢瀬といこうか」
顎を指で持ち上げられ、結蓮は真顔で彼を見つめた。
「申し訳ありませんが夜は早めに就寝することにしています。明日の任務に差し支えるようなことがあっては朝官として面目が立ちませんので」
「何その真面目な断り方！　俺のボケに突っ込んでもくれないの？」
「では公主……いえ、華瑛様。本日のご予定についてですが」
「また流したし！」
もー、と嘆く彼をよそに、結蓮はまっすぐ華瑛を見つめた。

「午前中は少しお休みいたしましょう。あまり励まれてはお身体にさわります」
「平気よ、このくらい」
「いけません。もし公主様の御身に何かあれば、この豊結蓮、命を以てしても皇帝陛下に申し開きが立ちません！　どうかご自身をお大事になさってください」
カッと目を見開いて訴える形相に恐れをなしてか、華瑛がたじろいだように後ずさる。
「こ、公主じゃないって言ってるでしょ。でも、そこまで言うなら少し休もうかしらね……」
「うんうん、それがいいですよ。じゃあ離れまでお送りしましょう」
「お供なら私が」
屋敷内といえど、広すぎるので送り届ける役が必要なのだ。いつも自分がやっていることなので結蓮はそう言ったのだが、鼻先に指を突きつけられた。
「休憩するのは君もだよ。水饅頭を冷やしてるから、朝飯の前に食べな。翡翠丸に言って水から引き上げてもらって」
「ですが」
「いいから。青慎さんにちょっと用があるから、ついでだよ」
ひらひらと手を振り季隆が華瑛を促す。そう言われては食い下がることもできず、結蓮は仕方なくうなずいた。

「そなた、いつもあんなふうにべたべたしているの？」
回廊を歩き出して間もなく、華瑛が不機嫌な顔で切り出した。
「まだ婚礼前でしょう？　破廉恥だわ。信じられない」
「華瑛様だって青慎さんとしてるでしょ？」
「なっ……、し、してないわよ！　わたしと先生は全然そんなふうじゃないんだから！　何を誤解しているか知らないけれど、手だってつないだことないのよ!?」
「あ、そうなんですか。へー」
自分から余計なことを言ってしまったと気付いたのか、華瑛がさらに赤くなる。季隆は笑ってそれを見た。
「せっかく自由のきく身になられたんだし、もっと謳歌されたらいかがです？」
「……じゅうぶん謳歌しているわよ。どんなに感謝してもしきれないくらい……」
そう言った華瑛の言葉は誰に対してのものだったのか。隣国の太子との縁談が破談となったことで負い目を感じているのだろう。実際にその件で国が害を被ったということは幸いにもなかったが、やはり浮かれる気にはなれないようだ。
それ以上責める気が失せたのか、彼女は軽く咳払いして話を変えた。
「先生に用があるだなんて、嘘でしょう。本当はお嬢様のほうを休ませようとしたのね？」

「さすが華瑛様。ご明察です」
「ふざけていないで答えなさい。わたしだってお嬢様を心配しているんだから」
にらむ視線を受け流し、季隆は言葉を選んで黙り込む。
結蓮の身体が冷たいのは龍の本性からくるものだろう。本人は気付いていないようだが、この暑さは彼女の身体に負担になっているはずだ。少しずつでも休ませたいというのが一番の思いだったが、これは華瑛に言うことではない。
「あの子、最近上の空っていうか……ちょっと落ち込んでるんですよね」
「まあ、なぜ？」
「なんというか……、待ってる手紙が届かないらしくて」
「大事な手紙なのかしら」
「そう……なんでしょうねー。そのうち立ち直ると思うので、見守ってあげてください」
言葉を濁しながらも、季隆の目は回廊の外、上空へ向かってしまう。
待ち続けているのは自分も同じだ。ある時を境にぱたりと途絶えてしまった結蓮からの手紙。彼女は神鳥に託して飛ばしたようなのに、自分のところには届いていない。それきり神鳥の行方もわからないままだ。
（まさか、蓬白山に帰っちまったんじゃないよな……）
あの神鳥はもともと師である真君の持ち物だ。まさか師が悪戯心をもよおして二人の文通を

のぞき見するため連れ帰ったのかとも思ったが、なんとなく腑に落ちない。
（あの人ならもっと別のからかい方をするはず。……なんかおかしいな）
「ねえ、橘。悪いのだけど、いくつか入り用の物があるの」
めずらしくおずおずとした声に、季隆は表情を戻して目をやった。朝からこちらの棟にやってきたと思ったら、それを伝えるためだったらしい。
「では仕事の帰りに買ってきますよ。食材の買い出しに行こうと思ってたし、ちょうどよかった。後で目録をください」
「ええ。お願いね」
客間に続く回廊に青慎の姿が見えた。執務の合間に華瑛を捜していたのだろう。
一礼した彼に季隆も会釈を返す。送り役はここまでだ。
「華瑛様。屋敷のお掃除はほどほどでよろしいですよ」
「なぜよ。侍女の仕事でしょ、ちゃんとしっかりやるわ」
怪訝そうに眉をひそめた華瑛が、はっと気付いたように息を呑む。
「もしかして、お嬢様は迷惑に思っているの？　あまりお屋敷をいじるなって？」
「いえいえ」
笑って首を振り、季隆はそっと声をひそめる。
「他の部屋が片付いたら、結蓮と同じ部屋に住めなくなるでしょ？」

華瑛が目を瞠る。それを笑って見やり、踵を返した。
「……意外とぞっこんなのね……」
呆気にとられたようなつぶやきが聞こえたが——まあ、誤解だ、と訂正するほどのことでもないだろう。

夕暮れ時の玉天大街は都人でにぎわっていた。
「結蓮ちゃん、ほんとに大丈夫？　さすがに重いんじゃないか？」
たじろいだ顔でのぞきこんでくる季隆に、結蓮は冷静に答えた。
「ご心配には及びません。もとをただせば私が食べ過ぎるせいですし、これくらいは自分で運びます」
「いや……君が力持ちで俺は助かってるけど……」
結蓮が背負った大葛籠には様々な瓜や南瓜、茄子などが山と積まれている。通常なら馬に運ばせるような大荷物を涼しい顔で担いでいる許嫁に彼は面食らっているようだ。
翌日。二人は仕事の帰りに買い出しにきていた。
一人で暮らしていた頃は自分のための買い物などしたことがなかった結蓮だが、季隆が同居

するようになってからはこうして一緒に街へ来ることも多くなった。

季節柄、街のあちこちに蓮花を象った飾りや吊り灯籠、提灯などが散見している。都の人々は暑さを厭うとともに、過ぎゆく夏を名残惜しみ、楽しんでいるのである。

玻璃に色をつけて蓮花を描いた置き灯籠が並ぶ店先を眺めていると、ふいに手をとられた。

「ちょっと寄り道しよう。世の恋人同士ってのはぶらぶら街歩きなんかするもんだよ」

「いえ、私とあなたは恋人同士では――」

「いいからいいから！」

楽しげに手を引かれ、仕方なく彼について行く。食材の買い物も終わったし、どうせ後は屋敷に帰るだけなのだ。

路地から入ったのは按石同という街だった。移り住んできた異国人の多いところで、他の同のような同職種が集まった街と違い、様々な業種の店や露店が多い。雑多だからこその活気にあふれているようだった。

結蓮は興味深く眺めながら歩いていたが、ふと一つの露店に目を奪われ足を止めた。

台に並べられているのは髪飾りだろうか。結蓮が知る宝石や貴石で出来た物と違って布製だ。いろんな色や模様の布地を組み合わせて作られており、一つとして同じものがない。その素朴さが新鮮で惹かれた。

（可愛い……）

見入っていると、ひょいと誰かの手がそれをすくいあげた。
「これ？　ああ、可愛いじゃん。買ってあげようか？」
「！」
結蓮は慌てて目をそらす。普段はこういうものになるべく視線をやらないようにしているのに、油断してしまった。
「いえ……、特に興味がありませんから」
「え、これ見てたんじゃないの？　こっち？」
「それではなく、こちらの……」
うっかり訂正しかけて、はっと口をつぐむ。季隆が楽しげに笑い、それを結蓮の耳の上あたりにかざした。
「うん、似合ってる。おねーさん、これくださーい」
「あ……っ」
さっさと代金を払おうとしている彼に、結蓮はますます慌てた。思わず腕をつかんで止めてしまう。
「あの、困ります。本当にいりませんから」
「ほーぉ？　そのわりにさっきから目が釘付けになってるみたいですけど？」
季隆がそれを目の前にぶらさげ、ゆらゆら揺らす。結蓮はキッと顔に力を入れて見返した。

「私は武官です。そのような可愛らしいもの、必要ありません」
「はいはい。あ、おねーさん、代金ここ置くよー」
店番の老婆に愛想よく声をかけ、季隆はそれを結蓮の髪に挿した。
抗議が聞き入れられず反論しようとした結蓮だったが、視界の端に揺れるものが映り、つい口をつぐんでしまった。
「先に言っとくけど、封印部屋に持ってくのは禁止ね。俺の代わりだと思って肌身離さず持ってること。もちろん寝る時もだよ」
「……」
「ん、もしかして遠慮してるの？　俺の薄給でもこれくらいは買ってあげられるよ？」
「いえ、そうではなく……」
結蓮は髪に挿したそれをそっとはずした。掌におさまるほどの小ぶりの飾りを見つめる。
以前はこういう小物をたくさん持っていた。結蓮が喜ぶので叔父がしょっちゅう買ってきてくれたのだ。その思い出も愛しかったし、可愛いものを観るのが純粋に好きだった。
けれど今、それらはすべて一つの部屋に封印してある。武官になる時、けじめとして自分でそうしたのだ。
「こういったものを見ると、気持ちが揺らぐような気がして……。私は太子殿下と煌国の御たためだけに心を向けていたいのに、他に惑わされることがあっては申し訳が立ちませんし」



太子を護るため、そしていずれ彼が治める煌国を護るために結蓮は武官を志した。その誓いのためなら他には何もいらないし欲しいとも思わない。その気持ちに嘘はなかった。

だから、こんなふうに可愛い小物を贈られたことを嬉しいなんて思ってはいけないのだ。

腰に手を当てて見つめていた季隆が、軽く息をついて小首をかしげる。

「強情な子だね、ほんとに。武官が可愛いもの好きで何が悪いんだ」

「悪いです。こんな……可愛らしいものにうつつを抜かすなど、武官にあるまじき愚行です」

「極端すぎ！　うつつ抜かさなきゃいい話だろ」

「いえ、近衛たるもの、殿下以外のことに意識が向くなどあってはならないことですから」

「……最近、ほんとに太子殿下のこと好きすぎだよね」

「近衛が殿下をお慕いして何が悪いのですか？」

不満げに目をすがめていた彼だが、やがて苦笑まじりにため息をついた。

「わかったよ、もう。好きなようにやりな。それだけ強く心に決めた道なんだ、やり遂げればいいよ。俺が傍で見ててやるから」

結蓮は驚いて彼を見つめた。

この時世、名門に生まれた娘に向かってそんなふうに言ってくれる人はまずいないというのに。それに――。

「え？　俺、なんか変なこと言った？」

きょとんとしている彼に、結蓮は急いで首を振った。
「いえ……、びっくりしてしまって。一瞬、御使い様に言われたような気がしたもので……」
ぎくりとしたように季隆が目をそらす。
「へ……へぇー。御使い様ってのはそういうこと言う人なんだー」
「はい。いつも私を励ましてくださいます。任務で怪我をしたりするのは心配だけれど、君の決めた道なんだから応援している、と。そんなお言葉をいただくたびに力がわいてきて、自分に自信がついたような気がしました。少しだけですが……」
御使い様とやりとりした手紙を思い出し、結蓮は頬を上気させた。しかしすぐに目を伏せる。
「どうしてお返事をくださらないのでしょう。そんなにお忙しいのでしょうか。以前はお手紙をお送りしたら遅くても翌々日までには届いていたのに……」
「……必死で返事書いてすぐ出してたからね……」
「え？」
げほん、と季隆が咳払いする。
「まあ、いろいろあるんじゃないの、御使い様にも。ちょっと遠いところにいて返事が届くのに時間かかってるとかさ」
「ということは、今まではすごく近くにいらっしゃったということでしょうか？」
「い、いや、そんなに近くにはいないんじゃないかな！　たぶん！」

なぜか彼は急に慌てだした。それを怪訝に思いながらも、結蓮はしゅんとしてうつむく。
「この前のお手紙に何か失礼なことを書いてしまったのでしょうか。それでお怒りになってお返事をくださらないのかも……」
「それはないと思うけど……。ちなみに、どんなこと書いたの？」
答えようとして、結蓮は口をつぐむ。
最後に御使い様に出した手紙には、崇怜との縁談について相談していたことへのお礼と、それにまつわることをいろいろと書いた。現在の婚約者である季隆とのことも。
互いの事情から偽装婚約しているだけなのに、もし迷惑でないのなら、もう少し許嫁でいてほしい——と。
「もしや……あんな都合のいいことを書いてしまった私の心根に対してお怒りなのでは……」
「何、都合のいいことって」
「見方を変えれば、とんだふしだらな言いぐさです。もし聞かれたら季隆どのもきっと二度と私と口をききたくなくなるような……結婚前の娘にあるまじきことを……」
「え……何書いたの、ほんとに。変な想像しちゃうじゃない……」
「もうおしまいです！　御使い様に嫌われてしまっては生きる価値などありません！」
「だから、嫌ってないって！」
「どうして断言できるのですか!?」

「いや、た、たぶん……」
青ざめて取り乱す結蓮に季隆はたじろいでいたが、やがて呆れたように息をついた。
「そんなに好きなのかねえ。顔も覚えていないような相手を」
「どんなお顔をされていようと御使い様がすばらしい方であることに変わりはありません」
「とかいって、しっかり想像してるだろ。きりっとしてて体格も立派で凛々しい感じってさ」
季隆のぼやきに、結蓮は瞬いた。憧れるあまり御使い様宛ての手紙にはそんなことを書いてしまったが——彼に話したことがあっただろうか？
「なにゆえあなたがそれをご存じなのですか？」
はっとしたように季隆が目をそらす。
「な、なんとなく……。勘だよ、勘。ハハハ」
「それにしてはぴたりと符合したような気が」
「ああもうっ……、じゃあ訊くけどな！」
自棄のように彼は勢いよく向き直った。
「もし御使い様が俺みたいな軽い男だったらどうするの。今までと同じように好きでいられるか？」
「……え……」
思いがけない問いに結蓮は目を見開く。なんの冗談かと思ったが、季隆は意外なほど真面目

な顔で、どこか緊張したようにこちらを見ていた。
と、奇妙な沈黙をやぶるように、のんびりした声が割り込んだ。
「――そこのお二人さん。よかったら相性占いでもしていかないかい？　お安くしとくよ」
見れば、道端に腰を下ろした占者がにこやかにこちらを見上げている。
話の腰を折られて結蓮は言葉に詰まったが、季隆のほうは面白そうに占者の手元をのぞきこんだ。
「へえ。当たるのかい、おじさん」
「大きな声じゃ言えないがね。これまでわしが見た恋人同士はすべて幸せに結婚したよ」
「そりゃ聞き捨てならないな。んじゃ、ちょっと見てもらおうか」
あっさりと乗り気になった彼を結蓮は驚いて見つめた。
「季隆どの、本気ですか？」
「俺こういうの信じる性質なんだよねー。あ、結蓮ちゃんは聞かないでね。結婚生活について詳しく訊いちゃうから恥ずかしいし」
ぐいぐいと背中を押され、追いやられてしまう。抗議しようと振り向くと、鼻先に指を当てられた。
「すぐ終わるから、ちょっと待ってて」
有無を言わさない笑顔で言うと、彼は踵を返して占者のもとへ戻っていった。

相変わらず自由気ままな人だ。振り回されるのはもう慣れているので、仕方なく待つことにした。

行き交う人々を避けるように隅に寄り、ずっと手にしたままだった髪飾りを思い出して、あらためて見てみる。

けして華やかでも高級品でもない生地でできたものだが、温かみがあって可愛らしい。思わず口元がゆるみそうになり、急いで引き締めた。

（いけない。大きな行事を控えている時なのに、こんなものにうつつを抜かしていては）

そう思いながらも、せっかく買ってくれたのだからと、おずおずと髪に挿してみる。季隆に見られていないかとそっと見てみたが、彼は占者と話し込んでいる様子だ。

ほっとしたものの、彼らの表情に気づいて首をひねった。

（……？　なんだか深刻なお顔をされているようだけれど……）

そんなにも相性占いの結果が悪かったのだろうか？　それにしてはずいぶん熱心に話しているような――。

「ありゃあ情報屋ですね」

唐突に後ろで声がして、はっと振り向く。

男が一人、のんびりした様子で煙管を吹かしていた。彼のまとった丈の短い袍に絵の具らしきものがついているのを見て、結蓮は目を見開く。見知った顔だ。

「結蓮さん、でしたよね？　季さんの婚約者の」
「確か、絵師の……」
「一哉です。どうも」
挨拶のつもりなのか男は煙管を軽く持ち上げてみせた。
彼は季隆が以前住んでいた長屋の住人で、結蓮も一、二度顔を合わせたことがある。季隆と同じく琥国の出身で、彼と親しい間柄のようだった。
それにしてもあの占者が情報屋とは意外だ。結蓮は驚いて彼を見つめた。
「情報屋というと、季隆どのは何か調査を？」
「さあ、それは知りませんが。でもちょくちょく使ってるみたいですね。捜し人でもしてるんじゃないですか」
興味がなさそうに一哉は煙管を口へ運んでいる。
結蓮は怪訝に思いながら季隆へと目を戻した。封陰省の任務という話は聞いていないし、個人的な調査だろう。あんなに真剣な顔つきで、一体何を調べているのだろうか。
「にしても、こんなところに婚約者を一人放っておくなんて、季さんもひどいですねー。おれみたいな絵描きにさらわれて美人画描き放題にされたらどうするつもりなんだか」
「……一哉どのは、お買い物ですか？」
ここは長屋からそう遠くはないが、手ぶらで通りかかるにしては距離がある。さりげなく彼

の身なりを見やりながら結蓮が訊ねると、一哉は笑って首を振った。
「お客を送りにきた途中ですよ。ほら、あの娘たち」
指さすほうを見れば、若い娘たちが数人で楽しげに話している。どこかで見たような、と結蓮が思っていると、彼女たちは何かに気付いたように声をあげた。
「ねえ、あれ季さまじゃない⁉」
「ほんとだわ！　季さまがいるわよ！」
きゃあきゃあとはしゃぎながら人をかきわけ、占者と話し込んでいる季隆のほうへ駆けていく。背中に抱きつかれた彼が「うおッ」と叫んで前にのめったのが見えた。
「あぶねーな、何す……、あれ？　何してんだ、みんなで」
目をむいて振り返った季隆が驚いた顔になる。どうやら知り合いのようだ。
「季さまー！　久しぶりね！」
「もう、どうして最近きてくれないの？　みんな寂しがってるわよ」
「ああ、悪い悪い。ちょっと忙しくてさ」
「そんなこと言って、ほんとは許嫁様に叱られるのが怖いからじゃないのぉ？」
「ははっ、大人をからかうんじゃないよ」
彼女たちに囲まれた季隆が親しげに言葉をかわしている。
遠くから眺めていた結蓮は、似たようなことが以前にもあったのを思い出した。あれは確か

花街へ行った時のことだ。

「もしやお客人というのは花街の方ですか？」

「ええ。正確に言うとあの娘らは付き添いですがね。新しい絵姿を描いてほしいってんで急に訪ねてきて……最近多くてねえ」

花街で生きる妓女が自身を売り出すために絵姿を作って客に配るという話は聞いたことがある。腕のいい評判の絵師のもとへは依頼が引きも切らないという。

一哉はゆるりと煙を吐き出しながら、軽く背後へ目をやった。

「いいんですか、紅夏姐さん。あの娘らみんな行っちゃいましたよ」

ふっ……、と甘い香りが鼻をくすぐる。

引かれるように結蓮が振り向くと、若い女が一人、ゆったりと歩いてくるところだった。赤い唇にうっすらと笑みを浮かべ、夕陽に照らされた頬には長い睫毛の影が落ちている。彼女の妖艶な雰囲気に結蓮は一瞬どきりとした。

彼女は一哉の軽口に微笑みだけで応じ、ふと結蓮を見た。

（……え？）

意味ありげに見つめられた気がして不思議に思っていると、彼女の後ろから少女が一人、おずおずとついてきたのに気付いた。同じく目にしたのだろう、一哉が眉をあげる。

「あ、紅淑さんいたのか。ごめんよ」

「は、はい……」
大人しそうな顔をした彼女は、人混みが心細いのだろうか、紅夏と呼ばれた美女にぴたりとくっついている。
そこへ、妓女たちが季隆を囲んでこちらへ連れてきた。一哉が冷やかすように声をあげる。
「季さーん、相変わらずおもてになってんだねー」
「いやいや、それほどでも……つか、なんでおまえまでいるんだよ？」
季隆は訝しげに一哉を見たが、すぐにはっとしたように口をつぐんだ。
彼の目は紅夏という妓女に向けられている。紅夏もまた、じっと季隆を見つめていた。
「……都にお戻りだったのですね」
ぽつりと紅夏がつぶやく。
ためらうような儚げな声に、季隆も硬い顔でうなずいた。
「ああ。……久しぶり」
懐かしさと、かすかな苦さのにじむ声。
まるで別人のような反応に、結蓮は眉をひそめて彼を見つめた。

早朝の厨房には、いつものように湯気と煮炊きの匂いがたちこめている。
小さな従者たちは早々に追いやられたため静かだ。翡翠丸も畑に行っているのでどことなくがらんとしていた。
「あー……ねみー……」
何度となくあくびをかみ殺しながら季隆が杓子で鍋の中身をかきまわしている。明らかに寝不足の顔でだらだらと手を動かす彼を、結蓮はしばらく見守っていた。
(目が死んでいる……大丈夫かしら)
あまりにもだるそうなのでさすがに心配になってきた。いつにもまして具合が悪そうだ。
「お疲れなら無理して朝食をお作りにならなくても……。私や従者たちのことはお気になさらなくて構いませんから」
「はぁ～……？　俺と一緒に暮らしてて朝飯食わないとか許さないから」
言っていることはなんとなく男らしいのだが、瞼は今にも閉じようとしている。無理をしているのがありありとわかった。
横顔をそっと盗み見た結蓮は、数日前のことを思い出していた。
(季隆どのの様子がおかしいのは、やっぱりあの妓女のことが関係しているのかしら)
あの後、すぐに彼女らと別れて家路についたのだが、季隆はいつになく口数が少なかった。加えて、あの日を境に物思いにふけることが多くなった。朝が弱いのはもともとだが、さらに

度合いが増して、ひどくけだるそうにしている。以前の怠け者具合とは少し様子が違う気がするのだ。

訊いてみようかと散々迷ってから、結運は思い切って口を開いた。

「近頃、毎晩のように寝不足でいらっしゃるようですね」

「んー？　そうだねー、俺って繊細だから」

「……なぜそんなに疲れておいでなのですか？　何か理由が？」

聞き流しているふうだった季隆が、にやりと笑って目を向けてくる。

「気になるなら、今夜俺の部屋に来てみる？」

「よろしいのですか、お邪魔しても」

「いいよ。そのかわり、朝まで帰さないからね」

意地悪く笑って顔を近づけてきた彼を、結運は真顔で見つめ、一礼した。

「すみません。枕が変わると眠れないので」

「そんな断り方!?」

杓子を手にしたまま彼が大げさな調子で嘆き出す。

「もー、全然艶っぽくならないじゃん。愛し合う許嫁同士が二人きりで密談してるってのに、なんなのよこの空気ー」

「……」

「しかも無視かい！　せめて突っ込んでよー。俺そろそろ心折れる……、どうした？」
急に悪心がこみあげ、結蓮はうつむいて口を押さえた。また貧血だ。こんな時に、といまいましく思いながら声を絞り出す。
「ごめんなさい……、ちょっと、気分が……」
「えっ、大丈夫？」
慌てたようにのぞきこまれ、こくりとうなずく。だが実際はめまいがひどくて声すら出せないほどだった。立っていられなくなり、伸びてきた手に思わずしがみつく。
季隆が緊迫した声で何か言っていたが、それもすぐに聞こえなくなった。

「結蓮ちゃん、大丈夫か？」
胸にもたれかかった結蓮はぴくりとも動かない。意識を失っているようだ。
季隆は厨房内を見回し、食材を置く低い作業台に目を留めると、彼女をそこへ横たえた。脈をとり、眉をひそめる。
（やっぱり、かなり弱ってる……）
普段は勇ましいことこのうえない彼女だが、近頃は貧血を起こすことが増えた。肉体がついていけていないのだ。

（早くどうにかしないと、このままじゃこの子はもたない）

青白い顔で横たわる彼女を見下ろしていると、焦燥が胸にこみあげた。

龍神の本性を持つ結蓮を人のままこの世に留め置くすべを見つけられず、彼女の体力が失われていくだけの日々が続いている。こんなことで何が呪禁師だろうかと自分で自分が歯がゆいが、今は何もできないのが現実だ。

とりあえず冷たい布で汗をぬぐってやろうと、腰をあげかけた時だった。

力なく目を閉じていた結蓮が、突然、がばっと起き上がった。かと思うと勢いよく抱きついてきたのだ。

「……っ!?　ちょっ……」

いきなり唇を押しつけられ、避ける暇もなかった。重心がくずれていたせいで、そのままもつれるように土間に押し倒される。

（な――）

しばらくしてようやく顔を離した彼女を、唖然と見上げた。

先ほどとうってかわって上気した頬、いきいきと輝く瞳、にんまりと曲げられた赤い唇――。

「……おまえか！」

きゃははは、とけたたましく結蓮が笑う。いや、彼女の中にいる精霊が。

「あー、おっかしい。さっきのあんたの顔ったら！　よっぽどこういうのしたかったのねー」

「……おまえにされても嬉しくねえんだよ……」
思わずうめく。うっかり喜びかけた自分が情けない。
だがこれは好機だ。彼女が出てくるのをずっと待っていた。
「――そこから出てこい。鬼狩姫」
璉ことばに変わったのに気付き、結蓮の中にいる鬼狩姫はしらけたような顔をした。
「ふん、わざとらしい。煌ことばで話したってわかるわよ。あたしだって何年もこっちにいるんだから」
「じゃあ煌ことばで言ってやる。とにかく出てこい」
「そんなにこの子を助けたいの？　ずいぶん必死ねえ。あんたのそんな顔見たら出たくなくなっちゃうわ」
鬼狩姫が薄く笑みを浮かべる。季隆は彼女の腕をつかみ、すばやく引いた。
体勢をくずした彼女を逆に押し倒すと、暴れようとするのをすかさず押さえ込む。
「何すんのよ！」
「他にも訊きたいことがあるんだよ」
土間に転がった鬼狩姫は形勢逆転されて悔しげににらみつけている。それを鋭く見つめた。
「あいつが死んだ時、おまえは一緒にいたよな」
「……」

「見たんだろ？　あいつを殺ったのは誰だ」
この五年、ずっと捜してきた。修行中ですらそのことばかり考えていた。
鬼狩姫の瞳に怒りともつかない感情が灯る。
「あんたになんか絶対教えない」
「なんでだよ」
「あんたがあいつを煌に連れてこなかったら、あいつが死ぬこともなかったのよ！　あんたなんか大っ嫌い！」
癇癪を起こしたように鬼狩姫がわめく。憎々しげに季隆をにらむと、ぷいっと顔を背けた。
昔からきかん気な精霊だった。自分よりもうまく手懐けていた親友を想い、季隆はしばし黙り込む。
「……そうだな。確かに俺のせいだ。だから俺が仇をとってやる」
鬼狩姫が拒否するかのように目を瞑る。
このままうやむやにはさせない。彼女の腕をつかみ、季隆はあらためて命じた。
「答えろ。景親を殺したのは誰だ！」
ぱっ、と鬼狩姫が目を開ける。
まじまじと見上げてきた彼女が、おもむろに口を開いた。
「……季隆どの」

「えっ」
「重いのですが」
訝しげに眉を寄せている彼女からは、あだめいた雰囲気も表情も消えている。
いつのまにか結蓮に変わっていたのだ。気付いた瞬間飛び退いた。
「いや、ちが……っ、違うんだよ、これには深いわけが！　いくらなんでもこんなところでそんなことしないって！　ほんとに！」
「……」
結蓮がゆっくりと起き上がる。
これまでの例からして殴られてもしょうがないと季隆は覚悟した。しかし彼女は無言のまま難しい顔つきで見ているだけだ。
やがて、すっと立ち上がると何事もなかったように踵を返した。
「服が汚れたので着替えてきます」
「あ……」
すたすたと出ていったのを見送り、季隆は土間に座り込んだままがくりとうなだれた。
（完全にただの変態だと思われた……）
鬼狩姫は逃がすし、許嫁と意思の疎通もままならない。つくづくついていない朝だった。

皇后宮の庭に広がる池には、蓮の花が満開に咲いていた。
窓辺にいくつも下げられた風鈴が玲瓏たる響きを奏でている。室内にただようのは清涼感のある香。卓上には、氷室から出した氷をくりぬいて器にし、果物を飾っている。玻璃の器に盛られた蜜がけ削り氷も並んでいた。
これでもかと言わんばかりの納涼演出は、病み上がりの皇后を案じて太子がさせたものだ。
「まあ、嬉しいこと。あたくしのために太子がねえ」
目を細めて喜ぶ豊皇后に、太子琮成がかしこまって応じる。
「今年の夏は特に暑さが厳しい様子。くれぐれもご自愛くださいますよう」
「ありがとう。これだけあればじゅうぶん涼めますよ」
「溶けないうちに削り氷をどうぞ。それとも果物のほうがよろしいですか？」
琮成が自ら母の世話を焼くのを、控えた結蓮は微笑ましい気持ちで見守っていた。
今日は皇后に招かれて蓮花の観賞をするはずだったのだが、太子が逆に皇后をもてなす形となった。しかも内密の計画とあって、皇后の驚きと喜びは倍だったようである。
吹き抜けになった部屋の前に広がる池のほとりでは、耀妃、景妃、麗妃の三人の太子妃たち

が皇后のために蓮花を摘もうと奮闘している。きゃっきゃと華やかな様子を見るのもまた皇后の楽しみのようだ。

「皇后様はお元気そうで、嬉しいかぎりですね」

隣に控えた秦少傅の言葉に結蓮もうなずいた。この尊き方々を見ているだけで幸せな気持ちになれる。皆、結蓮にとって大切な人ばかりなのだ。

「秦少傅も……無事に復帰されて何よりです」

春先に起きた事件で負傷し、長らく療養していた秦少傅だが、また太子の守り役として東宮府に戻ってきた。封陰省付きになった結蓮はあまり東宮府に行く機会はなくなってしまったが、彼が復帰したと聞いた時はやはり嬉しかった。

ありがとうございます、と秦少傅が微笑んで会釈する。

「私がいない間に、太子殿下はまた一段とご立派におなりのようで」

「殿下は以前からご立派ですが、輝きは日々増しておいでです」

「ふふ、そうですね。そういうあなたはお変わりないですね、豊舎人」

「はっ。おそれいります」

「……でも、気がかりがおありのようにも見受けられますね。何かありましたか」

秦少傅がふと眉をひそめたので、結蓮は急いで首を振った。

「いえ、何も。——蓮花節が近いので浮き立っているだけです」

「そうですか？　ならいいのですが」
ごまかしたのを鵜呑みにしてくれたのか、彼はそれ以上追及してはこなかった。池のほうを見やり目を細めている。
「蓮花節が過ぎればこの暑さも弱まるでしょう。そうすればもう秋ですか。早いですね」
「儀式の準備は滞りなく進んでいるのでしょうか」
「そのようですよ。そうだ、そういえば今年の蓮女舞は例年とは少し違った趣向があるとかで――」
秦少傅が広げた時事話に聴き入りながら、なんとなく空を見上げる。
この猛暑も、時がくれば嘘のようになくなってしまうのだろう。

皇后宮を辞して封陰省へと戻りながら、一人になった結蓮は秦少傅に指摘された〝気がかり〟について考えていた。
頭を占めているのは先日の厨房での出来事だ。
（あれはなんだったのかしら……）
景親を殺したのは誰だ。――季隆は確かにそう言った。
初めて見るような顔をしていた。感情を押し殺したように冷たくて、でも燃えるような怒り

をたたえた瞳。見てはいけないものを見てしまった気がして、とっさに問いただすことができなかった。

（〝景親〟……。璉の発音だし、季隆どのと同郷のお知り合いだろうけれど……）

なぜ急にあんなことを叫んだのだろう。一体彼は、誰に対してそう言ったのだろうか。

（私に対して仰ったわけではないのは、あの後の態度からわかる。というより、近頃のあの人はやっぱり少し様子がおかしい気がする……）

彼が秘密を抱えているらしいのは以前からうすうす気付いていた。だが明らかに様子が変わったのはあの妓女に会ってからだ。やはり何か関係があるのだろうか。

考え込みながら回廊を歩いていると、前方から若い官吏が駆け寄ってきた。

「失礼します。豊舎人でいらっしゃいますね？　お手紙を預かってきたのですが」

「……？　ありがとうございます」

こんなところで誰からだろう。封陰省に届けず直接本人に渡すとなると、よほどの急用だろうか。怪訝に思いながら結蓮は受け取ったが、中身を見るなり目を疑った。

几帳面な字でつづられていたのは、衝撃的な文面だった。

〈私の可愛い結蓮

長らく文を返すことができなくてすまなかった。

実は今、故あって煌国の朝廷に来ている。内宮の桃花園にいるから、これを読んだら会いに来てほしい。
二人だけで存分に積もる話をしよう。楽しみに待っているよ。

〈翠玉の御使いより〉

（うそ……！）
便箋を持つ指がふるふると震え出した。
ずっと案じていた御使い様から返事が来ただけでも驚きなのに、まさかご本人様がこの朝廷に来ておいでだなんて。
「あのっ、これを渡されたのはどんな方でしたか⁉」
勢い込んで訊ねると、若い官吏は少したじろいだようだった。
「さあ、どこぞの官吏らしい方だとしか……でもその方も誰かに頼まれたようでしたよ」
「……っ」
憧れの御使い様に会える。しかも今日、これから！
頬が熱くなっていくのがわかる。喜びと興奮で、どうしようもなく胸が騒いでいた。

緊張のあまり二、三度ばかり塀や門に激突して破壊し、近隣の官吏らに大目玉をくらいながらも、結蓮はどうにか待ち合わせ場所までたどりついた。

春の名所である桃花園は、生い茂る緑の合間を風が吹き抜け、涼やかだ。移動中らしい官吏が時折行き交うだけで静かだった。

人影を見かけるたびにどきどきしながら確認してみたが、それらしき人物は見当たらない。さらに奥へ進むと、池にかかる橋に誰かがもたれているのが見えた。

（もしや、あの御方が！）

ここからだと木々の緑に隠れて顔がわからない。結蓮はぎこちない足取りになりながらそちらへ駆けた。

橋の欄干にもたれ、たたずんでいる後ろ姿。なんとも絵になっている。すらりとして逞しそうな身体は立派な袍に包まれ、上品さと清廉さがただよってくるかのようだ。

（ああ、なんて神々しい……！）

緊張と感動で軽くめまいを覚えていると、気配に気付いたのか彼が振り向いた。

こちらを見て、嬉しそうに微笑む。

「結蓮！　待っていたぞ」

一瞬、結蓮はぽかんとした。

（……え？）

にこにこしながら近づいてきたのは愛しの御使い様ではなく、皇帝の第三皇子、雪南王崇怜だったのだ。

「……これは、崇怜様。とんだご無礼を――」

すぐに我に返り、急いで跪こうとしたが、すかさず腕をとられてそれを阻まれた。

「そのようなことはしなくてよいと言っているだろう？　私とおまえは夫婦になるのだから」

「はっ。崇怜様、それにつきましては私はご辞退申し上げ――」

「それにしても久しぶりだ。なかなか会いにきてやれず、寂しい思いをさせたな。許せ」

眉をひそめて申し訳なさそうに言われ、結蓮は沈黙した。まともに会話が成立しないのはいつものことだが、今ここで遭遇するとはついていない。

ここしばらくの間、彼は忙しかったようで姿を現さなかったのだ。おかげで平穏な日々が続いていたのだが――。

「どうした、そわそわして。何か気になることでもあるのか」

不思議そうに見つめられ、少し迷う。一刻も早く御使い様に会いに行きたいのはやまやまだが、皇子である崇怜と行き合ったからにはさっさと御前を辞するわけにもいかない。

「はっ。実は人と待ち合わせをしておりまして」

「それならば問題はない。おまえをここへ呼んだのは私だ」

「……え……？」

自分を呼んだのが彼？　御使い様に呼ばれてここへ来たはずなのに。
「今まで黙っていてすまなかった。事情あって言えなかったんだが……翠玉の御使いは私だ」
結蓮は目を瞠った。静かに笑みをたたえ、崇怜はじっと見つめている。
「ひそかにおまえのことを見守っていた。あの日から、ずっと」
手を取られ、結蓮の胸がどくどくと騒ぎ始めた。
憧れの人が、実は昔から知る高貴な方で。ずっと見守っていてくれた――。
でも、まさか。これまで彼はそんなそぶりを見せたことがなかったというのに。
嬉しいはずなのに戸惑いのほうが大きくて、結蓮は動揺しながら声を押し出した。
「お戯れはおやめください、崇怜様」
「信じられないか……。まあ、それも道理だな。では、これを見たら信じるか？」
崇怜は懐から一通の書状を取り出し、開いて見せた。
「おまえが私にくれた文だ。見覚えがあるだろう？」
「！　これはっ……！」
結蓮が最後に御使い様に出した手紙だった。それきり返事がこなくなったため、何か失礼なことを書いたろうかと気になって下書きを何度も読み返したから、間違いない。
「なぜ崇怜様がこれをお持ちなのですか!?」
「だから、おまえが私にくれたからだよ。さっきから言っているじゃないか」



おかしそうに崇怜は笑っている。その笑顔は、思い描いていたとおりの初夏の風のような爽やかさだ。

（このお手紙を持っていらっしゃるのは、この世広しといえど御使い様だけ……）

あまりに突然すぎてにわかには信じられなかったが、この手紙が何よりの証拠だ。胸にじわじわと広がっていくものがあった。

結蓮は高揚を抑えつつ、その場に跪いた。

「御使い様、お会いしとうございました。豊結蓮、及ばずながら、これより御使い様にご恩をお返しすべく尽くしてまいります――！」

その日、いつになく季隆は真面目に仕事をしていた。いや、させられていた。

「はー……しんどい……」

ため息をつきながら、だらだらと書類に印を押していく。これでも一応次官だ、事務仕事もある。たまっているのを見つかって部下に叱られてしまい、今日中に片付けるよう厳命されていた。

「結蓮ちゃんは厳しいよなー。皇后様に呼ばれて見張り番ができないからって、まさかこの俺

を椅子に縛り付けて出ていくなんて……」
「そのわりになんか嬉しそうっすね、若さん」
代わりに見張り番を頼まれた翡翠丸が無表情のまま応じる。季隆は手を止めて考えた。
「なんなんだろうな。あの冷たい目で見られるとぞくぞくするんだよ」
「あー……やっぱ変態なんすね」
「しみじみと言うな」
言い返しながらも思わずため息が出る。ここ最近、結蓮とは微妙な関係なのだ。
早朝の土間で押し倒した時のことを彼女は何も言ってこない。だが何かあやしんでいるようなのは気がついていた。それでもあえてこちらも話さないので、二人でいると妙な空気になってしまうのだ。
その件でふと思い出し、季隆は書類を整理している従者を眉を寄せて見た。
「おまえ、あの子に言うなよ。あのこと」
「あのことって、若さんが毎晩花街に入り浸って励んでることっすか？」
「悪意のある言い回しすんな！　もし聞かれたらどんだけ軽蔑されるか――」
とその時、結蓮がばたばたと書庫に駆け込んできたので、季隆はぎくりと口をつぐんだ。
めずらしく慌てているようなので驚いて見ると、なんと彼女は目に涙を浮かべている。頬を上気させ、息を切らし、尋常ではない様子だ。

「す、季隆どの……」
「どうした？」
急いで翡翠丸に縄を解かせると、季隆は立ち上がって結蓮をのぞきこんだ。これまためずらしいことに彼女はかすかに震えている。
「じ、実は、大変なことが……」
「何があった？　お茶でも飲んで落ち着いて」
きっと大事件が起きたに違いない。緊張がこみあげ、自分も落ち着こうと湯呑みをあおる。
結蓮は受け取った湯呑みに軽く口をつけただけで、もう我慢できないといったように勢いよく顔をあげた。
「たった今、翠玉の御使い様とお会いしましたっ！」
「ぶッ!!」
思わず茶を噴いた。
翠玉の御使いと会った？　――ここにいる、自分と？
（ちょ……、いつばれた!?）
突然すぎて冷静になれない。かなりの綱渡りではあったがなんとか隠してきたのに。
うろたえながら彼女を凝視するが、黙っていたことを責めるそぶりもなくなぜか嬉しそうだ。
ぎゅっと湯呑みを握りしめ、目を輝かせて続けた。

「翠玉の御使い様は、なんと、崇怜様でした！」

一瞬、思考が停止した。

御使い様が――崇怜皇子？

（……はあああぁ!?）

いつでも自信たっぷりな美丈夫皇子の顔が浮かぶ。彼女に熱烈求婚中の彼だが、最近姿を見せないので油断していた。

「え……と……ごめん、今、なんて言ったの」

動揺を収めようと口元をぬぐったものの、顔が引きつってしまう。本当に、まったく意味がわからない。

しかも当の結蓮はといえばほんのりと頬を赤らめている。恥じらいと喜びの混じった、ものすごく可愛らしい顔をして。

「やはり季隆どのも驚かれましたか？　私もです。まさかこんなに身近にいらっしゃったなんて……！」

「……」

「実はずっと傍で見守っていてくださったと聞いて、驚くやら感動のあまり涙が吹き出すやらで……こんなに興奮したのは生まれて初めてです。幸せすぎて、どうしたらいいのかわかりません」

「……」

季隆は呆然としていた。

身近にいたのも、傍で見守っていたのも、他の誰でもない。

（俺だよ、俺!!）

鳶に油揚げとはまさにこのことだ。

口をぱくぱくさせていると、結蓮がはっとしたように入り口を振り返った。回廊を誰かが駆けてくるのが目に入る。

「結蓮！　支度は済んだか？　待ちきれなくて迎えにきたぞ」

笑顔で登場したのは当の崇伶だった。堂々と結蓮に抱きつくと、今度はいきなり彼女を抱き上げる。

「……っ!?」

あまりの展開にあんぐりと口を開ける季隆に、彼はふと我に返ったように視線をくれた。

「君は確か、結蓮の上官だったな？　名は覚えていないが顔はうっすら記憶にある」

やはり眼中になかったらしい。それでも向ける笑顔は爽やかだ。

「今は任務はないようだし、結蓮を連れていくぞ。早く弟子になっていろいろ教えてほしいと言うのでな。構わないだろう？」

「……」

「君？」
訝しげに見つめられ、呆けたままうなずく。
「はい……どうぞ……」
「うむ。では行くぞ、結蓮」
意気揚々と崇怜が踵を返す。抱きかかえられた結蓮が困ったようにもじもじしていた。
「あの、御使い様、下ろしてください。畏れ多いです」
「遠慮するな。私とおまえの仲じゃないか」
まるで見せつけるかのように親しげに話しながら二人は出ていった。
取り残された季隆は、ふらりと椅子にへたりこむ。
「はいどうぞじゃねえよ……俺……っ」
なんなのだ、この展開は？　あまりについて行けなくて口も挟めなかった――。
翡翠丸の憐れむような視線を浴びながら、彼は青ざめて狼狽するばかりだった。

# 第二章　謎の美姫の影

青黒くよどんだ深淵から、何者かの強い念を感じる。

「――**太子よ**」

低く響く呼びかけに、琮成はゆっくりと瞼をあげた。

禍々しいような青い光が時折ちらつく。それらがふっとかき消えると、今度は赤い光が二つあらわれた。

「**煌国太子、臨琮成。おまえの望むものをやろう**」

琮成は内心舌打ちした。

（またあの夢か）

ここしばらく、何度となく見る悪夢。自分が夢の中で目を覚ましたのだと知って軽く苛立つ。

赤い光は爛々と輝く目玉だ。青黒いよどみから、それは徐々に姿をあらわす。

そして決まって同じ問いを投げてくるのだ。

「**太子よ。――豊結蓮が欲しくはないか？**」

そうささやいたのは、暗黒のうろこに包まれた龍だった。
黙り込む琮成を、黒龍は不気味に誘惑する。
「欲しければ、我に従え」
「……っ！」
夢はいつも、そこで途切れる。
目を覚ました琮成は、見慣れた寝所を見回して小さく息をついた。
（一体、なんなのだ……）
一度や二度ならば「変な夢を見た」で済むが、こう何度も同じ夢を見るのは異常だ。
もしや結蓮に何か不吉がふりかかるという前触れだろうかと不安を募らせながらも、黒龍の投げる問いの内容を思うと本人に打ち明けることができずにいる。
――これは、何の予兆なのだろうか。

キン！　と冷たい金属音が中庭に鳴り響く。
午を回る頃。もっとも暑さが厳しい時間にもかかわらず、結蓮はいきいきと目を輝かせて太刀を振るっていた。

立ち合いの相手は憧れの御使い様だ。まさかこんな達人だったとは思ってもいなかったため、真剣勝負なのに心が浮き立っていた。

太刀を構えた崇怜が、凛々しい眼差しでこちらを見据えている。

「太刀筋が甘いな、結蓮。それでは私を倒せないぞ」

「申し訳ありません、御使い様！」

「思いきりかかってくるがいい。遠慮は無用だ」

「はっ！」

緊張してうなずきながらも内心どきどきしていた。御使い様に稽古をつけてもらえる日が来るなんて、夢のようだ。

「では、いざ。まいります！」

思い切って打ち込んでいく。振り下ろした太刀は難なく受けられたが、交差した刃の向こうで崇怜がふっと笑った。

「なかなかいいぞ。巧くなったな、結蓮」

「……！　ありがたきお言葉！」

結蓮は二重の意味で感動した。将軍として名高い彼に認められたのも嬉しかったが、（御使い様に褒められた……！）

何よりもそれが誇らしかった。

憧れの人にもっと成長した姿を見てもらいたい。その一心で太刀を握る手にも力がこもる。

――そんな二人の様子を書庫の中からうかがっている者たちがいた。

「やだ、組み合うふりしていちいち囁き合ってない？　ちょっと見たぁ？　豊舎人はともかくとして、あの美形な皇子様の嬉しそうな顔！」

「確か同じ師匠さんのところで修行してたんすよね。昔話で盛り上がってるんじゃないすか」

「あ、あ、あー！　勢いあまって転んだ豊舎人を皇子様が介抱してるわよ！　なんかすごい絵になってる！　季ちゃんも見てみなさいよ、ホラ！」

実況係と化した劉博士と翡翠丸の声を聞きながら、卓子に向かった季隆はぷるぷると拳を震わせていた。

（んなもん見たくないっての……っ）

一応書類やら何やら広げているものの、もちろん手をつけるどころではない。毎日のように繰り広げられる〝御使い様〟と〝弟子〟の交流が気にならないわけがないではないか。

やがて午休みの終わりを告げる鐘の音が鳴り響くと、結運がきっぱり稽古を中断する。真面目な彼女はたとえ憧れの御使い様相手でも任務中に戯れるのをよしとせず、午休みの間だけ交流しようとしていた。

しかし案の定というか、崇伶のほうはそんなつもりはまったくないらしい。ここぞとばかりに結運にまとわりついている。

「見て！　皇子様の汗を豊舎人がぬぐってあげてるわ。ていうかぬぐってくれって手巾を渡されてたわ」

「どっちも嬉しそうっすねー」

「あっ、今度は水を飲ませ合いっこしてるわよ！　口元に水筒を持ってる！　大胆な！」

「さっさと名乗り出てりゃ、あそこにいたのは若さんだったかもしれないのに……」

「うるせえよさっきから!!」

とうとう我慢の限界に達し季隆は怒鳴りつけた。楽しそうなのは重々わかったからいちいち報告しないでもらいたい。鬱憤がたまるばかりだ。

気が済んだのか劉博士が眉をひそめて窓辺から戻ってきた。

「翡翠丸ちゃんの言うとおりじゃない。季ちゃんが名乗り出てたらこんなことにはならなかったのよ？」

「もう……わかったから言わないで。後悔しすぎて吐きそうなんだよ……」

ぐったりと季隆はうめく。何度そのことを考えたか、自分でも嫌になるくらいだ。

けじめをつけたら言おうと思っていたのに。こんな展開は考えてもみなかった——。

そこへ鍛錬を終えた結蓮がきびきびと戻ってきた。当然のように崇怜もついてきている。

すでに仕事に頭を切り換えているらしく、結蓮は書類を束ねて整理をはじめた。

「季隆どの、こちらは決裁が終わった分でしょうか？」

「あ……うん、終わってるよ。これはまだだけど」
「今日中が締めきりではないのですか？　そんなに悠長なことでは終わりませんよ」
「はい、頑張ります……」
「そうだぞ、君。それが終わらなければ結蓮が私との修行に出かけられないだろう。もっと気合いを入れないか」
ぬっと結蓮の肩口から崇怜が顔を出した。彼女がびくっとして口をつぐむ。
「み、御使い様、どうかそちらでお休みに……」
「しかしだな、せっかく会いにきたのに朝からおまえは彼の世話ばかり焼いている。面白くないじゃないか」
「ですが、これが私の仕事ですので」
「ならば私も今日一日怠けるとしよう。さあ、私のことも叱ってくれ」
「そんな、畏れ多い……っ」
「……」
（どんだけ見せつける気だ……）
ピキピキと季隆の額に青筋が浮かぶのを劉博士と翡翠丸が「あちゃー」という目で見ている。
――一方結蓮も、御使い様との再会及び交流についてはいろいろと戸惑っていた。
再会の日以来、崇怜は人目も憚らず書庫を訪れるようになった。

それは結蓮としても嬉しいことだった。憧れの御使い様に毎日会うことができ、何かためになる話を聞けるのだとしたら、こんなにありがたいことはない。だが――。

「！　あの、御使い様っ？」

いきなり抱き上げられ、慌てて見下ろすと、崇怜が心配そうに見つめている。

「元気がないな、結蓮。何か悩み事でもあるのか？　私に話してみるといい」

「いえ、私は別にそんな――」

「遠慮するなと言っているだろう。おまえは本当に奥ゆかしいな。だがたまには甘えてくれないと私は寂しいぞ。弟子に信頼されていないのかと思ってしまう」

切なげに言われても、返す言葉が出てこない。

（心配してくださるのは嬉しいけど、でも、この状況では喜べない……！）

御使い様の訪問においてただ一つ問題があるとすれば、結蓮が任務中であることを彼が考慮していないらしいことだった。

結蓮が武官になったことを応援してくれているはずなのに、彼は時々任務を邪魔するような言動をするのだ。自分の考えすぎだろうかと思いつつも、やはり気になる。

（御使い様ほどの人格者がそんなことをなさるはずがない。けれど実際、他の方も疑問に感じておいでのようだし……）

同じ部署で勤務中の季隆はしらけた顔をしているし、劉博士も面食らった様子だ。

「いちゃつくんならよそに行ってもらえませんかね～、お二方」
頬杖をついた季隆が半眼で口をはさむ。そんなつもりはなかった結蓮は反論しようとしたが、崇怜のほうは満足げに踵を返した。
「おまえの上官はなかなか話のわかる人間だな。他の者の邪魔をしてはいけないし、場所を移すとしよう」
「お待ちください、そういうわけにはいきません。私はまだ任務が――」
抱えられたまま連れ出されそうになり、結蓮が驚いて訴えた時だった。
「橘く～ん、いるー？」
開いた書類に目を落としたまま壮年の男が書庫に入ってきた。
重厚な衣服は高官のもの。だが襟はよれているし、長袍の留め具ははずれかかっている。しかもそれをあまり気にした様子がない。
結蓮と崇怜に気付いて顔をあげた彼は、不思議そうに瞬き、季隆に目を向ける。
「誰だっけ？　新人の子？」
「いやいやいや！　第三皇子の崇怜様ですよ」
さすがに季隆が焦ったように訂正すると、男はのんびりとうなずいて礼をとった。
「これはご無礼を。雪南王様」
「その玉牌からすると、長官級の者か」

「は。封陰省長官、相京でございます」

皇子相手に取り繕うでもなく、へつらうそぶりも一切見せない。もともと出世街道というものに興味を持たない人らしいが、性格的なものもありそうだ。

「ところで雪南王様。これはどういった事態でしょう？」

結蓮を抱き上げたままの崇怜を、相長官は興味深そうに眺めている。

「大したことではない。これから二人で師弟の交流を深めに行くところだ」

「さようでしたか。それは、お呼び止めして申し訳ございませんでした」

それきり興味が失せたのか、一礼してすたすた書庫の奥へ入っていく。

「橘君、なんか変なことになってない？　きみ、彼女と文通してるんじゃなかったっけ？」

「わー!!」

季隆が仰天した様子で相長官に飛びついた。

結蓮が驚いて見ると、季隆は必死の形相で相長官に詰め寄っていた。「お願いしますよ、秘密にしてるんですから……」と小声で訴えているのが聞こえてくる。

「季隆どのも文通をされていたのですか？　知りませんでした」

ぎくり、と季隆が固まる。相長官が呑気な顔で振り向いた。

「あれ、知らなかった？　でも相手は――」

「わーっ、わーっ!!」

ますます焦った様子で季隆が相長官の口をふさぐ。かと思うとがしっと腕をつかんだ。
「秘密にしてって言ったでしょうが！　どんだけ天然なんですか！」
「え？　どうして？　真君が仰ってたけど、違うの？」
「ちょ……、もー！」
苦情を言いながら長官を引きずるようにして書庫を飛び出していく。
「……ま、逃亡したくなるわよねー。この状況じゃ」
呆れた顔で劉博士がぼやく。結蓮は怪訝な思いで首をかしげた。
（そんなに必死に隠すようなことかしら。別に止めたりなどしないのに）
現にこちらも彼公認で御使い様と文通していたのだ。文句を言うはずがない。
「おまえの上官は忙しないな。だがちょうどいい。さっそく出かけるとしよう、結蓮」
「あ、あのっ、御使い様？　ですが私はまだ任務中で……」
今度こそ書庫を出ようとする崇怜に、違和感を覚えつつ訴えかけた時だった。
季隆たちと入れ替わるようにして、ふらりと官吏が一人入ってきた。
「失礼します～。ちょっとよろしいですか～？」
間延びした声が特徴的な彼は東宮府次官の孔少保だ。だがそれは仮の姿で、実は皇帝密使という皇帝直属の密偵である。また皇帝から密命が下ったのかと、結蓮は気を引き締めた。
「相長官も橘次官もたった今出て行かれました。おそらく本庁のほうに――」

「いえ～、あなたに個人的にお話を聞きたいんですよ～」
「私に……？　どういったことでしょう？」
彼がわざわざ訪ねてきたとなると、皇帝の密命で封陰省に調査させるということのはず。出向で来ているだけの専門外の自分に何を聞くのだろう。
「ちょっとした事情聴取ですよ。ところで、それは～？」
やんわりと視線を向けられ、崇怜に抱き上げられたままだったことを思い出す。結蓮は慌てて訴えた。
「御使い様、お願いですから下ろしてくださいませ。私はまだ任務中なのです」
「このまま話せばいいじゃないか」
「そういうわけにはまいりません。どうかお願いします」
彼の腕から逃れられる好機は今しかない。
懸命な訴えが届いたのか、崇怜はしぶしぶながら下ろしてくれた。

崇怜に席を促して急いで孔少保のもとへ戻ると、彼は飄々と話を進めた。
「近頃、朝廷の重鎮たちの間でちょっとした事件が起きていましてね～。なんと言いますか、まあ有り体に言うと、女に誘惑されて腑抜けてしまった方が続出しているんですよ。若い令

嬢にこんなお話をするのは気が引けますけどね～」

ちっとも気が引けているふうでもなく彼は帳簿を開く。結蓮もあくまで真面目に聴き入った。

「私に、その腑抜けてしまわれた方々の根性をたたき直せとのご命令でしょうか？」

「いや～、それで直るものならぜひお願いしたいですがね～。しかしあなたも言いますね。本当に名前を聞いたらびっくりするような高官ばかりですよ。それをたたき直すとはね～」

「はっ。申し訳ありません、出過ぎたことを」

「でも実際、困ってるんですよね～。どの方も皇帝陛下に近しい方ばかりなので。豊家の方もいらっしゃいますし～」

「豊家の……？」

結蓮が息を呑むと、孔少保は軽くうなずいた。

「それで豊家ご出身のあなたに、何かご存じないか訊ねようと思いましてね。どうにも他の豊家の方々はお口が堅くて、教えてくださらなくてね～」

「それは……、申し訳ありません。ですが私にもお話しできることは何も……その件も初めて聞きましたし」

事情が事情だけに一族の者たちは口を閉ざしているのだろう。何より醜聞を恐れる人たちだ。

「本当に心当たりはありませんか？　腑抜けたお歴々の周辺には、とある美姫の存在が浮かび上がっているんですが～」

「美姫……」

「この世のものではないような妖艶な美しさがあるとか。話を聞いた者の中には、あなたの美貌をあやしんで、実はその美姫なのではと疑った者もいましてね～」

「私をですか？」

意外なことを言われ、さすがに驚いた。それで個別に事情聴取にきたというわけか。しかしもちろん心当たりがあるはずもない。

「あ、いえいえ、別人なのはわかっていますから～。もしあなただったら許しませんけどね～。高官ばかり狙うなんて罰当たりにもほどがありますよ。貴重なごますり要員を腑抜けにするなんてね～」

孔少保はあまり興味がない様子でそう言うと、別の帳簿を開いた。

「若いあなたはご存じないでしょうが、数年前にも似たような事件が起きましてね。おそらく同一犯だろうとにらんでいるんですよ～」

「そうだったのですか」

「当時は腑抜けだけに終わらず、不審な死を遂げた官吏が何人も出ていましてね。おや……、封陰省の官吏も犠牲になってますね～」

「え……、封陰官もですか？」

封陰官といえば呪禁師と呼ばれる術師でもある。何か異変があれば察知して回避することも

できただろうに。

「まだ若かったようだし誘惑に勝てなかったんでしょうかねえ、可哀相に。小野……、ああ、璉からの留学生のようですね。小野景親。めずらしい名前ですね～」

帳簿を眺めながら何気なさそうに孔少保がつぶやく。結蓮はほっとしてそちらを見た。

季隆が叫んだあの名前と同じだ。璉からの留学生というところからしても間違いないだろう。

「おおっと、うっかり機密を漏らしそうになっちゃいました～。豊舎人、ここだけの話でお願いしますよ～？　でないと私もあなたも処刑されちゃいますから～」

「はっ」

慌てた様子もなく念を押す孔少保にうなずきを返しながらも、結蓮の頭には小野景親という名がしっかり刻み込まれていた。

孔少保の話を聞いた後、結蓮は東宮御殿へ太子のご機嫌伺いに出かけた。

もともとそんな予定はなかったのだが、謎の美姫の話を聞いて心配になってしまったのだ。

（皇帝陛下に近しい方ばかりが狙われているだなんて不吉だし、もし太子殿下にまで毒牙が伸びたら……！）

そう思ったらいてもたってもいられず、崇伝を拝み倒して書庫で待ってもらい、急いでやってきたのだった。

意外なことに、太子のもとには先客が来ていた。

「突然訪ねてくるとは、一体何事だ。結蓮」

厳しい口調で問いただされ、結蓮はさっと居住まいを正して答えた。

「太子殿下へお届け物を持ってまいりました。お祖父様にもお会いできるとは嬉しい限りです」

結蓮の祖父にして皇后の父である豊諭迅。煌国一の名門の当主としても名を馳せる彼は、結蓮が差し出した菓子の箱を冷ややかに一瞥した。

「呑気なものよの。近衛舎人というのはそんなに暇を持てあましておるのか。いっそのこと辞職してはどうだ？」

辛辣なことを言われ、ぐっと言葉に詰まる。だが仕方がないのだ。祖父は結蓮の武官志願にいまだ反対しているし、それでなくても未婚の母を持つ結蓮は豊家の人たちに嫌われている。こんな態度を取られるのも日常茶飯事だった。

気まずい空気を救ったのは、涼やかな声だった。

「豊老公、結蓮に当たるのはやめるがいい。結蓮、その箱は所定の場所へ置いておけ」

「はっ」

結蓮は内心ほっとしながら箱を捧げ持って進み出た。
庶民の菓子を食すのが趣味である太子のため、たびたびこうして持参している。置いておく場所も決まっていた。
言われたとおり箱を置くと、結蓮は何気なく顔をあげる。すぐに気付いて目を瞠った。
「殿下……!?　お顔の色がすぐれませんが、いかがなさいましたか!?」
蒼い石が象眼された椅子に座り、こちらを向いている太子琮成。もとから色白だが今は少しやつれたように見える。
だが、動揺のあまり今にも駆けよろうとする結蓮を、琮成は冷たく見ただけだった。
「大事ない。いちいち騒ぐな。余計暑くなるだろう」
「ですが！」
「それ以上暑苦しくするなら帰れ」
そっけなく言われてしまい、仕方なく引き下がる。彼のこんな物言いは昔からだから慣れている。豊家の人たちに言われるのと違って、むしろ懐かしい響きだ。
「おまえこそ何事だ？　まさか本当に菓子だけ届けにきたわけではないだろう」
怪訝そうに見つめられ、結蓮は少し迷ったが、結局は正直に話すことにした。
「皇帝陛下の側近があやしい女に惑わされる事件が続発していると耳にし、殿下の御身が心配でたまらず訪ねてまいりました」

琮成と諭迅が目を見交わす。彼らの耳にも入っていたようだ。結蓮は身を乗り出した。

「中には豊家の方もおられたとか。お祖父様、何かご存じではありませんか？」

一族の者が女に誘惑されて腑抜けてしまったという醜聞を、当主の祖父が知らないわけがない。だが、望んだ答えは返ってこなかった。

「おまえには関係のないことだ」

「ですが――」

「妓女と戯れてそのようなことになるとは、恥にもほどがある。おまえが知る必要はない」

にべもない言葉にも食い下がろうとした結蓮だったが、ふと気が付いた。

（妓女……？　その女というのは妓女なのね）

豊家の力をもってすれば、それくらい調べるのはわけがなかっただろう。孔少保の話にもなかった情報を知って、ひそかに高揚する。

黙りこんでいる結蓮を諭迅がじろりと見た。やがて彼は何を思ったか、重々しく咳払いをして口を開いた。

「……いや……、おまえのような若い娘の耳に入れたくないという意味だ。わしにも保護者としておまえを護る義務があるのでな」

結蓮はぽかんとして祖父を見つめた。

そんな優しい言葉をかけてくれるなんて。ありえない。一体どうしたというのか。

琮成も眉をひそめている。事態を計りかねているといった顔だ。
「豊老公、急に何事だ？　企み事でもあるのか」
「もしや、この暑さで具合が悪くなられたのではありませんか？」
口々に孫たちから不審とも心配ともとれる言葉を投げられ、諭迅が沈黙する。
やがて彼は不機嫌そのものといった表情で顔をそむけると、いきなり退出の挨拶をした。
「殿下、本日はこれにて失礼つかまつりまする。ご自愛なさいませ」
「ああ……、老公もな」
太子に一礼すると、諭迅は風のように部屋を出ていった。
見送った琮成はなおも難しい顔をして顎をなでている。
「豊老公があのように優しい言葉をかけるなど、めずらしい現象もあったものだな……」
「さようでございますね……」
二人はひとしきり感心すると、おもむろに姿勢を戻した。
「近頃、崇伶兄上が都に戻られているようだな」
「はい」
「何か困っていないか」
じっと見つめられ、結蓮は一瞬迷う。もし御使い様と再会できたら、一番に琮成に報告しようと思っていたのだ。だが、結局は首を横に振っていた。

「いいえ、何もございません」

なぜか胸を張って報告することができなかった。そんな自分に戸惑いながらも何も言えない。琮成は「そうか」と言っただけだった。結蓮の嘘に気付いたのかどうかはうかがえない。彼は彼で何か気になることがあるようだ。

「殿下。やはりお顔色がすぐれなくていらっしゃいます」

しつこいと追い出されるのを覚悟でもう一度言うと、彼は面倒くさそうにため息をついた。

「少し疲れているだけだ。蓮花節の会議に参加したりと忙しくしていたのでな」

蓮花節というのは煌国に古くから続く祝日のことだ。蓮女舞といって、六蓮天女に舞を奉じ天地平穏を祈る。真夏に行われることから暑気払いの儀式としても知られていた。

都の郊外、扇山にある蓮女舞の舞台で行われ、主祭である皇帝ももちろん臨席する。

「今年の蓮女舞では、歌妓の中でもっとも優れていた者を褒美として父上の後宮に入れることになった」

「さようでございますか……」

歌妓とは歌舞に秀でた妓女のことだ。煌国の楽府には慣例として男の楽人しか置かれていないため、蓮女舞には市井の歌妓を登用している。もちろん国家儀式だから、それにふさわしい教養と実力を備えた者のみが選ばれる。

これまでも彼女たちの中から皇帝の後宮に入って寵愛を受けた例はある。だが儀式の前から

決まっているのはめずらしい。結蓮は感心していたが、ふと表情をあらためた。
（歌妓……つまり妓女）
一連の高官の事件と何か関係があるのだろうか。皇帝の側近ばかりが狙われているのが気にかかる。考えすぎかもしれないが、調べてみる価値はありそうだ。

調査のため城下へ下る旨を上官に報告しようと封陰省へ戻ったが、当の季隆は不在だった。
「翡翠丸どの、季隆どのはまだ本庁のほうですか？」
相長官と出ていったきり戻っていないのだろうかと思ったが、翡翠丸は首を振った。
「いや、一旦戻ってきてまた出てったっす」
「そうですか。どちらへ？」
すると翡翠丸は少し考えるように目線を落とした。
「教えてさしあげたいんすけど……余計なことをしゃべろうとすると強制送還されるように呪がかけられてるんすよね」
「……？　どういうことですか？」
「実は若さんは花街――」

無表情で言いかけた翡翠丸だが、「あ」と何かに気付いたようにつぶやいて顔をあげる。
「すんません、術式が発動したんで失礼します」
「えっ？」
驚く結蓮の目の前で、翡翠丸の姿はふっとかき消えてしまった。
彼の本性は妖怪であり、季隆が使い魔としている存在だ。普段は懐剣に封じられていて必要な時だけ呼び出して使役している。だから戻すのも当然術式によるものだろう。だが今の現象はそれと少し違っていたようだ。
（私に余計なことを話さないために、無理に懐剣に戻したということ？）
つまり、季隆は何かを隠している。どうしても結蓮にそれを知られたくないということか。
なぜそこまで秘されるのだろうと不審に思うとともに、不満のような感情がわきあがる。
結蓮は眉を寄せて息をつくと、仕方なく書き置きだけ残していくことにした。

久々に訪れた璉人長屋は静かだった。
「大抵の住人は仕事に行ってるんでね。どうぞ」
煙管を手にまったりと出迎えてくれた一哉に結蓮は一礼した。

「お忙しいところ、かたじけない」
「構いませんよ。ところでこちらは？　またお綺麗なだんなですね。ぜひ一枚描きたいくらい」
　一緒にいる崇怜をまじまじと見ているので、急いで咳払いする。街へ下りようとしたところで見つかってしまい、ついてきてしまったのだ。
「今回はご勘弁を。――それで一哉どの、ご連絡した件ですが」
「ああ、絵姿ならここですよ。そっちにも」
　部屋の中は狭いながらもそれなりに片付いていた。壁際の背の低い棚にそろえて入れられていた紙束を取り出し、一哉が不思議そうに首をかしげる。
「にしても妓女の絵姿を全部見てみたいなんて。美人画に興味でもおありで？」
「はい、少し……事情がありまして」
　言葉をにごしながら受け取ると、結蓮は一枚一枚それらをめくっていった。
　ほとんどは下書きのようなものだろう。それでも線の強弱や曲線などで確実に個々の特徴をとらえているのはさすがだった。
「すばらしい。お上手ですね」
「多少はね。これで飯食ってますから」
　思わず感嘆のため息をつく結蓮に、一哉が軽く笑う。しかし一緒に眺めている崇怜はつまら

なそうな顔をしていた。

「どんな美人画よりおまえのほうが美しいぞ、結蓮」

「はっ……、恐縮です」

とたんに結蓮は口ごもってしまう。以前ならどうということはなかったのに、憧れの人からそんなことを言われると嬉しいような——だが自分にとってそれが褒め言葉でないのを思うとやはり複雑だ。

とにかく今は絵姿に集中しようと次々めくっていたが、ふと手を止めた。

「これは……」

一目見た瞬間、ぞくりと悪寒のようなものが走った。

描かれた絵姿から凄まじいほどの妖艶さが伝わってくる。他の妓女たちも美しさでは劣らなかったが、これは別格だった。

「一哉どの。この方はもしや、先日街でお会いした時の……」

季隆と因縁がありそうだったあの妓女に違いない。目を離せずにいると、一哉もそれをのぞきこんできた。

「ええ。紅幻楼の紅夏姐さんです。花街で一、二を争う美女って評判ですよ」

「確かに……一哉どのの筆致のすばらしさもあるでしょうが、なんだか、あやしい魅力のある方ですね」



「おまえのほうがはるかに魅力的だぞ、結蓮」
「はっ、おそれいります」
窓際にもたれた一哉がのんびりと煙管を吹かして口を挟む。
「どこだかの国の昔話にありましたね。ある男が理想の女の姿を絵に描いた。その女に惚れてしまって、絵から出てくるよう毎晩天帝に祈ったら、本当にその美女が絵から抜け出してきた……。最後は怖い終わり方の話ですが、その絵を見た人に『あの話の美女を思い出した』って言われましたよ。そんなに恐ろしい絵に見えますかね」
「いえ、そういうわけでは……。ただ、こういう魅力のある方に男の方は惹かれるのではないかと思って」
朝廷高官を次々と誘惑し腑抜けにしてしまったという謎の美姫は、こんな感じだったのかもしれない。そう思ってしまうほど、あやうい美しさのある絵姿だった。
ふっと一哉がおかしそうに煙をはく。
「そんなわかりやすい話ばかりなら世の中平和なんですがねー。意外と、控えめで地味な女が裏で男を手玉に取ってたりするもんですよ」
「そうなのですか……」
結蓮はじっと絵姿を見つめた。
紅幻楼の紅夏。その名と顔立ちを頭の中に刻みつける。

「絵を描かれる時に妓女と話をされることがあると思うのですが、近頃花街で変わったことがあったという話は聞いておられませんか？」
「変わったことって？」
「新しい妓女が入ったとか、美しさで評判の妓女とか……、朝廷高官に贔屓にされている妓女の話など」
真剣な顔で訊く結蓮に、一哉は軽く肩をすくめてみせた。
「そういうのは花街では当たり前の話ばっかりなんでねえ……。何か調べ事ですか？　捜し人でもしてるんなら聞いておきますけど」
「あ、いえ、こちらの話ですので」
礼を言って絵姿の束を返す。職業柄、花街に詳しいであろう彼から何か手がかりが得られるかもしれないと思ったが、そううまくはいかないようだ。
一哉が出してくれた茶はやや薄めだった。それが璉国で好まれているという淹れ方であるのを思い出し、結蓮はふと考えた。
（一哉どのもご存じだろうか）
数年前に不審死を遂げた封陰官、小野景親。同じ璉の出身だし何か知っているかもしれない。少し迷ったが思い切って訊いてみることにした。
「一哉どのは、季隆どのと親しくしておいででしたね。璉にいた頃からそうなのですか？」

「知り合ったのはこっちに来てからですよ。って言っても仲良くしてるのはここ最近ですがね。あの人、知り合ってまもなく山に修行に行っちゃったから」

「季隆どのの留学後に出会われたのですね？」

「そうそう。あっちは朝廷の官吏様で、いいお屋敷に住んでたみたいですがね。気にせず付き合ってくれてこの長屋にもよく遊びにきてて。琥人同士、気が合ったんで」

「では、小野景親という方をご存じですか？　季隆どのと同じ留学生で封陰官だった方です」

勢い込んで訊ねてみると、一哉は面食らった顔をした。

「小野……、ああ、季さんの親友だった、あの人？」

「親友」

「確か、若くして死んじまったとか聞きましたね。その後すぐに季さんは修行に出ちゃったんで、詳しい話は聞いてないですが。あれ、なんで死んじゃったんだろうな……」

怪訝そうにつぶやいたところをみると、一哉も詳細は知らないようだった。

時間をとらせた礼を言って長屋を出ると、結蓮は考え込みながら路地を歩いた。

（景親どのというのは季隆どのの親友で、数年前の事件で亡くなった。直後、季隆どのは山へ入られ、真君様のお弟子になられた……）

時期が近いところをみると、景親の死と弟子入りは関係があるのだろうか。

「結蓮」

突然腕をとられ、はっと我に返る。崇怜が見つめているのに気づき、そういえば彼がずっと口数が少なかったのを思い出した。退屈させてしまったかと恐縮して頭をさげる。

「申し訳ありません、御使い様にまでわざわざご足労いただいて……」

「それはいい。おまえと一緒ならどこへだろうといくらでも行って構わない。結蓮、おまえもそうだろう？」

「はっ。もちろんです、御使い様」

「崇怜と呼べと言っているだろう。本当におまえは照れ屋だな」

爽やかに笑って手を握られ、結蓮は慌てた。

「せっかく城下へ下りたんだ。観劇でもするか？　それとも川べりで涼むか」

楽しげに言いながら馬車を停めた通りのほうへ歩き出す。完全に遊びにいくつもりだ。

「崇怜様！　申し訳ありませんが、私はまた封陰省に戻らねばなりませんので」

懸命に結蓮は訴える。これまでも皇子が相手ということでの緊張感はあったが、それに加えて憧れの大恩人ということが判明してからは、どんな態度で臨めばいいのかわからないこともしばしばだった。

彼と再会できて、こうして傍で言葉をかわす。嬉しくて仕方ないはずなのに、戸惑いが先に立ってしまうのはなぜなのだろう。

崇怜が足を止め振り返る。どこか落胆したような寂しげな顔だ。

「師の言うことが聞けないのか？」
そっと手が伸びてくる。髪に触れられそうになって思わず身体を硬くすると、それきり何もせず離れていった。
「崇怜様……？」
「なんでもない。虫がいただけだ」
笑顔でそう言うとまた手を引いて歩き出す。
「仕方ないな。おまえを困らせたくないし、帰るとするか」
「あ、ではその前に、書店に立ち寄ってもよろしいでしょうか。琇有様からの頼まれ事がありまして」
そう言ってしまったのは、御使い様をがっかりさせたことへの罪悪感からだったのかもしれない。崇怜が嬉しそうに振り返る。
「無論いいとも。琇有の用件というと、怪奇小説の件か？　近頃は秘術の書物なども読んでいると聞いたが」
（秘術？）
なんのことかはわからなかったが、彼が機嫌を直したことにほっとして、結蓮は訊ねる余裕もなく急いで後に続いたのだった。

一瞬身体に軽い衝撃が走り、季隆はびくりと震えた。

（――気付かれたか）

結蓮に付けていた使い魔が戻ってきている。術をやぶられたとわかって思わず舌打ちした。

「……私の前で舌打ちするとは、良い度胸だな」

冷えた声にそちらを見れば、琮成が冷たい眼差しを向けている。季隆は微笑んで一礼した。

「申し訳ございません。予想外のことが起きてしまい、とっさのことで繕えませんでした」

「その言い訳も含めて、良い度胸だ」

むっつりと太子は言ったが、それほど機嫌を損ねたわけではないようだった。ちょうど話題にのぼっていた人物のことだと敏感に察したようだ。

「もしや結蓮と兄上の件か」

「はい。……結蓮嬢に付けていた使い魔を追い返されました。雪南王様はずいぶんと異能の力が高くていらっしゃるようで」

恩人の名を騙り、結蓮に接近している崇怜。結蓮がそれを信じている以上、他者が引き離そうとするのは不自然に思われる。崇怜については気になる点もあったため、彼女に使い魔を付

けて監視させていたのだ。だがそれも早々に見破られたらしい。

琮成にもこの件を話したところだった。彼も結蓮の態度から異変を感じていたらしく、参上して説明せよと呼び出しがあったのである。

「崇怜兄上のお考えは私にも読めぬ。昔からあの調子でいらしたからな」

「悪気はないように見受けられますが、時々大胆すぎる手に出られるようですね」

「……その大胆なところが大物だと支持する者も多いらしいが」

冷めた顔つきで太子がつぶやく。季隆はじっと彼を見つめた。

「おそれながら太子殿下。他にも何か気になっておいでのことがおありではありませんか？」

「ふん。顔色の判断もできるのか、封陰官というのは」

気のなさそうに言った太子だったが、考え直したのかふと視線を戻した。

「そなた、夢占はできるか」

「私は専門外ですが、封陰省に専任の者がおります。何か気になる夢がございましたか」

太子は迷うように目線をそらした。ややあって硬い顔で口を開く。

「龍の夢を見る。何度もだ」

「それは吉夢では」

「……黒い龍なのだ」

季隆は眉をひそめた。

黒龍の夢。それは吉兆と凶兆、どちらの意味もある。
何より問題は太子がそれを何度も見ているということだった。皇帝や太子にはある種の霊力が宿ると言われている。予知夢ということもありうるのだ。
本人もそれは自覚しているはず。だからあえて封陰官である自分に打ち明けたのだろう。
「太子殿下。その件は上官に報告して指示をあおぎます」
さっそく退出しようとすると、太子がすかさず言った。
「結蓮には言うな」
そう言った彼の目は、まだ何か隠しているようにも思えた。

東宮御殿を辞して封陰省へ戻ると、季隆は真っ先に上官に報告し書庫へ向かった。
長官の指示で、すぐに夢占に詳しい者を太子のもとへ派遣することになった。気にはなるが、ひとまず任せておけばいい。
気になるといえば結蓮と崇怜のことだ。
今回の件、結蓮に惚れている皇子様が暴走しているだけだと考えるのは、さすがに甘い気がする。彼女の手紙を持っていたことからして明らかにおかしいし、使い魔を見破られたことや以前結蓮に幻術らしきものをかけようとしたことを思うと、並の能力の持ち主ではない。

(見た感じは男前で爽やかなんだけどな……あれが演技だったら大したもんだ)

『結蓮。私のものになれ』——そう言った時の彼の表情を思い出す。

あの爽やかな美丈夫が、熱烈に口説くと見せかけて結蓮に術をかけようとした。その理由を想像すると不気味なものがある。

またあらためて使い魔を付ける術をしなければ。回廊をたどりながら、行く手に見えてきた書庫を見やりため息をつく。

「身体一つじゃ足りねーよ……」

何より、毎晩のようにやっている狩りのせいで疲労がかなり募っている。身体の悲鳴を素直に聞いて今すぐ寝台に倒れ込みたいくらいだ——。

「婿どの」

「うわ!!」

いきなり下から声がして、思わず飛びのいた。

書庫の出入り口の脇にあるくぼみに誰かがうずくまっている。——いや、端然と姿勢をただして座っている。

それが豊諭迅翁だと気づき、季隆はますます仰天した。

「ど、どうなさったんです、ご老公」

煌国一のお大尽が、なぜにこんな狭いくぼみにはまるようにして地面に座っているのか。

慌てて立たせて書庫に招き入れ、席を作って勧めると、豊老人は深いため息をついて切り出した。

「以前、婿どのから助言があったことを思い出しましてな。結蓮に少しばかり優しい言葉をかけてやったのでござる」

思わぬ告白に、へえ、と身を乗り出す。祖父と孫娘の関係がいよいよ変わってきたのか。

「それはそれは、喜んだでしょうね」

「具合でも悪いのかと不審がられました」

「……」

――あまりにめずらしすぎて通じなかったか。

気の毒に思いながらも、彼がへこんでいる理由がわかってひそかに納得がいった。

「わしには無理でござった。今さら孫への接し方を変えても不気味に思われるだけでござる」

「ま、まあ、そのうち気持ちが伝わる日がきますよ。元気を出されてください」

厳つい顔をして苦悩している豊老人を急いでなぐさめる。頑なほど厳しかったこの老人が孫娘への態度に悩み、改善しようと努力しているのだ。大した進歩といえるだろう。

「もうわしは多くは望みませぬ。結蓮がこの世に留まってくれさえすればよい。婿どの、引き留めるすべは見つかりましたかな」

季隆は言葉に詰まった。それを言われるとつらい。いまだに解明できずにいるからだ。

「すみません、まだ調べているところで……」
「……もしや、そんな方法などないのでしょうか」
豊老人の眼光が鋭くなった。責めているのではない、恐れている目だ。季隆は首を振る。
「絶対に引き留めます。その方法も必ず見つけますから」
結蓮を龍の眷属のもとに返さない。それは豊老人だけでなく季隆の悲願にもなっていた。
力強い宣言に豊老人は感じ入った様子でうなずいたが、ふとあらたまったように切り出した。
「いっそのこと、契ってしまわれてはいかがか」
「……はい？」
「夫婦の契りを交わせば、結蓮も人の世に留まれる身体に変わるやもしれませぬ」
え、と季隆はしばしその言葉を噛み砕いた。
「……って、つまり、そういう意味で……？」
「そういう意味で、でござる」
豊老人はあくまで真顔だ。季隆は額に冷や汗が浮かぶのを感じた。
「いや……、それは……ちょっと……」
「遠慮されているのですか。わしも複雑な心地ではありますが、背に腹はかえられぬ。この際、公認いたしましょう」
ずいっと身を乗り出され、思わず後ずさる。この目はどうやら本気だ。

（何この空気？　むしろやれみたいな……）

へたをしたら今夜にも婚礼を決行されそうだ。この老人にはそれだけの権力と財力人脈がある。巻き込まれてはいけない。

とことん自分中心な考えの彼に軽く反発を覚えつつ、それほどまでに結蓮を手放すのが嫌なのだと思い知り、季隆は息をつく。

「いえ、別の方法を探します。その手法だとお孫さんは余計に傷つくと思いますし」

引きつりながらもなんとか断ると、彼は意外そうにうなった。

「ほう。婿どのは堅実でいらっしゃるのですな」

「ハハ……普通ですよ……」

むしろ婚礼前にそういうことを堂々とけしかけてくる舅殿のほうがおかしいのだ。

心臓に悪すぎる事態を免れたことにほっとしながらも、結蓮の〝時間〟が短くなっていくことを思い、季隆はうまく笑うことができなかった。

豊老人を見送り、自分も出かけようと書庫を出たところで、回廊をやってきた崇伶とばったり出くわした。

また結蓮に会いにきたのだろう。すれ違う季隆など眼中にもない様子で颯爽と歩いていくの

で、思わず呼び止めた。
「結蓮ならいませんよ、雪南王様」
初めて気づいたように崇怜が振り返る。驚いた顔で戻ってきた。
「不在だと？　訪ねてくると言っておいたのだが」
彼女が待っていて当然だと心から思っているらしい。相変わらず自信満々なことだ。
恩人の名を騙って彼女を騙していることに、いらっと心がささくれたが、ひとまずそれは抑えておく。彼と二人きりになったら訊きたいと思っていたことがあったのだ。
「近頃、書庫の資料を熱心に繙いておいでのようですね。もしや六蓮天女の加護についてお調べですか？」
国の機密でありごく一握りの者しか知らないはずの、六蓮天女の加護。それを彼は知っていて、なおかつ詳しく知りたがっていた。それがずっと気にかかっていたのだ。
「結蓮に会いに来たついでだがな。それがどうかしたのか？」
答えた彼は悪びれた様子もない。純粋な好奇心からの行動のようだった。
「どなたからそれを聞かれたのかと、ふと気になりまして」
「ああ。琇有だ。彼は読書家なだけあって物知りだから」
あっさり言われ、意外すぎる名前に季隆は驚いた。引きこもりの皇子がなぜそんな機密を知っているのだろう。おそらくはまだ太子ですら聞いていないはずなのに。

「そういえば、私も君に訊ねたいことがあったぞ」
崇怜がふと思い出したように、まっすぐ見つめてきた。
「君は任務の際に結蓮を戦わせているそうだな。自分の盾にするようなこともしていると聞いたが、そんなことをして恥ずかしくはないのか？　上官である前に一人の男だろう」
非難する中にかすかに軽蔑が見て取れる。そうやって責めるということは、少なくとも結蓮に惚れているのは事実のようだ。
「いけませんか？　だってあの子のほうが強いんですから、当然でしょう」
彼女が任務で怪我を負うのはもちろん本意ではない。だがいきいきと太刀を振るう姿を見ると、これで間違っていないのだと思える。己の道を突き進む彼女を見守ってやりたい、と。
しかし崇怜には理解できない思いだったらしい。不愉快そうに眉を寄せ、踵を返した。
「――最低な男だな」
吐き捨てると、大またに回廊を去っていく。季隆はしらけた目でそれを見送った。
（騙してるくせによく言う……）
きっと彼の中では、結蓮は守るべきか弱い令嬢でしかないのだろう。
とにかく、いつまでもむかむかしているだけでは生産性がない。幸いにも彼から重要なことを聞き出せたのだ。すぐに確認しておく必要がある。
気を取り直すと、季隆は西宮へ向かうことにした。

昼なお薄暗い御殿に踏み込むと、来客に気付いてか、ぽっ、ぽっ、と廊に明かりが灯った。
招き入れるかのように奥まで続くそれをたどり、結蓮はかしこまって膝をついた。
「豊結蓮にございます、琇有様」
ほの明かりに照らされた部屋で、高座から青年が身を乗り出している。
「うん、うん。待ってたよぉ、結蓮」
「はっ。例の品はここに」
うやうやしく差し出した盆から、琇有が薄い冊子を丁寧に取り上げた。
「きたーっ。高玲玲の新作！　最近は刊行速度が速いなあ！　こんなに早くに続きを読めるなんて。ウフフフフフ」
長い前髪からのぞく青白い顔が締まりなくゆるんでいる。嬉しそうにしているのを見て結蓮も思わず唇がほころんだ。
太子の同母兄・琇有皇子は、五年前の後宮襲撃事件以降、この黎華殿に引きこもっている。侍官も近づけず、真昼でさえ御殿中のとばりを下ろしてひっそり暮らしている変わり者の彼だが、趣味である志怪小説集めにだけは熱心だった。もちろん引きこもりの彼には買いにいくこ

とができないため、結蓮が代わりに入手してくるのである。
先ほど崇伶と出かけた帰りに購入し、彼と一旦別れて届けに来たのだった。
「いつもありがとう、結蓮。お礼といってはなんだけど、僕が蒐集品から厳選してまとめた怪奇録をあげるよ」
「はっ。畏れ多いお言葉です」
拝礼しながら、ひそかにほっとする。あまり頻繁に会いにこられるわけではないので気になっていたが、いつもどおり元気そうだ。
ほくほくした様子で冊子を開いている彼に、遠慮がちに話しかけてみる。
「琇有様。皇后様が心配なさっておいでした。お顔が見たいとの仰せで」
五年前の事件以降、結界で眠りについていた皇后と、彼はまだ一度も対面していないのだ。
ぴくっと反応し、琇有が目を伏せる。冊子をめくりかけた指が小刻みに震えていた。
「僕だって、母上にお会いしたいよ。実際、会いに行こうと思って外に出たこともある……。でもッ」
ばさりと冊子を投げ出し、彼は座卓に拳を叩きつける。力みすぎたのか「いたっ」と小さく悲鳴をあげたので、結蓮は急いで手巾を傍にあった水盤で濡らし、差し出した。
「……でもだめなんだ。外の世界が怖い。あんな明るいところ、とても出ていけないよ」
「琇有様……」

「この前だって僕的にはかなり頑張ったけど、我ながら生まれたての子馬並みに膝ががくがくしてしまったし……。い、今だって、思い出しただけでこんなに……ッ」

「琇有様、どうかお静まりを！　もう二度と不用意なことは申しませんから！」

ぶるぶる震えだした琇有を結蓮が懸命になだめていると、ふと彼が廊のほうへ顔を向けた。

「あれ……誰か来たみたいだ」

ぽっぽっ、と明かりが灯っている。来客があった時のみ、それも琇有が許した者が相手の時しか点かないはずだ。

ややあって姿を現した客を見て、結蓮は目を見開いた。琇有が声をはずませる。

「橘氏！　また来てくれたの」

やりとりが聞こえていたのだろうか。季隆が軽く苦笑して拱手する。

「先触れも出さず、無礼を働いて申し訳ございません、琇有様」

「そんなのいいんだよ。僕たち、と……友達じゃないか」

「え？　あ、はい。そうでした」

にっこり笑って答えているので、結蓮はさらに驚いた。いつのまにそんなに親しくなっていたのだろう。確かに琇有は彼に興味を持っていたようだったが。

「ちょっと待っていてくれたまえ、きみにも僕の厳選集をあげようと思っていたんだ」

琇有がいそいそと本の山へ捜索に向かう。それを見やり、季隆が隣に腰を下ろした。

「君も来てたんだ」
「はい。季隆どのはよくいらっしゃるのですか？」
「たまにね。意外と面白い蔵書をお持ちなんだよな、琇有様って」
知らないうちに交流を深めていたらしい。結蓮は感心しながら彼の横顔を見つめた。
「では今日も蔵書の研究に？」
「……いや。今日は訊きたいことがあって……」
ふっと彼が真顔になる。冊子の山を検分する琇有の背中をじっと見ている季隆に、結蓮は不思議に思って首をかしげた。

黎華殿を出た二人は、近頃ではめずらしく連れだって家路についた。
本来ならばまだ任務の終わる時間ではなかったはずなのだが、新作冊子に興奮した琇有がまたもや季隆に取材を始めてしまい、延々とそれが続いて帰れなくなってしまったのだ。結局、彼が〝訊きたかったこと〟をちゃんと訊けたのかどうかも結蓮にはわからなかった。
「なんか久しぶりだね。二人で帰るのも」
「そうですね」

それどころか顔を合わせるのも久々かもしれない。近頃の彼は書庫を空けていることが多かったし、結蓮も御使い様に誘われて交流してばかりだったから。

玉天大街を下りながら、そっと横顔を盗み見てみる。行き交う人たちを眺めながらぶらぶら歩いている季隆は、以前と同じでだらけた態度だ。

（様子がおかしいと思ったのは、私の気のせいだったのかしら）

しかし今日の彼はなんだか口数が少ない。こんなに大人しい人だっただろうか。それになんとなく微妙に距離が空いているように思える。

結蓮の疑問に答えるかのように、後ろをついてきていた翡翠丸が無表情で言った。

「いやに無口と思ったら。久々に奥様と二人になれて照れてるんすね、若さん」

「解説すんな」

翡翠丸の口に昼の残りの饅頭を突っ込むと、季隆は大きなため息をついた。

「豊老公があんなこと言うから……余計なことまで考えちゃうだろ……」

「お祖父様が何か？」

「えっ。いや、なんでもないよ」

慌てたようにごまかすと、ふうとまたため息をつく。結蓮は怪訝に思って彼を見上げた。

（やっぱり、少し変かも？）

いろいろ相談したいことや聞いてほしいことがあったのだが、これでは言えそうにない。

（御使い様のことで助言をいただけたらと思っていたのだけど……）

以前は彼のことを御使い様に手紙で相談していた。なのに今は御使い様のことを彼に相談したいと思っている。この真逆の現象が自分でも奇妙だった。

結局大した会話もないまま自宅まで来てしまったが、近づくにつれ、豪邸街にふさわしくない騒ぎが聞こえてきた。

よく見ると、門の前で男女が言い争っている。男のほうは別邸の家令を務めている青慎だ。

「いいから季さまに会わせてよ！　何かあったらいつでも来いって言ってくれたんだから！」

「旦那様はお留守だ。帰りなさい」

「この人でなしっ、姐さんにもしものことがあったら、あんた責任とれんのっ」

青慎がいつもの冷たい顔で追い返そうとしているが、女はめげた様子はない。

何ごとかと結蓮が見ていると、隣で季隆が驚いたように声をあげた。

「紅珠？　どうかしたのか？」

「あっ、季さま！」

気付いた女がぱっと笑顔になってこちらを見た。しかしそれも一瞬で、すぐに泣き出しそうな顔で駆けてくる。その勢いのまま季隆に飛びついた。

「季さま、助けて！　姐さんが……紅夏姐さんが大変なの！」

（紅夏？）

あの妖艶な妓女の名前だ。結蓮が驚いて季隆を見ると、彼はそれまでとうってかわって真剣な顔をしていた。

「どこだ？　紅幻楼にいるのか？」

「ええ、部屋にいるわ。季さまにすぐ来てほしいって」

「わかった」

女を促すように背中を押しながら、彼は思い出したように振り返る。

「ごめん、出かけてくる」

言い置く時間も惜しいといった様子でそれだけ言うと、女と二人で駆けていってしまった。

あっというまの出来事に結蓮が唖然としていると、遠慮がちな咳払いが聞こえた。

「……お帰りなさいませ、お嬢様。すぐに湯をお持ちしますので、中でお休みください」

いつもはそんなことは言わないのに、彼も今の状況を察して気を遣っているのだろう。結蓮は構わず詰め寄った。

「青慎どの。先ほどのお客人ですが、紅幻楼というところの妓女の方ですね？」

「……」

「紅夏という妓女の頼みで季隆どのを迎えにきたと。その理由は言っていましたか？」

青慎は返事に窮したように黙っていたが、やがて言い聞かせるように見つめてきた。

「何か事情がおありなのでしょう。じきに帰っていらっしゃいます」

めずらしくなぐさめてくれたらしい。結蓮は憂い顔で二人が消えたほうを振り返った。

その夜、季隆はとうとう屋敷に帰ってはこなかった。

「信じられないわ！　許嫁がいるのに花街遊びするだなんて！」

怒りに燃えた声と、はたきが空を切る鋭い音が中庭に響き渡る。

妓女と出ていった季隆が一晩家を空けた事実はすぐさま知れたようで、朝から華瑛は怒りまくっていた。

「あの浮気男――!!　帰ってきたら覚悟しなさい！　わたしのはたきが火を噴くわよ！」

「公主様、どうかお静まりください」

「華瑛と呼んでって言ってるでしょ！」

くわっと牙をむきそうな勢いで叫ぶと、華瑛は大きくため息をついた。

「結婚前からこんなことをされて、腹が立たないの？　それともあなたたちって、仲がよさそうにみえて意外と冷めた間柄なの？　親の決めた結婚だからと割り切っているわけ？」

「いえ、そんなことは……」

「……あなた、前に好きな人がいるって言っていたわよね。それってたぶん、橘じゃないのでしょ？　だからどうでもいいのかもしれないけれど……。ひょっとして、それで橘に遠慮しているの？」

眉をひそめてのぞきこまれ、結蓮は思わず目を伏せた。

正直、どう反応すればいいのかわからなかった。

季隆との婚約は偽装なのだし、彼がどこで誰と会おうと構わない。それは本心だ。まあ多少は気になるけれど、彼の行動を制限するつもりはない。しかし世間的には婚約しているわけだから、婚約者が遊び回っているのを黙殺するというのもおかしいのかもしれない。

そんなふうにぐるぐると回る思考とは別に、純粋に彼の様子が気にかかっていた。

（名を聞いたとたん顔色が変わられたし……。紅夏どのとの間に何かあるのかしら。特別な、何か因縁のようなものが）

不実な婚約者に対する罵詈雑言を続けている華瑛に相槌をうちながら、結蓮は考えこんでいたが、ふとその事実に思い至った。

（もしや、紅夏どのは季隆どのの恋人？）

そういえば彼は誰かと文通しているようだった。しかもそれを必死に隠しているようでもあった。その相手が紅夏だとしたら。

（でも、季隆どのは長らく都を離れておられたはず。先日街で会った時、お二人は久しぶりに

会ったようなことを言っておられたわ。それで恋人というのも変な話かもしれない……）

紅夏は季隆が都に戻ったことを知らないようだった。つまり、彼女は季隆が都を離れる前の知り合いということになる。景親が亡くなってすぐに都を離れたことと、何か関係があったりするのだろうか。

（そういえば……）

はたと思い出し、結蓮は華瑛を振り返った。

「華瑛様は昔、季隆どのを御前に召されたことがおありとうかがいましたが」

「え？　ええ。五、六年くらい前だったかしら」

「その時、季隆どのの他にも封陰官が同行していませんでしたか？」

以前、華瑛は季隆と再会した時にそんなことを言っていた。結蓮も彼女の夢に入った時にそれらしき人物を見ている。おそらくは彼が小野景親に違いない。

「ええ、いたわ。橘と同じ、璉からの留学生だったはずよ」

「どんな方でしたか？」

やっぱり、と結蓮は勢い込んで訊ねたが、華瑛は難しい顔つきで首をひねった。

「実を言うと、あまり記憶にないの」

「そうですか……。昔のことですから仕方がありませんね」

「そうじゃないの。その封陰官のことだけを覚えていないのよ。橘はいろいろと目立っていた

から印象に残っていたけれど、でももう一人のほうはね……名前も思い出せないわ」
「小野景親という名ではありませんか？」
期待をこめて結蓮は名前を出したが、華瑛の反応は鈍かった。
「たぶん、そんな名だった気がするけれど……ああ、わからないわ。橘が異様に目立っていたせいで、他の者の印象が薄かったのよ」
「そうでしたか……」
よほど季隆が突出した存在だったのか、それとも景親が控えめすぎたのか。どちらにしろ彼女から当時のことを聞き出すのは無理なようだと察し、結蓮は小さく息をついた。

数日後、帰宅した結蓮は楼門をくぐろうとしたところで季隆とばったり鉢合わせした。
「あ」
荷物を小脇に抱えていた彼が一瞬ぱつの悪そうな顔になる。だがすぐに笑いかけてきた。
「晩飯作っといたから、お腹いっぱい食べてね」
「……あの！」
そのまま行ってしまいそうな彼を思わず呼び止める。昼間も職場で顔を合わせなかったし、

一体最近の彼はどこで何をしているのだろう。劉博士によれば封陰省がらみの仕事はしているようだから、怠けているわけではないらしいが。

「お出かけなのですか？　今夜も……」

ここ数日、毎晩のように彼は屋敷を空けていた。あの妓女が迎えにきた日からずっとだ。

気まずそうに目をそらしていた彼が、うん、と髪をかきあげつつうなずく。

「たぶん、朝まで帰らない」

「……」

どこへ行くのかと訊きたかったが、口に出すことができなかった。契約上の許嫁でしかないのに込み入ったことを問い詰めてもいいのかと迷ってしまったのだ。

沈黙した結蓮を季隆がちらりと見る。何か言いたげに口を開いたが、思い直したように傍をすり抜けていった。

「だから戸締まりには気をつけてね。変な人が入ってこないように」

いつもの笑顔でそう言うと、彼は黄昏に染まり始めた道を去っていった。

夜。一人きりの食卓は静まりかえっている。

「……」

黙々と食べていた結蓮は、やがて息をついて箸を置いた。

季隆がいないだけでこの静けさ。いかに彼がいつも一人でしゃべりまくっていたかがわかる。

季隆が同居するまでは食事をともにしたことがなかった小さな従者たちは、彼がいないと昔を思い出してか同席しようとしない。以前なら当然だったことなのに、今は居心地が悪くて変な気分だった。

（この食卓、こんなに広かったかしら……）

今までは気にしたこともなかったのに。この気の抜けたような味気なさはなんなのだろう。

「ちい姫様、お口に合いませんか？　婿君様がお作りになったお食事なのですが」

給仕をしていた四郎が心配そうに訊ねる。彼らの話によると、季隆は毎日一度屋敷に戻って食事の支度をしてからまた出かけていくのだという。

「いいえ、とてもおいしいわ。でも今日はここまでにしておくわね」

「そんな……ちい姫様、まだおかわりを七杯しかしておられません。食欲がないのですか？」

「ちい姫、そんなまずい飯、無理して食うことないぞ！」

なぜかぶんむくれていた九郎がふいに叫んだ。

「あんなやつ、これを機に追い出すべきじゃ！　あいつはなあ、ちい姫。この屋敷に来た時から、夜中にたびたび屋敷を抜け出して、どこかに行っておったんじゃぞ！　四郎もちゃんと見ておる！」

「九郎！」
四郎が慌てて制したが、すでに遅かった。結蓮は驚いて彼らを見つめた。
「本当なの？　四郎」
申し訳なさそうに四郎がうなずく。従者の中でも筆頭の彼は、屋敷の警備のため術をほどこす役目をしており、人の出入りを感じることができるのだ。
「黙っていて申し訳ありませんでした。ですが、とても言えなくて……」
「いいのよ。それで納得がいったわ。季隆どのはやけに朝が弱くていらっしゃると思っていたけれど、そのせいだったのね……」
「ちい姫！　納得しとらんで追い出す準備をしようぞ！」
「何を言うの。お祖父様のお許しもないのに、そんなこと」
彼がこの屋敷に住んでいるのは祖父の命令だ。それがなければ以前のように長屋でのんびり暮らしていたことだろう。もちろん誰に断る必要もなく好きな時に外出していたはずだ。
だから、彼が夜中に留守にするからといって自分が咎めるのは筋違いなのだ。――それはじゅうぶんわかっているのに、なぜだかため息が止まらない。
「なんであやつを庇うんじゃっ！　……はっ。まさかあやつのことを……!?」
九郎が息を呑んで青ざめる。結蓮が首をかしげると、慌てて膝に取りついてきた。
「ちい姫！　ま、まさかあやつを、友人と思っとるんじゃなかろうな!?」

「え？」

予想外の指摘に、結蓮は思わず瞬いた。

（友人？　季隆どのと私が……？）

今まで友人という存在がいなかったので、問い詰められても実感がわかない。

けれど、言われて気が付いた。彼と一緒にいるのは大変ではあるが、楽しいのもまた事実だ——と。

（そうか。だからあの人がいないと寂しいのか……）

結蓮が無言になったのを誤解したのか、四郎がおずおずと口を挟む。

「あの、ちい姫様。実は先ほどからずっと、門に客間の姫君が立っていらっしゃるのですが」

「華瑛様が？　こんな時間に何をしておいでなのかしら」

「……婿君様のお帰りを待ち伏せて懲らしめるおつもりのようです」

ゆるやかな回廊を小走りに向かうと、吊り灯籠に照らされた向こうに華瑛の後ろ姿が見えた。閉じた門扉の前で庭箒を片手に仁王立ちしている。

（いけない、もう夜なのにお一人でこんなところに）

結蓮は急いで駆けつけようとしたが、別の回廊を青慎がやってくるのに気付いて足を止めた。

「華瑛、何をしている？」
びくっとしたように華瑛が振り返った。
「陽が沈んでから外に出るものじゃない。部屋に戻りなさい」
「……」
「華瑛？」
怯んだように黙っていた華瑛が、キッと顔をあげる。
「い……嫌ですっ。橘に一言言ってやります」
「何を言うつもりだ。橘様が外出されるのを止める資格は侍女にはないんだぞ」
「だって……、お嬢様が寂しそうにしているんですもの」
その言葉は、少し離れたところで聞いていた結蓮の胸にぐさりと突き刺さった。
「……絶対そうよ。言わないだけで、寂しいと思っているわ。見ればわかる……」
か細い声で華瑛がつぶやく。彼女がそう思うのは、もしやかつての自身と重ね合わせているからなのだろうか。
青慎はそんな華瑛を見つめていたが、やがて静かな口調で言った。
「橘様にも何かお考えがあるんだ。私たちが騒ぐことじゃない」
「でも――」
言い合う声がだんだんと小さくなる。結局、華瑛は青慎になだめられて私室に戻ることにし

たようだ。

ほっとしながらも、結蓮は青慎の言ったことを思いだして考え込んだ。

季隆にも何か考えがあるのだろう。それは結蓮も同感だった。あの彼がこそこそ隠れて花街通いなどするだろうかとずっと疑問だったのだ。

（けれど――それなら一体、どこで何をされているの……？）

皓々と輝く月を見上げ、結蓮はひそかにため息をついた。

# 第三章　花街の交錯

月光の下、どうっと音をたてて異形の者が地面にくずれる。やがてそれは閃光とともに砕け散り、跡形もなく消えた。

最期まで油断なく見届けていた人影が、はあっと大きく息をはく。

「……こいつも違う……」

無念のつぶやきをこぼしてその場にうずくまった。

そのまま動けずにいると、ばささっと羽音が響き、上空から翼をもつ人影が下りてきた。

「若さん」

淡々とした声に呼ばれ、季隆は肩で息をしながら顔をあげた。

「倒れるまで戦ってどうするんすか。味方がいるならまだしも。毎回運ばされるわしの身にもなってくださいよ」

「あぁ？　冷たいこと言うなよ、翡翠丸ちゃん」

遠慮なくもたれかかり、翼の羽根が抜け落ちているのに気付いてなでてやる。ここ毎晩のよ

うに戦闘に駆り出しているせいで傷んでしまったらしい。
翡翠丸は特に感慨もないような顔つきでそれを見た。
「奥様に言わなくていいんすか。だいぶ心配してたっすよ」
季隆は返事をせず、従者に思いきり寄りかかったまま月を見上げる。
結蓮に不審に思われていることくらい、とっくに気付いていた。
だがこれは自分の問題だ。自分でけじめをつけたい。そして今がまさにその好機なのだ。
「……おまえ、絶対あの子に言うなよ。全部終わったら俺から話す」
眉を寄せて念を押すと、冷めた眼差しが返ってきた。
「そんなにあの皇子さんに張り合わんでも。若さんも奥様を抱き上げてやったらいいじゃないすか」
「うるせーな、できるもんならとっくにやってんだよ。俺の前で当てつけみたいに毎回軽々と持ち上げてくれやがって……。どうせ俺はひ弱だよ。あんな腕力ねーよ……」
「そのうちいいことあるっすよ、若さん」
憐れみの目をした従者になぐさめられながら、季隆は足をひきずって歩き出す。
軽口のような言い合いも心までは軽くしてくれなかった。
「――なあ。崇怜皇子は、まだあの子につきまとってるか？」
「へい。屋敷の結界は突破できなかったみたいっすけど」

ならいい、とほっとする。あの積極性で屋敷に乗り込んでこないのはありえないと思っていたが、おそらくやろうとして失敗したのだろう。家付き従者の結界はなかなか強力だった。

蓮女の加護の件を琇有皇子から聞いたと崇怜は言った。しかし当の琇有に確認してみたところ、彼は知らないと答えた。その時のきょとんとしたような顔を思い出し、季隆は眉を寄せる。

――二人の皇子。どちらかが、嘘をついている。

気がつくと、あの青黒い深淵に立っていた。

「――太子よ」

低く轟く呼びかけに、琮成はゆっくりとあたりを見回す。

赤い目玉がいつもより近くにあった。引き込まれそうなほどの禍々しさだ。

「**早急に認めよ。豊結蓮を求めるのだ**」

同じ要求を繰り返され、さすがに苛立つ。この黒龍は一体、自分に何をさせたいのか。

「**我のもとへ来い。さすれば結蓮はおまえのものだ**」

「去れ」

短くはねつけると、黒龍は沈黙した。

赤い目玉の下方、別の赤黒い輝きが現れる。
それが舌だと気付いた瞬間、目にも留まらぬ速さで顎を開いて迫ってきた。
――食われる！

「太子殿下！」
必死に呼びかける声に、はっと意識が覚醒する。
目の前に結蓮の顔があった。隣には秦少傅もいる。どちらもうろたえた様子だ。
いつのまにか脇息にもたれてうたた寝していたらしい。悪夢のせいで夜に眠れないのがあだになってしまった。
「殿下、お顔の色が優れません。すぐに医師を呼んでまいります！」
「よい。それより、なぜおまえがここにいる？」
一瞥した琮成に、秦少傅が手巾を差し出しながら答えた。
「ご機嫌うかがいにいらっしゃいましたのでご案内しましたところ、殿下がうなされておいでで……」
やけに丁寧な言い回しを怪訝に思った時、ようやく室内にもう一人いるのが目に入った。
眉をひそめ案じるようにこちらを見ているのは兄の崇怜だ。さすがに驚いた。



「兄上……」
「太子殿下、ご気分は？　水枕を持たせましたが」
少々きまりの悪い思いでうなずく。秦少傅が水枕を受け取り、こめかみに当ててくれた。
「お恥ずかしいところをお見せしました。わざわざお越しいただいたというのに居眠りなど」
「桃霞の夏は暑い。私も寝苦しくて毎晩困っていますよ。それでいて昼寝をすると悪夢を見たりするのだから参ってしまう」
気にするなというように崇伶が笑って首を振る。弟とはいえ太子である琮成に対し、丁寧かつ兄らしい気さくな態度をごく自然にとれるのだから、こういうところが人気なのだろう。
「実は私も、ここのところ嫌な夢を見ることが多くて――」
琮成が言いかけたとたん、結蓮が太刀に手をかけた。
「なんと……！　おのれ夢魔め、殿下を悩ませるとは不届き千万！」
「うるさい。静かにしろ」
いつものように命じるとすぐに彼女は大人しくなったが、動揺は収まらないようだ。そんなにもひどい顔色をしていたのかと琮成は己の物言いを少し反省した。
「心配するな。すでに封陰官に言って対策をとらせてある」
「さようでございましたか。ですが、本当に大事ございませんか、殿下」
「次官に話したら即日夢占の専門職を寄こしてきた。専門外のおまえがいくら騒いだところで

どうにもなるまい。不用意に話を大きくするな」
「はっ……、殿下の仰せに従います」
専門職が動いていると聞いて結蓮は少しほっとしたようだった。これでもう無闇に心配のたれ流しをすることはないはずだ。
「……橘次官は、よくこちらにおいでになるのですか？」
「時折来るが。それがどうした」
「あの……、お元気にしておいでしたか？」
おずおずと訊かれ、琮成は怪訝な思いで結蓮を見つめた。
「それはおまえのほうがよく知っているだろう」
「……はっ」
おかしなことを訊くものだと思ったが、彼女のほうもその自覚はあったらしい。恥じ入ったように黙り込んだ。
それにしても一緒に機嫌伺いに来たということは、いまだに崇怜に連れ回されているのか。
何気なく見た琮成は、兄が浮かない顔をしているのに気がついた。
彼は切なげな眼差しで、うつむく結蓮をじっと見つめていた。

東宮御殿を出ていくらも行かないところで、ふいに結蓮は肩をつかまれた。
驚いて振り向くと、崇怜が真剣な顔で視線を向けている。
「あの男のことを気にしすぎだ、結蓮」
「――え？」
腕をつかんで向き合わされる。どことなく不穏な雰囲気だ。
「前々から気になっていた……。先日の絵師との会話で、おまえは何回あの男の名を口にしたか覚えているか？　しかも先刻は太子にまであの男の動向を確認した。まさかそこまでとは思っていなかったぞ」
ようやく結蓮は、彼が言っている〝あの男〟というのが季隆のことだと気がついた。そして自分がそんなに季隆のことを気にしていたことも初めて理解した。
（でもそれは、様子がおかしいから心配していただけで……）
内心が伝わったのかどうか、崇怜が責めるように視線を鋭くする。
「私を屋敷に入れようとしないのに、あの男とは寝食をともにしているのが解せない。いかに私たちが将来を誓い合った仲だと言っても、他の男ばかり見ているのは良い気持ちはしない

ぞ」

「そんな、私は別に――」

反駁しかけるのを制するように、崇怜は結蓮の背後の板塀に手をついた。ぐっと身を乗り出され結蓮が反射的に身体を退くと、さらにのぞきこんでくる。

「おまえがいつまでもそんなふうならば、私はすぐにでもおまえを連れて都を去らねばならない。おまえも早く私と二人きりで修行をしたいだろう？」

「……」

どうしてそんなことを言われるのだろう。呆然として彼を見上げる。

崇怜の瞳が切なく訴えかけてくるかのようだ。

「あの男はおまえを仕事の道具としてしか見ていないじゃないか。そんな人間の傍に置いておきたくない。私のもとにいろ、結蓮」

「崇怜様……」

「私ならおまえを守ってやれる。何があっても、どんなことからでも」

情熱的な眼差しを向けられても、嬉しいどころか戸惑うしかできない。

じわじわと感じていた違和感が、徐々に形になっていく――。

「だから私といろ。……私のものになれ」

甘い言葉が耳を打ったその瞬間――彼の肩越しにぼんやりと淡い光が見えた。

思わず彼から目をそらしてそちらを見る。光に見えたのは白い衣装だった。ふわりと軽やかなそれをまとった娘が、桃の木の枝に腰掛けていたのだ。

（え……？）

東宮府や後宮の女官とは明らかに違う衣装と、なぜか木の上にいることに驚いて凝視すると、彼女もじっと見つめ返してきた。耳の上あたりで一つに束ねた髪が微風に揺れている。

「どうした？」

結蓮の視線に気付いたのか崇怜が訝しげに振り返る。——と、彼女はすっと姿を消してしまった。

（今のは……何？）

まぼろしか、目の錯覚か。いや、しっかり見つめ合ったのだ。錯覚などではない。

ふいに崇怜が身体を離した。打って変わって彼はいつもの顔に戻っている。

「照れ屋の結蓮をあまり急かしてはいけないな。私たちがともに行くことはすでに決まっているのだから焦ることはなかった。すまない」

軽く眉をひそめて謝ると、また爽やかに微笑む。

「用を思い出したからもう行くよ。また後ほど会おう」

そう言って、少し唐突とも思えるほどに颯爽と行ってしまった。

（助かった……）

もし件の彼女が現れなかったらどうなっていたかわからない。結蓮はほっと息をついたが、すぐさま口を押さえた。

御使い様がいなくなって「助かった」？　憧れの恩人に対して、どうしてそんなふうに思ってしまったのだろう。

一度生まれた戸惑いは、なかなか消えてはくれなかった。

書庫に戻ると、めずらしく相長官がきていた。劉博士と二人で何やら話し込んでいる。季隆と翡翠丸は今日も姿がない。二人でまた出かけているようだ。

礼儀として長官に拱手し、書類の整理に取りかかる。専門外の結蓮は大きな任務がない時は書庫の雑用をうけおっていた。

「――ええ？　蓮女舞の歌妓の事前調査って、封陰官がやるものなのぉ？」

劉博士の声が耳に入り、なんとなく興味を惹かれて目をやる。

「やれって言われたんだからしょうがないでしょ。僕だって好きで行くわけじゃないんだよ」

「とかいって長官、遊びが目的じゃないですよね？」

「おや。疑うのかい。むしろあまり行ったことがないから社会勉強のつもりでいるんだけど」

「えっ、行ったことないんですか。やだ、一人で行かせるのが激しく不安なんだけど。なんか

いろいろ巻き上げられそう」

だって花街よ、と劉博士が眉をひそめている。どうやら相長官が花街へ任務で出かけることになったのを報告にきたところらしい。

（花街……）

「困ったわねぇ。せめて季ちゃんがいれば、いろいろ慣れてるんだけど……っと、いけない」

劉博士がこちらを見て少し慌てたように口を押さえる。結蓮はすかさず歩み寄った。

「よろしければ同行させていただけませんか、相長官」

「貴女が？」

相長官が目を瞬く。劉博士のほうはますます慌てた顔になった。

「何言ってるの、だめよ！　あなただって行ったことないんでしょ、そんなところに二人だけで放り込めないわよ」

「どうして同行したいんだい？」

不思議そうに問われ、結蓮は目を伏せる。

「花街の妓女に関して気になっていることがありまして……調べたいのです」

高官たちを次々に籠絡した美姫は妓女であるという。命令が出ているわけではないから表立って調査に動くことはできないが、何かのついでに情報を得ることくらいは許されるはずだ。

そして季隆の秘密に関係しているであろう紅夏という妓女のこと。彼女の人となりを探れば

季隆の謎の行動も解き明かせるのではないだろうか。
ふーん、と相長官がうなる。
「いいよ。一緒に行こう」
「ちょっと、長官!?」
「久しぶりに二人だけで話してみたいしね」
劉博士を制し、長官がのほほんと笑う。結蓮は目を輝かせて一礼した。

花街へ向かう馬車の中で二人はぽつぽつと話をした。
「なるほど、橘君の様子がおかしくて気になっていると。それで調査に行くんだね」
「はっ。大きなお世話だとは思いますが、何か困っておいでなら助太刀したいと思いまして」
「いいことだ。助け合いは大事だよ」
ちゃんと聞いているのかいないのか相長官は気のない声で相槌を打っている。しかし結蓮は別に嫌な気分にはならなかった。彼とこうして話をするのは初めてではないし慣れている。
（ちっともお変わりないのね……）
思えば五年前、業焔から助けてくれた恩人を捜していた時のこと。最初に駆けつけてきたと

いう人の存在を知り、精一杯のつてを頼って会いにいった。それが彼だったのだ。
御使い様とは似ても似つかない壮年男性が現れてびっくりしたものの、丁寧に話を聞いてくれた彼にその時からずっと好感を抱いていた。まさか時を経て自分の上官になるとは思ってもいなかったが。
「それにしても、歌妓の事前調査というのは封陰省の職務からはずれている気がしますが……」
「実際は他にも調べたいことがあってね。近頃、高官が女に誘惑されておかしくなったって事件が頻発してるんだけど、高官の足取りを追ってみたら花街で女と会ってるんだよね」
結蓮はほっとして長官を見上げる。
「その一件は小耳に挟みました。やはり妓女の仕業なのですね」
「封陰省はちょっと因縁があってね。昔、若い封陰官が似たような事件で命を落としたものだから、同じ女の犯行じゃないかと気になって」
「……小野景親という封陰官のことですか？」
相長官が口をつぐむ。まじまじと見られ、結蓮は観念して打ち明けた。
「実は、彼の事件のことを調べたいと思っています。季隆どのの近頃の不審な行動がその方と何か関係しているのではと思って……」
「へえ。鋭いじゃない。なかなかの観察眼だ」
「やはりそうなのですね？　親友だったとうかがいましたが……」

勢い込んで確認すると、相長官がくすっと笑って見つめてきた。
「小野君のことを知りたいというより、橘君のことを知りたがっているように見えるがね？」
結蓮は思わず言葉に詰まった。それは当たっているような気もする――。
相長官はそれ以上冷やかすこともなく、のんびりと前を見たまま続けた。
「小野景親というのは、貴女の言ったように橘君の親友で相棒でもあった男だ。とても仲が良くてね、いつも一緒にいたよ。若くして天才と呼ばれ、まっすぐな気性でどこか浮き世離れしていた橘君を、年上の小野君が優しく見守っている……そんな感じだったね」
結蓮は神妙な顔で聴き入った。華瑛の夢の中で見た二人のことを思い出す。なんとなく関係性も想像がついた。
「でもそれは長く続かなかった。二人の間には亀裂が生じ、相棒でありながら一緒に任務に出ることもなくなってしまったんだ。そして小野君は亡くなった」
（亀裂……？）
「その時以来、橘君は天才という呼び名を毛嫌いするようになった。将来を嘱望されていた子だったんだけどね。今みたいなゆるい感じの子になってしまって」
まあ僕が言える筋合いじゃないけど、と相長官が他人事のように笑う。
「やはりあの性格は装っていらしただけなのですね」
「さあ、それはわからない。もとからああいう面もあったと思うよ？　ただ、あまり本心を表

に出さなくなったのは間違いないね」

「……」

親しかった二人が仲違いしたのはなぜだろう。理由はわからないが、そんな状態で親友を亡くしたのだとしたら、季隆の心には深い傷が残ったのではないだろうか。

いつも軽口を言ってばかりの怠け者な彼がそうして性格を装ってきたと思うと、なんだか胸がもやもやと苦しい。

「他にも何か訊きたいかな？　亀裂が生じた経緯とか？」

「いえ、ありがとうございました」

結蓮は急いで首をふり、一礼した。

「ご本人にお聞きすべきことでした。私が間違っていました」

彼のことをもっと知りたい。なのに一度も彼自身に訊こうとしなかった。

相長官は目を細め、「そう」とうなずいただけだった。

まだ夕方だというのに赤々と提灯が灯り、楼門を浮かび上がらせている。門の中には高楼がいくつもそびえ立ち、それぞれの間を飛廊が走っていた。

案内されたのは高層の眺望に優れた部屋だ。長官の身なりからして朝廷高官だと察したのだ

ろう、通りすがりの使用人や若い妓女が丁寧に頭をさげて挨拶してくれた。
「相先生、今宵は紅夏をご指名だとか？　毎度ご贔屓にありがとう存じます」
楼主がにこやかに口上を述べる。結蓮は驚いて声をひそめた。
「長官は常連でいらしたのですか？」
「あれは商売人の常套句」
同じくひそひそ声で返され、なるほどと納得する。なにぶんこういう場所には来たことがないので勝手がわからない。
紅夏という妓女を調べたいと打ち明けた結蓮に、相長官は同意して彼女を座敷に呼ぶことにした。そこまでしてもらっていいのかと思いきや、彼も紅夏には興味があったと言う。
『小野君が死んだ時、最後に会ったのが紅夏という妓女なんだよ』
相長官の言葉を思い出し、結蓮はひそかに拳を握りしめた。
妖艶すぎる美女は景親の死について何を知っているのだろう。問いただせば答えるだろうか。
そんな思いで緊張していたのだが。
「相先生、実は紅夏は近頃具合を悪くしておりまして……。今宵はお傍にまいることができないのでございます」
（えっ!?）
「おや。それは残念な」

目をむく結蓮とうらはらに相長官はゆったりと構えている。楼主がすかさず長官の杯に酒を注いだ。

「その代わりと申してはなんですが、今宵は紅夏の妹分たちを集めております。まだ若いですが器量よしぞろいでございますよ。どうぞご贔屓に。――おまえたち、入りな！」

鈴が鳴らされ、扉が開いて妓女たちが華やかさを振りまきながら入ってきた。

飾り立てた女たちが愛想よく集まってくるのを結蓮は何気なく見ていたが、そのうちの一人にふと目を留めた。どこかで見たことのある顔だ。

「あなたは……」

彼女は怪訝そうに見つめ返してきたが、こちらが誰かわかったのか目を瞠った。

「あっ。季さまの許嫁様！」

その声で結蓮も思い出す。屋敷に訪ねてきた紅珠という妓女だ。

「えっ、どうして!?　季さまを連れてったから怒って殴り込みにきたの？」

「いえ、違います。任務で来ました」

「任務ですって！　きっと紅夏姐さんの後見役の調査よ！」

楼主が退室して気がゆるんだのか、彼女たちはわいわいと会話に参加してきた。

「やっと次の後見役が決まったのね！　もしかしてこちらのお大尽様がそうなの？」

「お大尽様、姐さんをよろしくお願いしますね！」

「僕じゃないけど決まったようだよ」
長官が淡々と答える。妓女たちが歓声をあげた。
「よかったわ。このまま後見役が決まらなかったら、紅夏姐さん、蓮女舞に出られなかったかもしれないものね」
彼女たちが嬉しそうにはしゃいでいるのも無理はない。
蓮女舞に出演する歌妓は、朝廷高官の後見を得て初めてその資格を得るのだ。皇帝の御前に出るわけだからそれくらいの事前準備は必要であり、逆に言えばどんなに才能豊かな歌妓でも後見役がいなければ舞には出られないのである。
（ということは、紅夏は蓮女舞に出るということか）
かしこまって酒を断りつつ、結蓮は考える。
歌妓たちが競い合う背後では、それぞれ後見となった高官たちも競っている。自分が後見についた妓女が皇帝の後宮に入って寵愛を受ければさらに栄達を望めるからだ。その競い合いは繊細にして熾烈だと聞いたことがある。
「紅夏どのの後見役は決まっていなかったのですか？」
「ううん、決まってたんだけど、なんでも病気になったとか……」
紅珠が眉をひそめて教えてくれる。結蓮は、はたと気付いて相長官を見た。
眠たげな顔はそのままに、長官が静かにうなずく。

「腑抜けにされたの」

ごく小さな囁きが耳に入り、結蓮はごくりと喉を鳴らした。

まさか謎の美姫に誘惑された官吏の一人が紅夏の後見役だったとは。

（つまり一連の件には彼女が関与している……？　いや、後見役がそうなっては蓮女舞に出られなくなるのはわかっていたはず。不利になるのにそんなことをするとは思えない）

謎の美姫の目的はなんなのか。まずそこがわからなければ問題は解決できない。もちろん紅夏が関与しているのかも不明だ。

「……紅夏どのはどんな方なのですか？」

まずは基本的なことを知ろうと傍にいた紅珠に訊ねてみると、彼女は目を輝かせた。

「すごく綺麗な人よ。みんな憧れてるわ」

「新入りの子たちにも優しいしね。ここにいる子は全員お世話になってるわよね」

「特に田舎出身の子をよく面倒見てるわ。姐さんも地方の出だから気になるみたいで」

「あと大人しい子ね！　一人でぽつんとしてるような子をほっとけないのよ」

妓女たちが口々に褒めそやす。それは結蓮が抱いていた印象を払拭するものばかりだった。

夕暮れ時に出会った妖艶な美女からは想像がつかない。

「今なんて、大人しい上に田舎出身の新入りが来たもんで、ずっと世話を焼いてるわ。ほら、なんて言ったっけ？　あの地味な子」

「紅淑よ！　妹分の名前を忘れないでよ」
「だってほんとに目立たないんだもの、あの子」
商売そっちのけで妓女たちがおしゃべりに花を咲かせるのを、結蓮は真面目に聞いていた。
「皆さんに慕われておいでなのですね」
「そうなの！　いい人なのよ。なんで姐さんがあんな目に遭わなきゃいけないのかしら……」
「え……？」
眉をひそめた紅珠をのぞきこんだ時だった。
楽器の音色や女たちの笑い声の合間をぬって、悲鳴が響き渡った。
「！」
とっさに結蓮は太刀を手に立ち上がる。少し遠いようだったが妓楼の外だろうか。
「様子を見てきます！」
言い置いて座敷を飛び出した。
廊下を行く人々にも聞こえたのだろう、何事かと顔を見合わせている。結蓮はその合間をすりぬけて階段へと走った。
妓楼の中央は最上階まで吹き抜けになっており、周りを回廊と部屋で囲んでいる構造だ。各階をつなぐ広い階段は赤く色を付けられ、花や飾りで彩られている。
案内されたのが高層階だったせいで、延々と曲がりくねって伸びている階段を下りなければ

ならない。駆け下りようとした時、下のほうの部屋から誰かが飛び出してきたのが見えた。

（え――季隆どの!?）

柄の長い呪具を手にして彼が外へと走っていく。結蓮は驚いて見送ったが、すぐに顔を引き締めた。

階段をのんびり下りていたのでは間に合わない。そう判断し、ためらいなく手すりに足をかけると、階下へと身を躍らせた。

季隆がその路地に駆けつけた時、そこは血の臭いが充満していた。

妓女と客だろうか、数人の男女が倒れている。その向こうには霧をまとった巨大な獣。

鋭い牙の合間から血がしたたり落ちているのを見て、一気に身体が熱くなった。

「やりやがったな……！」

呪具を取り出し、次々に投げ放つ。妖怪が避けたところへすかさずまた呪具を投げ、脚を地面に縫い留めた。

苦しげにうなる妖怪を見据えたまま懐剣を取り出す。動きを止めている間に神憑きの太刀の術式を発動させるべく、刃に自分の血を含ませた。しかし空中の霊符を描ききらないうちに妖

怪は呪具を振り払い、こちらに突進してきた。
（だめか）
舌打ちして、柄の長い呪具を構える。
他に誰かいてくれたら時間稼ぎをしてもらえるが、一人だけでは自分の戦い方は成立しないことも多い。それは承知しているからいつもなら別の手段を考えるのだが、今日は冷静になれなかった。
連日の外出による疲労が蓄積している上、凄惨な光景を見せられて激昂している状態なのだ。自分でも気付かないほど頭に血が上っていた。
襲いかかってきた妖怪の牙を呪具で防ぐ。ガキッと鈍い音がして、足裏が砂を掻いた。そのままずるずると押しやられたが、ひるむことなくにらみつける。
「……なんで紅夏につきまとうんだ」
妖怪は血なまぐさい息を荒く吐いているだけだ。力を込めて押し戻しながら季隆は続けた。
「景親を殺したのは、おまえか？」
妖怪の口元に、笑みが浮かんだように見えた。
目にしたとたん、感情がはじけ飛んだ。呪具を片手で押し戻しつつ、もう片方の手が無意識に別の呪具をつかむ。目の前にある妖怪の目玉へそれを突き立てた。
妖怪が咆哮する。苦し紛れのように片腕に嚙みつかれた。

「っ！」

噛みちぎられたかのような激痛が走る。ぼたぼたと血がほとばしるのを感じ、たまらず膝をついてしまう。

（くそ……）

疲れのせいか、もう力が尽きてしまったのか。目がかすんで相手のことがよく見えない。勢いよく躍りかかってくる気配を感じながら、呪具を握りしめる。一瞬、もうだめかもしれないと思った。それならせめて相打ちでもいい――。

「待て!!」

毅然とした声が響き、誰かが視界に飛び込んできた。

季隆に襲いかかろうとしていた妖怪を彼女の太刀が食い止めている。

「季隆どの、ご無事ですか!?」

妖怪と刃を交えたまま振り向いたのは結蓮だった。

「遅くなって申し訳ありません！　上階から飛び降りたら床が抜けてしまって、脱出するのに時間がかかってしまい――」

「……」

「季隆どの！」

一瞬気が遠くなり、結蓮の声に呼び戻される。

のぞきこんでいる彼女の背後に妖怪の姿はない。退治してしまったらしい。
自分はあれだけ苦戦したのに、颯爽と現れたと思ったらこれか。
（俺より恰好いいだろ……）
それにしてもなぜ彼女がここにいるのか。疑問に思いながらも季隆は再び気を失っていた。

「季隆どの！　しっかりしてください！」
動かない彼に結蓮は懸命に呼びかけた。
騒ぎを聞きつけて人だかりができている。そのうち季隆の馴染みらしい妓女たちが何人も出てきて取り囲んだ。
「季さま、どうしたの!?　こんなところで横になって」
「酔いつぶれて寝ちゃってるんじゃない？」
「やだ、かわいー」
「何言ってんのよ、季さまはお酒強いでしょ。きっとつまずいて打ち所が悪かったのよ。ね、許嫁様」
口々に原因を予想しあっている彼女らは、季隆が妖怪と戦闘の末に倒れたとは夢にも思っていないらしい。

何かおかしいと思って結蓮は周囲を見回し、目を疑った。
駆けつけた時には一面血の海だったはずの惨状が跡形もなく消えている。妖怪に襲われて倒れていた人々の姿もない。
（一体、どういうこと？）
わけがわからず、ごくりと喉を鳴らした時だった。
あたりの喧噪をぬって、ひそやかな声が耳に入ってきたのだ。
「……邪魔なのよ。あの男……」
悪意に満ちた、いまいましげな声。
ざっと結蓮はそちらへ顔を向ける。だが人が多すぎて誰が発した言葉なのかわからない。
（今のは、季隆どのに向けられた言葉……？）
「季さまっ!?」
ふいに悲鳴のような声がして、ばたばたと妓女が一人走ってきた。
がばりと季隆に飛びつくようにしてすがったのは、あの紅夏という妓女だ。髪を振り乱し、美しい顔をゆがめて泣くのを堪えている。
「あああっ、季さま許してけれー！　あたいのせいでこんな、こんなぁ――っっ！」
「……!?」
やけに訛った言葉遣いで取り乱している彼女を、結蓮はまじまじと凝視した。



相長官の指示により、気を失った季隆は紅幻楼の一室に運び込まれた。
若い妓女たちが看病しようと詰めかけ、その後ろで紅夏がさめざめと泣いている。
「うっうっうっ……、あたいが悪いんだ。もし季さまがこのまま目ぇ覚めなんだら、あたい、どうしたらいいんだべ……」
「もうっ、姐さん！　ぼろが出るからしゃべっちゃだめって言ったでしょー！」
「そうよ、あやしい魅力が台無しになっちゃうじゃないの。花街一の妖艶な美女っていうのが姐さんの売り文句なんだからね！」
「うう……、だけんども……」
年若い妓女たちに叱られ、紅夏は涙をぬぐっている。見ているぶんには〝花街一の妖艶な美女〟が泣き濡れている美しい図なのだが、声がつくとたんに奇妙な気分にさせられた。
結蓮が当惑して黙り込んでいると、若い妓女たちが拝むように手を合わせて詰め寄ってきた。
「許嫁様、お願いします。紅夏姐さんが実はこんなだってこと、秘密にしてください！」
「姐さんは紅幻楼の代表として蓮花節の踊りに出ることになってるの。こんな本性が知られたら、皇帝様の後宮に入れなくなるわ」

「別に、あたいはそんなもの入らなくでもいいんだけんど……」
「姐さんは黙ってて！」
一斉にたしなめられ、紅夏が「はい……」と小さくなる。その仕草が妙に可愛らしかった。
いつかの夕暮れ時、街で出会ったあの美女と同じ人物とは思えない。本当の自分を隠し、〝演出〟するのが、この街に集う彼女らの生き方なのかもしれなかった。
「ご心配なく。けっして口外はしません」
妓女たちがほっとしたように顔を見合わせた。
「紅夏姐さんったら、都に出てきて何年も経つのにいまだに田舎の言葉が抜けないの。黙ってればご覧のとおりなんだけど」
「あたしたちが秘密を守ってなきゃ、〝妖艶な美女〟なんて誰も思ってくれなかったに違いないわね」
「ほんとよねー」
若い妓女たちはずけずけと言っているが、その物言いには親しみが感じられる。紅夏のほうも困った顔をしつつも悪い気はしていないようだ。
とそこへ、勢いよく扉が開いて悪鬼のような顔をした楼主が乗り込んできた。
「おまえたち、いつまで怠けてるんだいっ。紅夏を残して全員戻りな！」
きゃーっ、と妓女たちが慌てて出ていく。どうやら季隆の看病は仕事を怠ける口実だったよ

うだ。

「おまえもだよ、紅淑！　下っ端のくせにこんなところでくっちゃべるなんて百年早いよ！」

見れば、大人しそうな少女がおどおどした様子で立ちすくんでいる。以前街で見かけた時、紅夏と一緒にいた妓女だ。

「け、けど、姐さんのこと心配だし……」

彼女が先ほど話に出た紅淑という新入りらしい。着飾ってはいるが、他の妓女たちと違う純朴な雰囲気がにじみでている。

「ご心配なく。何かあれば私がお守りします」

生真面目に結蓮が言うと、急に話しかけられて驚いたのか彼女はびくっとした。

「あ……その……」

「叱られないうちにお戻りになったほうが」

「は、はい……」

噂通り大人しい娘らしく、返事もままならない。ちらちらと視線を向ける彼女に紅夏がうなずいてみせると、やっと安心したようだった。

「姐さんをよろしく、お願いします」

か細い声でなんとかそう言うと、ぺこりと頭をさげて小走りに部屋を出ていく。

残ったのは結蓮と相長官、紅夏、そして寝台に横たわる季隆だけだ。

最初に口を開いたのは紅夏だった。
「許嫁様。あたいが季さまを独り占めしたみたいになっちまって、ほんとに申し訳ねえこってす。どうか、このとおり」
あらたまった顔で向き直ると、深々と頭をさげる。
「だけんど、信じてくだせえ。あたいと季さまは、全然、変な関係じゃねえんです。あたいがお願いして助けてもらってただけなんです」
訛り全開で訴える彼女に、結蓮は静かに促して頭をあげてもらった。
「きっとそういうことだろうと思っていました。どうか事情を話してください」
「ん……、実は、ここ二月くらいだべか。周りでおかしなことが起きるようになったんです」
「おかしなこと？」
「んだ。うまく説明できねえんだけんど……、変な怪物みたいなもんを見たり、抜き身の刃物の上に誰かに突き飛ばされたり、ふっと気付いたら、井戸とかそういう危ねえところに一人でいたりだとか……」
紅夏がぶるりと震える。よほど恐ろしい思いをしたようだ。おそらく紅珠はこのことを言っていたのだろう。
同情して結蓮が眉をひそめていると、相長官が口をはさんできた。
「心当たりはないの？」

「へ？」

「そんなふうに危害を与えてくるような人に。突き飛ばされたと言ったね？」

紅夏は呆然とした顔で首を振った。

「紅幻楼のみんなはそんなことしねえってます。そりゃ、あたいだって花街に生きる女だもの、人の醜いとこは知ってるつもりだ。だけんど、あれはそういうのとは違うと思うんです。なんて言うか、この世のもんじゃない恐ろしさっていうか……」

結蓮は相長官と目を見交わした。たぶん彼女のその勘は当たっている。

「それで季隆どのに助力をあおいだわけですね？」

「んだ。あたいはしばらく都を離れてたもんで、季さまがお山から戻ってるの知らなかったんだけんど、妹分たちに話は聞いてたから。あの日久々に会って、また連絡取るようになって」

「季隆どのに頼まれるまでよくご無事でしたね。怪異は二月前から起きていたのでしょう？」

「それは……これのおかげだと思う」

紅夏は首にかけていた紐をたぐると、服の下から小さな巾着袋を取り出した。

「璉国のお守りなんだって。昔、景親さまがくれたんだ」

「景親どのが？」

「ん。協力してくれたお礼にって」

懐かしそうに紅夏が目を細める。彼女は景親と最後に会った人物だというが、どんな間柄だ

ったのだろうと結蓮が思っていると、相長官が口を挟んだ。
「当時、小野君が通っていたのは紅燕という妓女だったよね？」
「ん……、綺麗な姐さんだったけど、まさか妖怪だったとは思わなんだ。あんなことになるとわがってたら、最後に会った時、景親さまを止めればよかった……」
紅夏が目を伏せる。彼女にとってもその一件は心の傷になっているようだ。
「似たような妓女が最近花街に現れたという話は聞いてないかな。見た目でも、癖なんかでもいいんだけど。怪異が起きてるところからして必ず周りにいるはずなんだ」
「わりと出入りの激しいところだから……、季さまにも同じこと訊かれたんだげど、心当たりがなぐっで。ここ最近は季さまが作ってくれた結界の中にずっといたし――」
申し訳なさそうに紅夏が言いかけた時だった。
「紅夏、しゃべりすぎ」
けだるげな声が割り込み、一同は寝台へと目を向ける。ちょうど季隆がよろよろと起き上がったところだった。
「季さま！　大丈夫だべか!?」
駆け寄ろうとする紅夏に手を振って応え、寝台を出ると、彼は息をついて顔をあげた。
「どうしてここに？　しかも君まで……」
長官と結蓮を交互に見た季隆の声には、とがめるような音があった。

「調べものがあってね。彼女にも付き合ってもらったんだ」
「長官が連れてきたってことですか？」
結蓮が否定しようと口を開きかけると、季隆は怒ったような目をして見つめてきた。
「こんなところにひょいひょいついてきちゃだめだろ。早く帰りな」
「いえ、私は――」
「長官、連れて帰ってください。この子、一人にしといたら何するかわからないので」
「まあまあ橘君。豊舎人が何か言いたいことがあるそうだし、話を聞いてからでも――」
「言いたいこと？　それなら俺にもいっぱいありますよ。妓楼にあがりこんでけろっとされてちゃ、説教の一つもしたくなる」
相当気が立っている。それを感じ、結蓮は何も言えなくなってしまった。
いつも飄々としている彼がこんなふうに怒るなんて、自分はよほど気にさわることをしたのか。それとも、この妓楼にいた理由と関係があるのだろうか。
と、穏やかになだめていた相長官が、おもむろに酒器を手に取った。
「まあまあ。ちょっと頭を冷やしなさい」
淡々と言って、それを季隆の頭上でくるりと返す。
「！」
頭から酒を浴びせられた季隆が目を瞠って口をつぐみ、結蓮は息を呑んだ。紅夏も呆気にと

られている。
　ただ一人落ち着いている相長官が、静かに酒器を戻した。
「頭に血がのぼっているね。そんなことだから相手の術中にはまるんだよ」
「……え？」
「気付かなかったのかい？　さっきの戦闘、あれは幻術だ。妖怪も襲われた妓女も存在しない。きみは一人で暴れて力を消耗しただけだ」
　その指摘に、季隆が愕然とした顔になった。
　結蓮も驚いたが、消えた戦闘の痕跡を思い出し、ようやく合点がいった。そういうことだったのか。
「でも、一体誰が幻術なんて……」
　つまりそれは、あの場に術師かもしくは妖怪の類がいたことを意味する。
　相長官が、ちらっと季隆を見た。
「そろそろ教えてあげたらどうだい？　きみの相棒だろう？」
　季隆は黙っている。いつになく硬い横顔だ。
　気にした様子もなく相長官は結蓮に視線を戻した。
「彼の親友だった小野景親君は、亡くなる少し前、この妓楼に通っていた。紅夏はまだその頃見習いだったが、小野君とも橘君とも顔見知りでね。彼女が何者かに狙われているのを知っ

て放っておけなかったんだよ」

「……長官」

季隆が苦い顔でつぶやいたが、長官はそんな彼をじっと見つめながら続けた。

「小野君が死んだ時、最後に会ったのが紅夏だというのはさっき言ったとおりだ。今回の異変と当時の妖怪と、何か関係があるかもしれない。彼女のもとに妖怪が現れるのではという思いで必死になって、視野が狭くなっていた。おそらくはそこにつけ込まれ、消耗させられていたんだ。きみ、毎日のようにこんなことをしていたんだろう？」

「……手玉にとられてたってことか……」

ふっと鼻で笑ったかと思うと、季隆はいきなり拳を卓子にたたきつけた。

「くそッ……!!」

悔しさと怒りをぶちまけるようなその激しさに、結蓮は驚いて声も出なかった。

静まりかえる室内に、相長官が立ち上がる衣擦れの音が響く。

「橘君。きみの事情はきみの口から聞くべきだと言って僕の誘惑を断った彼女に、少しは報いてやったらどうだい。僕はむこうでみんなにちやほやされてくるから、その間、二人きりで話をしなさい」

穏やかにそう言って、長官は紅夏を促すと一緒に部屋を出て行った。

「……ずっと何も言わないで、ごめん。心配かけたね」
しばらくして口を開いた彼は、いつもと同じ声だ。結蓮はほっとしたような緊張するような、相反する思いをかかえて彼に向き直った。
「夜に出かけておられたと四郎たちから聞きました。あれは紅夏どのの護衛のためだったのですね」
季隆は酒で濡れた髪を軽く払い、ぽつりと言った。
「それもあるけど。――捜し物をしてたんだ」
「捜し物？」
「景親を殺した妖怪」
彼は、ちらりと目線をあげた。
「もう知ってるんだろ？　俺の親友だったやつの話」
「……少しだけは。数年前に亡くなったということしか聞いていません」
遠慮がちに結蓮は答える。親友を殺した妖怪を捜し出し、仇を取ろうとしているのかと思ったが、事情を知っていくうちにそんな簡単な話ではないような気がしてきた。
「ずっと、あいつを殺した女を捜してた。似たような事件が起こってるのを知って、また都に戻ってきたんだと思って……情報をもとにして妖怪狩りをしてた。ここ三月くらいかな」

彼が以前街で情報屋と話し込んでいた姿が脳裏によみがえる。あれにはそういうわけがあったのか。

「復讐をしようと思っていらしたのですか？　ずっと……」

彼がそんな暗い思いを抱いていたなんて、まったく気付かなかった。そのことに衝撃を受けている自分がいる。

目線を落としている彼は、以前と比べて少しやせたように見えた。

「実は師匠に弟子入りしたのはそれが理由なんだ。とにかく力が欲しかったから。でもばれて喧嘩になった。仙道修行を復讐に使うなってね」

「それで力を取り上げられたと……」

うん、と彼はわずかに苦笑いした。

「けど文句言える立場じゃない。師匠の言ってることは正しいから。それでも納得できなかったから山を下りたんだ」

結蓮は何も言えなかった。ほんの少し呪禁術の勉強をしただけだが、呪禁道や神仙道が世の人のために使われるべきものであることは理解している。個人の利益や、ましてや復讐などに利用してはいけないというのは確かにそうなのだ。

（でも、この人はそうまでして景親どのの仇が取りたかった……）

その激しい思いが、昔の自分と重なる。どんな手段でもいい、とにかく復讐を遂げたかった。

この人もそうだったのか。——ふいに熱い思いがこみあげてくる。
結蓮は息を吸い込むと、力をこめて彼を見据えた。
「私にもお手伝いさせてください」
「……」
「けしてお邪魔はしません。あなたの仇討ちに助太刀させてください」
季隆はこちらを見ない。
じっとうつむいていたが、やがて彼は首を振った。
「気持ちは嬉しいけど、これは俺の問題だから」
「私ではお役に立てませんか？」
「そうじゃない。……ごめん。自分の手でやりたいんだ」
立ちつくす結蓮にようやく顔を向けると、彼は微笑んで部屋の扉に手をかけた。
「送ってやれないけど、気をつけて帰ってね。相のおじさんに送らせるから」
そのまま開けようとするのを、結蓮は思わず袖をつかんで止めた。
ここまで来て一人で帰るわけにはいかない。ぎゅっと手に力をこめた。
ゆっくりと季隆が向き直る。にやっと笑い、顔を近づけてきた。
「だめだよ。ここをどこだと思ってんの。俺が狼になる前に帰りなさい」
「……嫌です」

いつもの悪ふざけと同じ笑みのはずなのに、無理しているように見えるのはなぜだろう。

再び扉を開けようとする彼を阻もうと前へ出ながら、結蓮はじっと見つめた。

（……あ）

そうか、と思った。

どうしてこんなに彼のことを放っておけないのか。瞳を見ていたら理由がわかった気がしたのだ。

季隆の顔から、ふと笑みが消える。

「そんなに狼になってほしいの？」

なおも顔が近づいてくる。鼻先に息がかかったが、結蓮は逃げなかった。早く音をあげろと言わんばかりに両手首をつかまれても、目をそらさなかった。

「構いません。その時は私も虎と化してあなたを止めますから」

以前、口移しの気付けをした時も、こうして間近で彼の瞳を見た。

あの時はただ綺麗だと思っただけなのに、今はもっと別の想いが沈んでいるように思える。

見つめながら、正直な気持ちを口にした。

「私も以前は復讐心を抱いて生きていました。皇后様や太子殿下を傷つけ、可愛がってくれた女官たちを死なせた妖怪が憎くてたまらなかった。ですからあなたのお気持ちはわかっているつもりです。あの時の自分の顔をじっくり観察したわけではありませんが、たぶん、今のあな

たと同じ目をしていた気がします」

あの時、嘘の情報をもたらされ取り乱した結蓮に「君の気持ちがわかる」と彼は言った。

あれはきっと「優しくしてくれた人たちの仇をとりたいと思って何がいけないの」と叫んだ結蓮の気持ちに対して言ってくれたのだ。そんな大切なことに今ごろ気がついた。

「業焔を倒したことで、私は解放された気がしました。そうさせてくださったのはあなたです。封陰省だけで解決できたはずの事案をわざわざ私に声をかけてくださった。私に業焔への復讐を遂げさせようとしてくださったのではありませんか？」

「……」

「仇をとらせてくださったあなたに恩があります。そのご恩を返させてください」

業焔のことで頭がいっぱいだったあの時には見えていなかったことが、今ならわかる。

封陰省に出向になったことまでは彼の意思ではなかっただろうが、業焔との戦いで結蓮にとどめを刺させてくれたのは間違いなく彼だ。あの一件がなければ今でも引きずっていたかもしれないと思うと、言わずにはいられなかった。

「あなたの力になりたい。今度は、私が……！」

いつもふざけている彼がこんなにも冷たい目をしている。それがどうしてだか悲しいと思ってしまう。仇を持つ人の目だとわかったからだろうか。

鼻先がぶつかりそうなほどの距離で、彼も目をそらさなかった。

そのままどれくらい経っただろう。
ふと彼が目を伏せ、つかんでいた手を放した。ふいっと踵を返して部屋の中に戻っていく。
「季隆どの？」
「――もういい、わかった」
振り向いた彼はかすかに苦笑していた。仕方ないなと言いたげに肩をすくめる。
「君に虎になられちゃ俺は勝てないよ。こっちで話そう」
「……！　はいっ」
「はーぁ。普段もそんなふうに胸を打たれるような熱い眼差しで見てほしいよねー」
一種の諦めにも似たようなすっきりした様子で、彼が軽口まじりにため息をつく。
駆け寄りながら、結蓮は気を引き締めつつも頬が上気するのを止められなかった。

景親はこの花街で死んだ、と彼は切り出した。
「死ぬ少し前、あいつはこの紅幻楼にずっと通ってたんだ。一人の妓女に骨抜きにされて、仕事も怠けて入り浸ってた」
淡々とした中にも苦さが感じられる。景親のこれまでの印象から離れた話に、結蓮は意外な思いで聞き入った。

「本気で惚れてたのか、それとも妖術にかかってたのかはわからない。結局はその女が妖怪だと気付いて戦ったけど、一人じゃ敵わなかった。話を聞いて俺が駆けつけた時には、あいつはもう息をしてなかったよ」

「……」

「でもその現場で気付いたことがある。あいつが持ってたはずの太刀が消えてたんだ」

「太刀が？」

こくりと季隆はうなずいた。

「もともとは俺が実家から持ち出して煌へ持ってきたものでね。鬼狩姫っていう戦いの精霊が宿ってる霊刀だ。鬼狩姫が景親を気に入ってたもんだから、俺も面白半分であいつに預けてた。あいつはそれをどこへ行くにも持ち歩いてたんだ」

「消えたということは、何者かに盗まれたと？」

結蓮は眉をひそめたが、はっと気付いて身を乗り出した。常に持ち歩いていたということは。

「つまり、その精霊は景親どのの仇を見た可能性があるのですね？　訊ねてみれば手がかりがつかめるかもしれない……」

「そのとおり。たぶん、どさくさにまぎれて野次馬の誰かが盗んだんだろう。見た目もわりと立派な太刀だしね。それが転売されて、めぐりめぐって……君のお祖父様のところにきた」

「祖父のもとに？」

祖父・諭迅は刀剣蒐集家で、蔵数軒分もの太刀を持っている。あの中にあるということか。

結蓮の驚きを見抜いたかのように、季隆が言いにくそうに続けた。

「お祖父様にもらったって言ってたろ？　あの太刀が鬼狩姫なんだ」

「え……」

思わず腰の太刀に手をやる。母の形見であるこれは二代目の太刀だ。武官になる時に祖父から贈られた初代の太刀は任務の途中でくだけてしまい、やむなく取り替えたのである。

まさかそんな重要証拠品だったなんて。結蓮は真っ青になった。

「申し訳ありません！　先代の太刀は、私、半年前に思いきり破壊してしまいました……っ」

「ああ、いや、いいんだ。太刀自体はただの器だし、鬼狩姫は無事だから」

「そうなのですか？　どちらにおられるのです？　すぐに話を聞きましょう」

季隆はますます言いづらそうに口をつぐみ、観念したようにため息をついた。

「結蓮ちゃん、ごめん。姫は君の中にいる」

「……私の、中？」

「器を壊されて行き場がなくなって、君の身体に取り憑いたんだ」

胸のあたりを指さされ、結蓮はきょとんとして自分の身体を見下ろした。急にそんなことを言われてもまったく実感がない。

「本当なのですか？　特に変わった感じはしませんが……」

「ほんとほんと。たまに君と入れ替わって俺の前にも出てきてた。けどあいつ、話を聞きやしなくてさ。都合が悪くなると逃げやがるんだ。人に取り憑かれるとこれが面倒なんだよなぁ」

季隆がいまいましげに鼻を鳴らす。結蓮はしばらく自分の身体の感覚に耳を澄ませていたが、表情をあらためて彼に向き直った。

「その精霊を私の中から出せば、逃がすことなく話ができますか？」

「まあ、そりゃ……ちゃんと術で器に封じて、俺の支配下に置けば、逆らいたくてもできないからね」

「ではすぐにでもその術式をしましょう。そうすれば景親どのの仇について聞き出せます！」

一番の手がかりといってもいい精霊が自分の中にいるのだ。そう望むのは当然のことだった。季隆もそのつもりで話してくれたに違いない。彼の体調は心配だが、今すぐには無理だというのなら他の人に頼んでもするべきだ。

「幸い今は相長官もいらっしゃいますし、お願いして――」

「待った」

ぱっと腕をつかまれた。冷静な眼差しとぶつかり、一瞬どきりとする。

「俺がやる」

「……でも、お身体の具合が」

「大丈夫だよ。やりたいんだ」

「……」

「心配しなくていいよ。俺ひ弱だからさ、やれないことまで『やる』なんて言わないから」

軽口めいて言う彼を止めるべきか、少し迷った。だが目的を遂げさせてあげたいという強い思いが勝り、結局は彼の言葉を信じることにした。

こくりとうなずく結蓮に、季隆が唇の端をあげてみせる。

「ありがと。んじゃ、準備するから手伝ってくれる？」

「はっ！」

念のため相長官に術式発動の旨を伝えると、必要な陣を作るため部屋の片付けに取りかかった。調度品を端へ寄せ、中央を空けるようにする。

水桶や手巾といったものが寝台の傍にあるのに、季隆は初めて気づいたようだった。

「君が看病してくれたの？」

「……したかったのですが、妓女の皆さんの輪の中に割り込めませんでした」

軽々と卓子を運びながら、結蓮はそっと目を伏せる。季隆が噴き出したのが聞こえたのでそちらを見ると、彼は苦笑していた。

「しゅんとしちゃって。そんなに俺のこと心配だった？」

「それは……、あなたが何も仰らないから……」

彼がいない屋敷がどんなに広く感じたか。思い出すときゅっと胸が詰まった。

思わず手を止めて黙り込んでしまうと、ぽんと頭に手が載せられた。いつのまに傍へ来たのか季隆が目を細めて見つめている。

「ごめんね。いつも君に一人で動くなって言ってるのにね。勝手だよね、俺」

のぞきこんできた彼の瞳が、いつもより優しい。

「今からでも、看病する？」

「いえ、時間もありませんし結構です」

「あ、そこは冷たい反応なんだ……」

「そんなことよりも一つ気になったのですが」

「そんなことって！」

いつものように嘆く彼に、結蓮はためらいがちに訊ねた。

「私に憑いているのは戦いの精霊だと仰いましたね。もしや、私が武官として務めが果たせているのはその精霊の力によるものなのでしょうか？」

太子を護るため必死に努力を続けてきたとはいえ、武官を志す前の結蓮は武器など持ったこともないただの少女だった。それが今や立ち合いで将軍に勝つこともあるほどの腕前となっている。そういう面を見て「化け物か」と陰口を言われているのも知っているが、自分の行く道に誇りを持っているから構わなかった。

けれど、すべてが精霊の力だったとしたら。今までの自分はなんだったのだろう。

「大丈夫だよ」
そっと、もう一度頭に手が載せられる。
「君の力は、君が努力して得たものだ。それは間違いない。第一、鬼狩姫が壊れたのは最近のことだろ？　その頃には君はもう強くなってたはずだよ」
落ち着いた声に、少しうろたえてしまった気持ちが静まっていく。
「そう……そうですね。半年前と比べて、急激に腕があがったという自覚はありませんし」
ほっとして息をつくと、季隆も笑顔でうなずいた。
「さ、急いで準備するよー」
「はっ」
気を取り直して結蓮は調度を運ぶ。それを頼もしげに見やり、季隆も自分の仕事に取りかかろうとしたが、ふと気付いたように振り向いた。
「……半年前……？」
訝しげなつぶやきは、結蓮の耳には届かなかった。

部屋の四隅に置かれた香炉から、甘酸っぱい匂いがたちのぼる。

呪具を並べて作られた術式の陣の中央に、結蓮は目を閉じて座っていた。
みずみずしい果物を思わせる香りが身体中を包み込み、徐々に良い気持ちになってくる。
額に冷たいものが当てられた。季隆が作っていた仙薬だろうか。
「鬼狩姫。――姫……」
呼びかける彼の声がだんだん聞こえなくなる。
うとうとしかけていた結蓮は、ふとけたたましい声が響いているのに気づき、ゆっくりと意識を覚醒させた。
「うるさいわね！　一体なんの用よ!?」
叫んでいるのは誰かと思えば自分の口だ。薄い膜を張ったように少しくぐもって聞こえる。
以前、幽鬼を自分に取り憑かせたことがあったが、あの時と似た感覚だ。
（これが鬼狩姫？　本当に私の中にいたなんて……）
意識がない時に表に出て季隆と話したこともあったそうだが、まったく知らなかった。
今は身体を乗っ取られている状態なのだろう。意識はあっても指一本動かすことができない。
ただ声は聞こえるし、すぐ目の前にいる季隆のことも見えていた。
「わめくな。おまえに家を造ってやるって言ってんだよ」
「あたしをこの子から引き離すつもりなんでしょ。誰があんたの思い通りになるもんですか」
「景親の仇を取りたくないのか？」

鬼狩姫が怯んだように黙り込む。心が動いたと思ったのだろう、季隆がのぞきこんできた。
「おまえが見たことを話せば、そいつは俺が捜し出す。必ずだ」
鬼狩姫はしばし黙っていたが、うつむいたままぽつりと言った。
「じゃあ、遊んでよ」
「……遊ぶ？」
訝しげに彼が訊きかえしたとたん、自分の手が勝手に動き、結蓮はぎょっとした。
「っ!?」
季隆の両腕をがしりとつかみ、ぎりぎりと力をこめる。尋常ではない強さだ。
「これでどう？　ご自慢の術も手を封じられちゃかけられないわね。あんたの力じゃ跳ね返せないんでしょ、非力な若様？」
小馬鹿にしたような声に、季隆がひくっと頬を引きつらせる。
「こんの……性悪……ッ」
アハハハとけたたましく笑いながら、鬼狩姫はますます力をこめていく。このままいけば彼の腕の骨がくだけてしまいそうなほどの容赦のなさだった。
（やめなさい！　手を放して！）
結蓮は懸命に訴えかけたが、聞こえているのかいないのか、鬼狩姫は反応しない。
今は彼女に操られているとはいえ、この身体は自分のもの。つまり彼を追い詰めている力も

もとは自分のものなのだ。このまま骨をくだいてしまうなんて絶対にできない。
痛みに顔をゆがめている季隆に、鬼狩姫がからかうように顔を近づける。
「痛いなら痛いって言えば？　昔はこんなにやせ我慢する性質じゃなかったでしょ？　早く降参しないと折れるわよ」
「うるせえよ……俺も大人になったんだよ」
「ふん。小娘一人にも勝てないくせに、何が大人よ！」
「……ッ!!」
心なしか彼の腕が軋んでいるようだ。感覚が伝わり、結蓮は動転した。
術は失敗だ。それどころか彼を危険な目に遭わせてしまった。鬼狩姫を呼び出すという提案を自分がしたばかりに。
（どうすれば身体を取り戻せるの？　傷を付ければ衝撃で入れ替われる……？）
季隆の傍にある懐剣に目が吸い寄せられる。どうにかしてあれを使えないだろうか。
足を動かせればできるかもしれない。そう気づき、神経を集中させた時だった。
「結蓮ちゃん」
鬼狩姫をにらんでいた季隆の目が自分に向けられた気がして、結蓮ははっとする。
彼は一瞬微妙な顔をしたが、息をついて続けた。
「ごめんな。後でぶん殴っていいから」

（え？）

なんのことかと思った瞬間、いきなり噛みつかれた。

（――!?）

いや、正確には、噛みつかれたと思ったくらいに激しく唇をふさがれたのだ。

さすがに鬼狩姫も驚いたのだろう、くぐもった声をあげて身をよじる。彼女自身が顔を近づけていたせいで避ける暇がなかったらしい。そんな彼女を逃がすどころか、季隆は半ば力任せのように口づけを深くしていく。

（い、一体、何事……？）

呆気にとられていると、鬼狩姫の感情が流れ込んできた。

（やめて！　何するのよ！　そんなの反則よ！　この馬鹿御曹司！）

（反則？）

怪訝に思ったのも束の間、もやもやとしたものがこみあげ、気分が悪くなってきた。なんなのだろう、この、何かが引きずり出されるような不快な感覚は。

ふさがれていた視界に、徐々に季隆の顔が見えてきた。彼が顔を離したのだと結蓮は気付いたが、

「……！」

するり、と何かが口から飛び出したのを感じ、驚いてそちらを見た。



両手を拘束されていたはずの季隆が、すばやく柄付きの呪具をつかむ。結蓮の口から飛び出した何かがその勢いのまま壁にたたきつけられると、彼はそれに呪具を突き立て、もう一方の手で懐剣の鞘を払った。

「天の玉皇、地の玉帝の令示により、其を我の配下とする。璉国天拝山、鬼狩の弟媛！」

血を含ませた懐剣がまばゆく光を放つ。

部屋の中を包んだそれが消えた時、そこにはにやにやと嬉しげに笑う季隆がいた。

「よう。お帰り、弟媛ちゃん」

彼が手にした懐剣から、にゅうっと何かが飛び出てくる。

「この鈍感破廉恥野郎！　だからあんたって嫌いなのよーっ！」

若い女の姿をした精霊が眉をつりあげてわめいているのを、結蓮はぽかんと見つめた。

――どうやらこの勝負、彼の勝ちだったようだ。

両手が使えなくなったため、口から鬼狩姫を引きずり出した。先ほどの行為がそういう作戦だったと聞き、結蓮はようやく納得した。

「結蓮ちゃん、大丈夫か？　どこか具合悪いとこない？」

気遣うようにのぞきこむ彼に、冷静に答える。

「身体は大丈夫ですが、唇が少々腫れています」
「ご、ごめんなさい……」
彼はたじろいだように目をそらしたが、気まずいのは結蓮も同じだ。あの時はなんともなかったのに、身体と意識が結びついた今は、まだ感触が残っている気がして唇が熱い。
「それで、こちらが鬼狩姫どのなのですね？」
「うん。正確には鬼狩姫ってのは双子の姉妹刀なんだ。こいつはその妹のほう。璉国の古代ふうに弟媛って呼ばれてる」
気にしないようにして話を続けると、季隆もすぐに応じてきた。すでに顔つきが変わっている。
「鬼狩姫、わかってるよな？　景親を殺したやつについて話せ」
ぷいっと鬼狩姫が顔を背ける。
「ふん！　誰があんたなんかに」
「言うこと聞かねーとおしおきだぞ」
おごそかに言いながら季隆が懐剣を構えると、鬼狩姫はびくりと反応した。
腹立たしいことこのうえないといった様子ながら視線を戻す。支配下に置かれたことではやはり逆らえないらしい。不機嫌な顔でぼそっとつぶやいた。
「……〝玉嬉〟」

「玉嬉？　――白狐の玉嬉か？　そいつが景親を？」
季隆の緊迫した声に、鬼狩姫がむすっとした顔でうなずく。
結蓮もその名は聞いたことがあった。かなりの有名どころのはずだ。
「確か、古代の王朝を渡り歩き、時の皇帝を惑わして国を滅ぼしてきた妖怪……でしたね」
もはや怪談の一つとして語り継がれている話だ。真偽のほどは別としても史書に名が残っている大妖怪である。それが煌国にも現れていたとは。
季隆が動揺した様子で顎をなでる。
「いくら一人だったからって景親があっさり負けるはずがないと思ってたけど……。まさかそれほどの大妖怪だとは……」
「あっさりじゃないわ！　あいつは玉嬉に深手を負わせたんだから」
「どんな深手だ」
「玉嬉の身体に血泉符を埋め込んだのよ。今でも解けてないはずよ」
「血泉符？　ほんとか？」
結蓮が首をかしげて見ると、季隆はじわじわと合点がいったような顔でうなずいていた。
「そうか……なるほどな」
「どういったものなのです？」
「血で書いた霊符だ。術者以外の血を分けてもらって、二重の術式をかける強力なやつ。その

血を持つ者にしか解除できない上、一度かけたら半永久的に相手に呪いの効果を与える。禁術の一つだよ」

「禁術……」

「景親は死ぬのを覚悟してそれをかけたんだ。そしてあいつが死んだ今、それを解くことはできない」

「けど、もう一人の血の提供者を殺せば、呪いは半減するわ」

なぜか張り合うように鬼狩姫が口をはさむ。季隆が小さく息を呑んだ。

「景親が血を分けてもらったのは、ひょっとして紅夏か？」

「そうよ。あの田舎娘、住んでたところが龍穴の傍だったとかで、まあまあ上等な気を持ってたのよ。景親はそれに気付いて協力させたわけ」

龍穴というのは清浄な気の集まるところで、霊的な力が高まる場所だとされている。大陸に無数に存在し、そのどれもが聖地のように人々に大事にされていた。

「それで紅夏を狙ってつきまとってやがったのか。今となっちゃ、術式を解くには紅夏にやらせるか殺すかしかないからな」

厳しい顔で季隆がつぶやく。結蓮も思わず拳を握りしめた。

紅夏の周辺で起こっていた怪異は、玉嬉が彼女を狙って起こしていたものだった。紅夏を殺すのが目的だったのなら、彼女の護衛をしていた季隆の存在はさぞや邪魔だっただろう。それ

で幻術で消耗させ、排除しようとしたのか。

「そういえば――先ほど私たちが幻術と知らず戦った時、野次馬の中でおかしな声を聞きました。季隆どのを邪魔だと……。あれが玉嬉だったのでしょうか」

「ほんとか？」

はい、と結蓮がうなずくと、季隆は腕組みして考え込んだ。

「紅夏の周りは一応調べたんだけどな。やっぱり花街に潜伏してたか」

「捜し出すのは難しそうですね。妓女だけでも一体何人いることか」

「それだけじゃない。玉嬉は妖怪としての気配を完璧に消すことができるっていうし、ある程度の結界ならくぐり抜けてしまうんだ。そうやって歴代の宮城に入り込んできた。またその癖を出したんだとしたら……」

結蓮は息を呑んだ。

古代の王朝を滅ぼしたという妖怪。その本能のままにこの都に現れたのだとしたら。

「狙いは、皇帝陛下と煌国……！」

様々な符号がはまっていく。謎の美姫に誘惑された皇帝の側近たちの事件。あれは玉嬉が皇帝に近づくための布石だったのか。

（側近に手引きさせれば労せずして陛下に近づくことができる。妓女に扮したのはそのためか――ううん、たぶんそれだけじゃない。妓女だからこそ陛下に近づける機会があるのに目をつ

けたから……！）

皇帝が皇宮を出る蓮花節。玉嬉は必ずそこに現れるはずだ。

「相長官に報告だ」

「はっ！」

同じことを思ったのだろう、季隆が身を翻して出ていく。結蓮も急いで続こうとしたが、

「ねえ、あんた」

扉をくぐろうとした時、不機嫌な声に呼び止められた。

振り向くと、鬼狩姫が浮遊したままじっと見つめていた。

「しばらく身体を借りてたお礼に、忠告しといてあげる。――あんたのその太刀、せいぜい大事にしたほうがいいわよ」

「……え？」

結蓮は戸惑いながら腰の太刀に目をやる。

柄に下がった飾りの瑠璃玉が、きらりと小さく光を放った。

# 第四章　蓮花節

舞台のある高台からは、遠く都の城壁が望める。神木である桑の木が生い茂り、濃い緑陰をそこかしこに作っていた。

聖地、扇山。別名芙蓉山とも呼ばれるここで、蓮女舞は行われる。山といっても小さな丘のようなところで、神仙の廟や寺院が立ち並ぶ静かな場所だが、今日にかぎっては喧噪が響いていた。

舞台の近くに立つ堂で着替えていた結蓮は、ふと視線に気付いてそちらを見た。

着飾った妓女たちがじろじろと無遠慮に視線を向けている。よその妓楼の者たちだ。何ごとかと結蓮が首をかしげると、彼女たちは目配せし合い、傍を通り過ぎていった。

「……いくら顔の造りがよくても、あんな化け物じみた女、美女でもなんでもないわ」

捨て台詞のように、ぼそりとした声が聞こえる。

突然のことに驚いて振り向くことができなかった。急いで逆の方向から堂の外に出る。

「……」

気にするまいと思いつつも、なかなか声が頭から離れない。慣れているとはいえ化け物と呼ばれるのは良い気持ちはしなかった。

女物の服を身につけ化粧をすると、雰囲気が変わるのだろうか。いつもは鎧で隠しているものがにじみでてくるらしい。顔立ち云々ではなくやはり人とは何かが違っているのだろう。

（……いけない。今は任務中だ。他のことを考えてはいけない）

軽く頭を振って邪念を追い払う。今さらこれくらいで傷ついていては武官失格だ。

「っと、見つけた」

背後から肩をつかまれる。振り向くと季隆が立っていた。待ち合わせ相手の笑顔に、結蓮はほっと息をついた。

「すみません、遅くなりました」

「いいよ。こっちこっち」

桑の木の緑陰をくぐり、隣の堂まで行くと、二人は人であふれた広場をうかがった。

朝廷高官に下官、護衛の武官、舞手の妓女、楽人たち――。

「何百じゃきかないな。一人ずつ調べるのはとても無理だ」

季隆のつぶやきに結蓮も厳しい顔でうなずく。

続々と入山して舞台の前に陣取っていく人々。眺めただけではこの中に玉嬉がいるかどうか判別できない。

「封陰省で結界を張ってるけど、今のところ引っかかったやつはいない。やっぱり噂は本当らしいな」

玉嬉という大妖怪は、ある程度の結界ならくぐり抜けてしまうという。奇しくもそれが証明されてしまったわけだ。

「大丈夫なのでしょうか。皇帝陛下と太子殿下の御身に何かあってからでは遅いというのに」

それが一番の気がかりだった。普段は皇宮に閉じこもっている皇帝と太子が、厚い結界に護られた場所を出る。その数少ない機会を妖怪が見逃すとは思えない。

「何かある前に見つけ出して倒すのが俺たちの仕事。だろ？」

軽く扇子で肩をたたき、季隆が微笑む。封陰官の正装をした彼は心なしかいつもより落ち着いた印象を受ける。

「にしても、ここの熱気はすごいな。完全に場違いだわ、俺」

あたりでは蓮女舞に出演する歌妓たちが最後のお色直しに励んでいた。これでもかと言わんばかりに飾りたて、補佐役としてついてきた妓女たちに世話を焼かれている。時折、別の妓楼の妓女たち同士が牽制するようににらみ合ったりして、異様な空気がただよっていた。

面食らったように見回しながら、季隆は苦笑している。

「皇帝やお偉いさんの目に留まれば寵愛を受けられるかもしれないってんで、張り切るのはわかるけどなー……」

「はい。おかげで私も無事に潜伏できました」
今日の結蓮は衣装を借りて妓女に扮している。紅夏の護衛をするにはこの恰好が一番目立たない。玉嬉が妓女に化けている可能性が高い今、なるべく近くで様子を探る必要があるからだ。
ふと、季隆が笑みを消して見つめてきた。
「大丈夫か？」
「はい。問題ありません」
「まあねー。君ならそのひらひらした衣装でも余裕で戦えるよね」
「はっ。無論です」
「でもさー、その服……ちょっと露出多くないか？」
腕や肩の出た衣装を結蓮は真面目な顔で見下ろした。
「すみません。着替えの途中だったので」
「あ、その上にも着るの？　なーんだ」
「……やはり不似合いでしょうか。他の方は着こなしておられるのですが」
「いや？　むしろもっとはだけてもいいくらい。めったに見られない光景だしねー」
同じく真面目な顔で季隆が顎をなでる。結蓮がじっと見つめると、彼はにやっと笑った。
「うわ、冷たい目。ぞくぞくしすぎて元気出てきちゃった。でもなるべく早く上着も着てね。他の人に見られたら、俺やきもち焼くから」

「……」

（まったく……）

相変わらずの軽薄な態度をやれやれと思いつつも、いつもと同じ調子であることに少しほっとしていた。これから彼の宿敵と戦うかもしれないということで、自分のほうが緊張しているらしい。

楽府の楽人たちが持ち場に座り、居住まいを正しているのが見える。蓮女舞の前に行う奉納楽が始まるようだ。

なんとなく見ていると、「あのさ」と季隆があらたまった声で言った。

「もし……俺みたいなのが御使い様だったらどうするって、前に訊いたの覚えてる？」

そういえばいつだったか、話の途中でそんなことを言われたことがあった。いつもの軽口だろうとすぐに忘れてしまったが。

小さく笑って彼が顔を寄せてくる。

「あの時の答え、聞かせてくれない？　これが全部終わったら」

「……え？」

驚いて見上げたが、彼はそのまま流し目で笑うと、横をすり抜けて行ってしまった。

鐘の音が響いている。官吏は集まるようにとの合図だ。聞きつけて戻って行ったのだろう。

（どういう意味だろう。そんなに重要な質問だったの？）

遠ざかっていく背中を見送っていると、後ろから黄色い声が聞こえてきた。
「あっ、いたいた！　そろそろ始まるわよ、紅蓮！」
大声で叫んだのは紅珠だった。他にも大勢の紅幻楼の妓女たちがいる。結蓮も紅幻楼の一員として来ているため、表向きは紅蓮と呼ばれることになっていた。
取り囲んだ彼女たちは、感心したように結蓮を見つめている。
「ほんとに綺麗ねー！　まるで本物の六蓮天女さまみたい」
「武官さまよりお妃さまのほうが似合いそう！」
「他の妓楼の子たち、すごい目をしてにらんでたわよ。紅夏姐さんだけじゃなく紅蓮さんまでいるんだから、負けたって思ってるみたい」
楽しげな彼女たちに何も言えず、結蓮は曖昧な顔で黙り込んだ。実際、支度をしている時によその妓楼の妓女たちがひそひそ話しているのを聞いている。
だが今は気にしている時ではない。息をついて気持ちを切り替える。
「何か変わったことはありませんか？」
「特にないわ。ねえ？」
「紅夏どのは？」
「はい」
妖艶な笑みを浮かべて紅夏がうなずく。無口で謎めいた美女の役作りは完璧のようだ。

すっかり顔見知りとなった妓女たちにも変わった様子はない。これから皇帝の御前に出るということで興奮気味だ。

「とうとう姐さんも後宮のお妃さまよ！」

「他のお妃より、絶対に姐さんが一番綺麗よね！」

「ちょっと、紅淑も何か言いなさいよ。緊張してるんじゃないでしょうねえ？」

「とちったら許さないわよ。姐さんの晴れ舞台なんだからね！」

「は、はい……」

ぺちゃくちゃとしゃべりまくっている中、紅淑だけが困ったように笑みを浮かべて相槌を打っている。大人しい彼女は口を挟む余地がないようだ。

妹分たちを笑って眺めていた紅夏が、そっと結蓮の隣に立った。

「あたいは別に、後宮なんて興味ないんだ。あの子らがああ言ってくれるから、なんとなくこんなことになっちまってるけども」

小声で打ち明けた彼女は、少し寂しそうな笑みを浮かべていた。

「紅幻楼での生活がお好きなのですね」

「それもあるし……、花街の女だから会いに行ける口実があるのに、そうでなくなったらもう会えないべ。まあ、今だってあんまり眼中にない感じだけんども……」

「？　もしや、お好きな方がおられるのですか？」

とたん、ばしーんと背中をはたかれた。
「やんだー！　結蓮さまったら、何言わせるだ！　はずかしい――っ」
「……っ、申し訳ありません」
思いのほか強い力に、結蓮は軽く咳込んだ。何か失言したかと思ったが、紅夏は顔を赤くして照れまくっている。図星をついただけらしい。
お願い誰にも言わないでけれ、と紅夏はひとしきり照れていたが、気が済んだのか咳払いして顔を寄せてきた。
「あの……怒らないでほしいんだども。実はあたい、結蓮さまと季さまが二人きりで部屋で話してる時、外で聞いてたんだ。いけないとは思ったんだけんど、どうしても気になって……」
紅幻楼に行った時のことらしい。結蓮が瞬いて見返すと、彼女はあらたまった顔で言った。
「あの話を聞いて、やっぱりと思ったんだけんど。結蓮さまは、季さまのことがお好きなんだべな？　だからあんなに一生懸命だったんだべ」
「……え？」
何を言い出すのかと驚いて絶句してしまう。紅夏が慌てたように続けた。
「急にこんなごと言って申し訳ねえ。だけんど、街で一哉さんと話してた時から気になってたんだ。妹分たちから許嫁のことは聞いてたから、ああ、この人がそうなんだべなって思って。ずいぶん綺麗な人で、びっくりした……」

最初に街で会った時、意味ありげに見つめられた気がしたのはそれが理由だったらしい。

「余計なこと言うなって怒られそうだけんど、あたい、季さまには幸せになってほしいんだ。景親さまとのことでつらい思いをしてるから……。だから、親の決めた許嫁がいるって聞いて、嫌な人だったらどうしようって思ってて」

「……」

「でも、お会いしてみてわかったんだ。結蓮さまはいい人だって。だから……どうか季さまを、よろしくお頼みします」

深々と彼女が頭をさげる。結い上げた髪に挿した歩揺がゆれるのを、結蓮は不思議な気持ちで見つめた。

こんなにも季隆を心配し、慕っている人がいる。しかも少し前まで見知らぬ他人だった自分のことを「いい人」だと言ってくれた。ただでさえ疎まれがちな自分を、部外者だからと厭うこともしない。

(私に任せようとしてくださるなんて。紅夏どのこそいい人だわ……)

花街に生きる妓女たちにもいろんな人がいる。いろんな生き方がある。今回のことがなかったらきっといつまでも知らずに暮らしていただろう。

(この人たちのことも、守りたい)

太子と国を守るために武官になったけれど、この国に暮らすすべての人を守ってこそ誓いが

果たされるのかもしれない。彼女たちの笑顔を見ていたら胸がほんのり温かくなった。
と突然、ぐいっと腕を引かれ、我に返る。
「！」
驚いて振り向くと、そこには崇怜が怖い顔をして立っていた。

強引に妓女の輪から結蓮を連れ出した崇怜は、離れたところにある廟の前まできてようやく足を止めた。
「何をしている？　その恰好はなんだ。しばらく目を離していた隙に、一体どういうつもりだ」
強い眼差しを向けられ、結蓮は驚きを押し込めて答えた。
「はっ。とある任務により潜入しているところです。鎧姿では目立ちますので妓女の衣装を借りて――」
「馬鹿なことを。妓女の真似事をするなんて、一体どこの誰がおまえにそんなことを命じたんだ。私の愛しい人に対して、許し難いぞ！」
「崇怜様、ですがこれはれっきとした任務ですので……」
「そんなことはどうでもいい」

きっぱりと断言すると、崇怜は結蓮の両肩をつかんでのぞきこんできた。
「やはりおまえにこんな仕事はふさわしくない。今すぐ武官も封陰省もやめろ、結蓮。私についてくるんだ。いいな？」
真剣な顔で切々と言い含められる。結蓮はそれを呆然として見あげた。
なぜこの場で彼がそんなにも怒るのか、わけがわからない。
（どうして、そんなことを仰るの……）
ずっと感じていた違和感。それが今の言葉ではっきりした気がした。
こみあげる悲しさをこらえ、結蓮はきりりと崇怜を見つめた。
「崇怜様。おそれながらあなた様は、本当は翠玉の御使い様ではございませんね」
崇怜が驚いた顔で瞬く。
「何を言い出すんだ。おまえも見ただろう。私はおまえからの手紙を持っているんだぞ」
「はい、この目で見ました。理由はわかりませんが、崇怜様は確かに私が御使い様にお出しした文をお持ちでした」
「ならば、なぜそんなことを言うんだ」
「御使い様は……」
結蓮はひそかに息を吸い込んだ。短い期間ではあったが、文通で届いた手紙には、一貫して御使い様の思いがこめられていた。それらの言葉が脳裏によみがえる。

「御使い様は、私が武官になったことを心配してくださってはいましたが、否定的な言葉を仰ったことは一度もありません。私が心に決めて進む道なのだから応援していると、いつも言ってくださいました。私に似合っている、頑張れと言ってくださいました」

「……」

「その御使い様が、私に仕事をやめてついてこいなどと仰るはずがないのです。崇怜様」

結蓮の訴えを崇怜は無言で聞いている。結蓮もまた見つめ返したが、やがて目を伏せた。

騙されたことが哀しいのと、せっかく御使い様に会えたのに別人だったことで落胆したのと。複雑な気分がうずまいていたが、どこかで不思議と納得している自分もいた。——やはり御使い様じゃなかったのだ、と。

（たぶん、本当はもっと前から気付いていたのかもしれない。目をそむけていただけで……）

再会を喜びながらも、一方で腑に落ちないものを感じていた。疑う理由がなかったからそうしなかっただけなのだ。

「……任務に向かいますので、これにて失礼いたします」

何も言わない崇怜に一礼すると、結蓮はうつむいたまま踵を返した。

背中を見送った崇怜は、おもむろに懐から文を取り出した。結蓮が恩人に宛てた、あの手紙

だ。

これさえ見せれば結蓮は信じると思った。そして憧れの恩人に対して手放しの好意を向けるのだと。

それなのに、彼女は今度も心からの笑顔を見せてはくれなかった。

こんなに愛しているのに。こんなに欲しているのに。

「……結蓮」

切なげなつぶやきとうらはらに、手の中の文がぐしゃりと音を立ててつぶれる。

「これでもだめか……」

どうしても首を縦に振らない想い人に、暗い思いはますます募っていく。

「私は諦めないぞ。結蓮……」

――遠く舞台からは楽の音が聞こえ始めていた。

蓮女舞のはじまりは、初代皇帝が煌を興した時にまでさかのぼる。

戦乱後の荒れた国土に豊穣をもたらしてほしいと天帝に祈り、天帝の遣いである六蓮天女に願って舞を奉納した。歌舞を好んだ蓮女たちはそれを聞き入れ、以来、煌は毎年の舞と引き替

えに緑あふるる国になったという。

六百年が経った現在も、実り豊かな秋の到来を祈願して夏の盛りに行われる舞は、煌の人々にとって特別な儀式であった。

楽の音に合わせ、歌妓たちが長い飾り袖を振る。

地上に降りた六人の天女にささげる舞。六色の衣装にそれぞれ身を包んだ踊り子たちが、一糸乱れぬ完璧さで曲に合わせて舞っていた。

白は月宮、赤は火神、青は水都、緑は樹海、黄は宝庫、黒は大地。

長い曲の中で、蓮女たちが旅をする。その足跡をたどるうち、人々はいつしか舞に引き込まれていく。

紅幻楼の歌妓として選ばれた紅夏は、赤の蓮女として舞っていた。彼女の妖艶な微笑みが、情熱的な火神の舞をいっそう引き立てているようだ。

盛る炎のように速まり、凪いだ水面のようにゆるくなる音色が、人々を仙界へといざなう。

貴人たちが演舞に見とれているのを物陰から見ていた結蓮は、ふと上空へ目を向けた。

夏空に、ごく薄い緑の膜のようなものがかかっている。

（結界が強くなった――）

儀式が始まると同時に、相長官をはじめとした封陰官数十名が結界陣を張った。玉嬉を逃が

さないため、また、都に害が及ばないようにするためだ。このままかけ続ければ、玉嬉は変化を保つことができず本性を現すはずだった。

やがて楽の音が途切れ、蓮女舞が終わりを迎える。歌妓たちが柳の枝のごとき身のこなしで礼をしたが、人々は高揚から抜け出せないようだった。

（このまま何事もなく済めば、すばらしい蓮花節になるのに……）

しばし間を置き、次の舞が始まる。今度は六人の天女一人一人を讃える、六曲の舞だ。間に休みをはさまず演奏され、妓楼ごとに分かれて妓女たちが入れ替わり立ち替わり舞を披露することになっている。時間は蓮女舞に比べれば短いが、顔と名を売る好機だからと誰もが張り切っていた。

なにしろ舞が終われば、後見役の高官の仲介で皇帝に挨拶するという栄誉が待っているのである。舞が終わった歌妓が緊張の面持ちで官吏に連れられていくのを見やり、他の妓女たちも興味津々でひそひそ話している。

「これが終われば、あたいもあそこに行くんだべか。ほんとに……」

紅夏が恐ろしげにつぶやいた。高官たちに囲まれた皇帝の席は御簾が下りているが、その場に出ればすさまじいほどの衆目を集めることになるのだ。

「姐さんなら大丈夫よ！　ただし、しゃべらなかったらね」

「あっ、次はあたしたちの出番よ」

妓楼ごとの舞は時間が短いため、早くも紅幻楼の番が来てしまった。列を作って舞台へ出ていく妓女たちの最後尾について結蓮も続く。

舞台上からは思いのほか広く視界が見渡せた。正面高台にある皇帝の席も、そこへ続くゆるやかな道も、緑の木々の中に点在する廟や寺院も。もちろん目の前に陣取った貴人たちもだ。

（……？　人数が足りない）

舞が始まってすぐに結蓮はそのことに気付いた。踊りの形式として必要な人数が決まっているのだが、自分の隣がぽっかりと空いている。向こう側にいた妓女も気付いたらしく、怪訝そうな顔をして踊っていた。

ここへ来た時には確かにもう一人いたはず。一体どこへ、そしていつ消えたのか。

（――まさか）

はっとして皇帝のほうへ目をやれば、ちょうど一人の妓女が高官に連れられ、紹介を受けているところだった。

声をかけられたのだろうか、顔を伏せていた彼女がゆっくり身体を起こす。

その顔を見たとたん、結蓮はぞっと血の気がひくのを感じた。

皇帝に向かって笑みを浮かべたあどけない顔。それにそぐわない赤い唇がなまめかしく映る。

妓女が唇を開きかけた、その時。

空を切って飛んできた何かが、彼女の額に突き立った。

一瞬置いて、あたりがどよめいた。舞台前の貴人たちが何事かと振り返り、楽人たちも演奏を止めて見ている。

妓女は眉間を鋭い武器――呪具で射貫かれていた。目を見開き、微動だにしない。白い顔に血が滴りおちていく。

「――な、何事だッ!?」

あまりの出来事に蒼白になった高官たちがようやく騒ぎだし、誰もが武器の飛んできたほうを振り向く。

そこには、封陰官の正装をした季隆が一人で立っていた。

騒ぎ立てる高官らを無視し、彼は皇帝の御座に向かって拝礼した。

「おそれながら申し上げます。そこなる女は妖怪・玉嬉の化身でございます。皇帝陛下におかれましては、安全な場所へただちにお移りくださいますよう」

「妖怪!?」

「玉嬉だと……!?」

さらに青ざめる高官たちの中、妓女の後見役らしい一人が怒りの顔で飛んできた。

「何を申すか！　この女は私が後見をしておる者！　素姓は私が保証しておる！　皇帝陛下の

御前で刃傷沙汰を起こした上に、わけのわからぬことを申すとは……！」

立ちすくんでいた女が、ふっと糸が切れたようにその場にくずれおちる。

誰もが息を呑み、恐ろしげに後ずさってそれを凝視した。

一方、一連の様子を結蓮たちも舞台上から見ていた。

すでに楽の音はなく、舞は中断されて、誰もが何事かとそちらを振り返っている。

「今の……紅淑だったよね？」

一人の妓女が震える声でつぶやく。結蓮は厳しい目で御座前のなりゆきを見据えた。

消えたのが紅淑という若い妓女なのはすぐさま気がついた。だが、皇帝の前で堂々とふるまい、別人のような表情をしていた彼女には、以前とは明らかに違う禍々しさがあった。

「どういうこと!?　なんで紅淑があんなところにいるのよ」

「あたしらに内緒で抜け駆けしてたってこと!?」

「信じらんない！　大人しそうな顔して……！」

自分たちと同じくあくまで紅夏の付き添いとして来ていたはずの紅淑が、いつのまにか高官に後見してもらい、皇帝に引き合わされていたのだ。彼女たちが動揺するのも無理はない。

「で、でも、どうして季さまはあんなことしたの!?」

うろたえる妓女たちに囲まれ、紅夏も不安げにしている。彼女たちを守るように結蓮は前へ出た。紅夏を狙っていた玉嬉がこの場にいるとわかった今、またいつ襲いにくるとも限らない。

御座の前では、倒れた紅淑をおそるおそる観察していた者たちが、不穏な空気をただよわせ始めていた。

いくら待っても女は変化が解けず、人の姿のままだ。本当に妖怪ならば、急所を突かれたら本性を現すはずである。

「この女は人間だぞ。判断違いをしたのではないか⁉」

「よくもやってくれたな！　蓮花節を血で汚すとは！」

「すぐにあの者を捕らえろ！」

命じられた武官が季隆を拘束する。遠くから見ていた結蓮は歯噛みした。

（いけない。このままでは……！）

玉嬉の変化が解けなければ、季隆は人を殺した罪で捕らわれてしまう。そしておそらくはこれも玉嬉の計略のうちなのだ。

恐ろしげに御座のほうを見つめていた妓女たちだったが、ふいに一人がぽつりと言った。

「ねえ……、ていうか紅淑って……誰だっけ」

「何言ってんのよ、この前入ってきた新入りの……」

あれ？　と他の妓女たちが顔を見合わせる。

「いつ、入ってきたんだっけ……？」

「あんな子、ほんとに紅幻楼にいた？」

混乱したように言い合っている。彼女たちにかけられていた暗示が解けたのだ。
玉嬉の幻術が解けるのも近い。結蓮は隠していた太刀を手にして身を翻した。
「結蓮さまっ」
「紅夏どの、あのお守りをしっかり持っていてください。ここを動かないで」
景親に贈られたというお守りに、季隆が呪をかけ直したものを彼女は握っている。うなずき返してきたのを確認すると、結蓮は御座のほうへ猛然と駆け出した。

御座の前では、武官に取り押さえられた季隆を高官たちが取り囲み口々に責め立てていた。
「なんのつもりだ、気でも触れたか！」
「このようなこと前代未聞だぞ。封陰官が間違いで人を殺めるなど……！」
彼らとて皇帝を守る側近であるから、こんなことが起こって気が立っているのも無理はない。だが季隆は地面に頭を押しつけられながらも、ただじっと紅淑を見つめている。
やがて、彼の目にさっと厳しい光が灯った。
「急いで避難してください、幻術が解けそうだ」
「ええい、まだ言うか！」
誰かがなると同時に、すさまじい突風が吹きつけた。

御座の御簾が跳ね上がる。その向こうには皇帝はおろか太子も侍従たちすらも姿がなかった。気付いた高官たちが驚いたように顔を見合わせる。

「陛下がおいでになられぬぞ」

「そんな、確かにこちらにお入りになったはず」

ざわつく場に悲鳴が上がったのは、その時だった。

「なっ、なんだ、これは……っ！」

横たわっていた紅淑の身体が、ぐぐっと上に持ち上がっていくのだ。人ではありえないような方向に首や腰が曲がっている。その不気味さに誰もが怖気だった。

立ち上がった季隆が見据える中、紅淑の身体が白い光に包まれる。

「さすがのおまえも、長官直々に組んだ満月陣の結界には耐えきれなかったみたいだな。玉嬉蓮女舞が始まると同時に、相長官をはじめとした封陰官が山全体に強力な結界を張っている。それに耐えかねて本性を現したのだ。

ふくらんだ光がはじけた時、あたりには口をふさぎたくなるほどの妖気がたちこめていた。

**「ふ……、やっぱりおまえはさっさと殺しておくべきだったねえ……」**

九つ尾の巨大な白狐が、あだめいた声で笑う。

静まりかえったその場に、人々の絶叫が響いた。

「ばっ……化け物！」

「玉嬉だ、九つ尾の滅びの象徴……！」

恐怖に顔をゆがませ、我先にと逃げ出していく。

駆けつけた結蓮は、腰を抜かしている官吏を引き起こすと逃げる人の群れへと押しやった。

「季隆どのっ」

対峙した玉嬉から彼は目線をはずさない。その表情は思いのほか冷静だったが、口元には笑みが浮かんでいた。

「会いたかったぜ……」

それは、ようやく仇とめぐりあえたことへの歓喜だったのだろうか。霊符を巻き付けた呪具を狙い定めて投げ放つ。

「禁縛符！」

玉嬉の眉間へと飛んだそれを、巨大な尾がぴしゃりと落とす。蒼い閃光が走った。

「**愚かな。そんなもので妾を仕留めるつもりとは……**」

玉嬉がふいに口をつぐみ、不審そうにあたりを見回す。

風景が一変していた。背後には山肌が迫り、一面に蓮の花が咲く大きな池が広がっている。あたりには皇帝はもとより官吏の一人もいない。

「最初に投げた呪具に術をかけといた。二本目の呪具を破壊したらここに飛ばされるようにな」

玉嬉の尾が、ゆらりと不穏に揺れる。
季隆が唇の端をつりあげる。挑発するような表情だ。
「どうせ戦うんなら広いところのほうがいいだろ。感謝しろよ」
玉嬉の身体から怒気が発せられている。皇帝を狙っていたのに強制的に移動させられて苛立っているのか。
だが玉嬉は怒りを露わにすることもなく、目を細めてこちらを見た。
**「おまえは本当に邪魔なやつだねえ。景親の言っていたとおりだ。こざかしくて生意気な男」**
「……」
**「妾が一番嫌いな類の男だ」**
ふっと季隆が鼻で笑う。
「そりゃ嬉しいね。俺もおまえのこと大嫌いだよ」
山が静まりかえった。
一瞬後、池に巨大な水柱がそそり立った。それは水の龍と化し、意思を持ったように玉嬉へと襲いかかっていく。と同時に玉嬉の尾が山肌をえぐり、降り注いだ土砂が水柱と激しくぶつかった。
結蓮はぶつかりあう下をかいくぐって走ると玉嬉の尾に斬りつけた。しかしすぐにはね返されてしまう。たたきつけられた尾を刃で受けとめると、ガキッと硬い音がした。



（これは太刀では斬れないか……！）

「大丈夫か！」

叫んだ季隆にうなずいてみせ、結蓮はすばやく太刀を払って尾の下から転がり出た。

純白の毛並みを土砂で茶色く汚した玉嬉が、いまいましげに息をはく。

**「もう一匹は小娘じゃないか。妾はへどが出るほど嫌いなんだよ。おまえのような顔かたちの美しい女がね！」**

「！」

三本の尾が空を切って襲ってくる。尋常ではない速さに、避けるのが精一杯だった。体勢を立て直そうとしたところに再び別の尾が飛びかかってきて、またもや間一髪で逃れた。

（さすがに速い！）

かつていくつもの国を滅ぼしたと言われるだけのことはある。今はかなり力が落ちているはずだが、そんなそぶりを見せない。すでに軽く息があがっている自分に気付き、結蓮は油断なく見据えながら太刀を構え直す。

『玉嬉の弱点は水だ』

事前に季隆に聞かされた作戦が脳裏によみがえる。

『ただでさえ景親の血泉符で力が弱まってるはず。水に濡れるともっと弱くなる。水場に誘い込んで戦えば必ず勝てる』

そう言った時の彼の力強い瞳を思い出し、柄を握る手にも力がこもった。

彼の読み通りならば、大きな池のあるこの地は玉嬉にとってそれだけで不利な場所のはずだ。

季隆は次々と霊符を駆使し、池の水をあやつって武器にしている。師である真君に力を半分取り上げられたままだというのに、出し惜しみする気は一切ないようだ。

霊符によって作られた水の龍と玉嬉の九本の尾は、すさまじい音を立ててぶつかり合い、絡み合ってもつれている。その合間をぬって走り、結蓮は玉嬉の首もとへ太刀を突き立てた。

**「ええい、鬱陶しい娘だね！」**

すぐさま一本の尾がうなりをあげて襲いかかってくる。太刀をえぐるようにしてから結蓮は飛び退いたが、致命傷を負わせることはできなかったようだ。

あたりには粉塵が舞い、足下は水浸しという異様な風景の中、玉嬉がゆったりと身構えた。

**「さっきからいやに水ばかり使うと思ったら……おまえ、妾の弱点を突いたつもりかえ？」**

牙をむきだし、にたりと笑う。

ぞっとするような気があたりに満ちた。

**「ほんにこざかしい男よのう。女の弱点を暴いて責め立てるとは。――では妾も同じことをしてやろうじゃないか」**

**「……っ、耳をふさげ、結蓮！」**

季隆が緊迫した声で叫んだ時には、すでに遅かった。

瞬く間に視界が霧に包まれる。それが晴れた時、周囲の風景は一変していた。

気がつくと、結蓮は封陰省の書庫に立っていた。

見覚えのある大卓に二人の若者が陣取っている。すぐ傍に立つ結蓮に目もくれず、楽しげに話し込んでいる様子だ。

一人は、あどけない顔立ちをした季隆。そしてもう一人は、以前華瑛の夢の中で見かけた青年だった。おそらく小野景親だろう。封陰官が誰も座らない、あの席に腰掛けている。

（これは……幻術？）

過去の二人のことを見せられているのだろうか。見たかぎりではごく普通の若者たちの光景だった。

『それにしても、水明真君だっけ？　すごい人気だよな。どこにいっても廟があるし、しかもお参りの人で大行列だし』

『臨道水明真君だよ。初代皇帝と一緒に煌を興したそうだから、人気があるのも当然だ』

どうやら二人で真君廟に行ってきたらしい。少しぎこちない煌ことばからして、留学して間もない頃のようだ。

『今もどこだかの山に棲んでるんだろ？　俺、弟子入りしてみようかな』

『あっさり言うなあ、おまえは。煌で一番の聖仙だぞ？』
『だめかな』
『……いや、おまえならできるかもしれない。璉で一番の天才だものな』
景親が目を細めると、季隆も否定するでもなく、ふうと息をついた。この頃はまだ天才と呼ばれるのに抵抗はなかったようだ。
『仙道修行はまだやってないし、勉強してみたかったんだ。せっかく煌に来たんだからそれもいいかと思って』
『仙人にでもなりたいのか？　もとから仙人みたいな生活してたくせに』
『二月三月山にこもってたぐらいじゃ仙人なんて言わないだろ』
冷やかされてむっと眉を寄せた季隆が、ふと考え込むような顔つきになる。
『なあ、景親』
『ん？』
『仙人は、大将軍を倒す秘術も教えてくれるかな』
『季隆……、おまえ、そのために真君に弟子入りするなんて言ってるのか？』
驚いたように景親が真顔になると、季隆も真面目に応じた。
『それはさすがに違うけど。せっかく留学してまで璉を出たんだ。璉のためになることを何かつかみたいだろ』

『そうだな……』

『煌はいいよな。いくらでも好きなだけ勉強できるし、偽の皇帝に嫌々仕えなくてもいいし。頑張れば出世できるっていうし……って、そうか！』

ぼやいていた彼が急に目を輝かせた。

『景親、やっぱり俺たち出世するしかない！　煌で大臣にでもなれば、璉に帰った時に大将軍とも張り合えるよな？　取り入ったふりして近づいて、捕らえることだってできるよな』

『ええ？　おいおい、物騒だな』

『だめか？』

『そういうのはちゃんと根回しして、段階踏んでやらないと失敗するぞ。おまえ一人でやろうとしても無理だよ』

あきれ顔で諫めた景親が、ため息をつく。

『私も付き合うよ。おまえ一人だと心配だ』

『じゃあ二人で大臣目指そうぜ』

『簡単に言うなよ。まったく……』

けろりとしている季隆を眺め、景親は苦笑している。とても優しい目をしていた。

すぐ傍で見守っていた結蓮は、しみじみとした気持ちになった。

（本当に仲が良くていらしたのね……）

季隆にとって景親は、おそらく親友以上の存在だったのだろう。

皇帝にあだなす大将軍が治める国からやってきた二人。こうして故国を憂い、未来を思って語り合う日々を送っていたのか。苦楽を共にした仲間という言葉がぴたりと当てはまる。

ふと気付くと、少し離れたところに季隆が立っている。彼も同じくこの光景を見ていた。呆然としたような表情で、じっと凝視している。

声をかけようとした時、ふいに風景が変わった。

次に広がったのは朝廷の朝堂だ。百官が集う朝礼で、若い季隆が皇帝の前に進み出ており、神妙な様子で拝礼している。控えた官吏らがひそひそと話していた。

『今度は蘭州の廃園に棲みついた化け物退治だと』

『大したものだ。あの若さで……。これで何度目だ？』

『天才と呼ばれるだけのことはありますな』

どうやら季隆が大きな任務を果たしたために皇帝から褒美をつかわされた栄誉ある場面のようだ。顔をあげた彼の瞳はいきいきとしている。

（そうか。業焔事件で当時の封陰官がいなくなったから、季隆どのは実力を発揮できるようになられたのね）

それまでは地方に飛ばされていたと言っていた。本来の職務が果たせるようになって誇らしいのだろう。朝礼が終わり、朝堂から退出していく官吏らに祝いの言葉をかけられて、笑顔で

応じている。

**「――ああやって、ちやほやともてはやされていい気になっていたんだろう？」**

揶揄するような声に、はっと振り向くと、人の姿に戻った玉嬉が季隆の肩に手をかけていた。身構える結蓮に蠱惑的な笑みを向け、季隆の耳元に唇を寄せる。

**「だから景親は、おまえのことが嫌いになったのさ」**

彼は無反応のまま過去の光景を見つめていた。結蓮が太刀を手に駆け寄ると、玉嬉はあざ笑うかのように姿を消し、離れたところにまた現れた。

**「大人しく見ておいで、小娘。おもしろいのはこれからだ」**

すっと玉嬉が指さした先に、あらたな場面が出現する。

封陰省の本庁だった。封陰官が数人で話をしている。

『季隆、最近おまえたち喧嘩でもしたのか？　景親とあまり一緒にいないようだけど』

『あいつ、任務にも出てないだろう？　おまえ一人で大丈夫なのか』

『平気平気。景親のやつ、体調崩してるみたいでさ。病気のやつを無理やり引っ張っていくわけにもいかないし』

若い季隆は笑って答えながらも、何か気になっているのか浮かない顔つきをしている。

封陰官たちは迷うように目配せしあっていたが、やがて言いにくそうに切り出した。

『実は、景親を花街で見かけたって人がいるんだ。それも何人も……。おまえと任務に出かけ

てるはずの日なのにって、心配して教えてくれたんだよ』

『え……？』

目を見開いた季隆が、すぐに笑って手を振る。

『まさか、それはないって。あんな真面目なやつが仕事怠けてそんなところに行くわけない』

『私たちもそう思ってはいるんだが……』

『あんまり変に噂しないでやってくれよ。戻ってきた時に気まずい思いしてもなんだしさ』

同僚たちを取りなした彼は、心の底からそう信じているかのようだった。

「ふふ……呑気なことを。そんなふうに思ってたのはおまえだけだったのにねえ……」

玉嬉の笑みを含んだ声が響き、光景が一変する。

次に現れたのは見知らぬ部屋だった。上等の赤い紗幕がかかった寝台に景親が横たわっている。初めに見た彼と違い、官服はだらしなく着崩れ、どことなく顔つきも空虚だ。

傍には酒の器を持った女が座り込んでいる。そして開け放たれた扉の前で季隆が立ちつくしていた。

『おまえ……、何やってるんだよ』

唖然としていた彼の目に、みるみる怒りが灯る。

『体調崩して仕事に出てこないやつが、なんで妓楼で酒呑んでんだって訊いてんだよ！』

景親は答えない。ずかずかと彼に近づき、季隆が力任せに胸倉をつかみあげる。

『ふざけんな。どれだけ心配してたと思ってるんだよ。聞いてやるから言い訳してみろ！』

女が怯えたようにしているのも構わず、景親をにらみつけている。同僚たちから庇っていたのにこれでは、裏切られたと思ったのかもしれない。口調は激しかった。

目をそらしたまま景親がようやく口を開いた。

『……私は封陰省をやめる』

『はあ!?　いきなり何言ってんだよ』

『以前から考えていたんだ。私は……もう呪禁術は使えない』

『使えない……？　もしかして、任務でどこか痛めてたのか？　それで支障が出て――』

『そうじゃない』

景親は眉を寄せて顔をそむけた。

『おまえと任務につくのが苦痛だ。顔を見ているだけで……つらい』

季隆がぽかんとして彼を見つめる。その表情にじわじわとうろたえたような色が浮かんだ。

『なんでだよ？　何が苦痛なんだ？　つらいって、何年も一緒にいたくせに、今ごろ何言い出すんだよ』

沈黙した景親はもう目線すら合わせようとしなかった。

横顔から拒絶を感じ取ったのだろう。季隆が傷ついたような表情になる。

『……わかったよ。そんなに嫌なら、相棒も解消してやる』

『……』

『もうおまえなんか知るか。勝手にしろ！』

たたきつけるように叫ぶと、すごい勢いで飛び出していった。

乱れた服を直している景親に、女が眉をひそめて擦り寄る。

『景親さん、大丈夫？　なんて乱暴な友達かしら、ひどいわね』

『……いや。いいんだ』

力なく首を振った景親は、暗い笑みを浮かべていた。

『あいつは〝天才〟だから……私のような人間の痛みがわからないんだ……』

やるせないつぶやきが、杯の酒に吸い込まれるように消えた。

（なんなの、これは……）

予想外の展開に結蓮は呆然としていた。

紅夏の言っていたつらい思いとは、このことだったのだろうか。明らかに変わったのは景親のほうだったが、彼の身に何が起こったのだろう。

玉嬉がくすくす笑いながら姿を現す。

**「哀しいものだねえ。もとは無二の親友だったのに、相手の成功を認められず、妬みを抱くようになってしまうなんて」**

「！」

いつのまにか季隆と離されていたことに気付いて結蓮が身構えると、玉嬉は彼の肩に自分の頭を載せ、赤い唇を曲げてみせた。挑発しているような表情だ。

**「天才の名をほしいままにしていたこの男と違って、景親は呪禁道の名家の跡取りでありながら自分の才能に限界を感じていたのさ。むしろこの男の存在がそうさせたのかもしれないねえ。差を見せつけたりしなければ、景親が追い詰められることもなかっただろうに……」**

あてつけるようにゆっくりと言いながら、玉嬉が季隆の顎を指でなぞる。

玉嬉が変化していた妓女のもとに景親は通っていたというから、彼からいろいろ話を聞き出していたのだろう。ずいぶん詳しいようだった。

**「わかるかえ？　おまえの傍にいることが、おまえの力を見せつけられることが、つらくなっていったのさ。同じことを同じだけやっていても、おまえには敵わない。煌に渡ったことでそれを思い知らされたんだ。だから逃げた……そしておまえはそんな景親を軽蔑した」**

ささやくような甘い声は、まるで季隆をいたぶっているかのようだ。それでも彼は目の前の過去の光景を凝視したままびくりとも動かない。それをいいことに玉嬉はなおも彼の頬に手を当てて顔を寄せる。

**「ひどいやつだねえ、おまえは。景親はあんなにおまえを可愛がっていたのに。おまえに軽蔑され顧みられなくなっても、おまえのことをずっと庇っていたんだよ？　季隆はいいやつなんだ、私なんかとは違う、天才なんだから……ってね」**

天才、と言われた一瞬だけ、季隆の表情が動いた。やはり彼にとってその言葉は思うところがあるもののようだ。

**「景親も良い術師だったよ……妾の正体に気付いたんだから。けれど最良の術師じゃなかった。だから負けたのさ。あんなふうに……」**

玉嬉が含み笑いしながら視線を向ける。そこには血溜まりの中に伏した景親と、動転した顔でそれを助け起こしている若い季隆がいた。

**「ほうら、覚えているだろう？　おまえが一人にしなければ、景親は死なずにすんだかもしれないのにねえ……」**

「玉嬉！」

結蓮はとっさに叫んだ。

この妖怪の声は毒だ。幻術を得意とするだけあって、言葉すべてに事態が引きずられていく。それを断ち切らなければ打開できない。

「今すぐその人から離れるがいい。さもなくば腕を斬り落とす」

見据えたまま脅しではない忠告をする結蓮に、玉嬉がふっと冷たい笑みを向ける。

**「怖いことを言う。見た目と同じで物騒な小娘だ」**

さくっ、と言葉が心に突き刺さったような感覚がする。人離れした顔立ちのせいで嫌な思いをしたことが次々に思い出されたが、ぐっと奥歯を噛んでそれをこらえた。

これが玉嬉のやり方なのだ。人の痛みや弱みを突き、攻撃する幻術。

「……季隆どの、しっかりしてください！」

季隆は微動だにしない。過去を見せつけられて傷ついたあまり動けずにいるのだろうか。

「玉嬉の言葉には矛盾があります。つじつまが合わないことを言っている。あなたを動揺させようと言っているだけです！　ですから――」

どうして何も反応しないのかと焦れながら見つめて、はたと気がつく。

季隆の額には大量の汗が玉と浮いており、こめかみから頬へと次々に流れていた。それに身体全体が妙に強ばっているようでもある。

**「無駄だよ、小娘。妾の幻術にかかればこんなものさ。術師だってしょせんは男だ」**

玉嬉が愉快そうに高笑いする。結蓮はそれを鋭くにらんだ。

（おそらく季隆どのは完全に幻術にかかっているわけではない。意識はあるのに動けない状態なのでは？）

直感でそう思った。ならばと太刀を構え直し、勢いよく地面を蹴った。

季隆にもたれかかっている玉嬉の腕をめがけ、太刀を振り下ろす。斬ったと思った瞬間、玉嬉の姿が消えた。狙い通りにいったのを喜ぶ間もなく、すばやく太刀を持ちかえる。

「季隆どの、御免！」

言うなり彼の横っ面をひっぱたいた。

力を込めすぎたのか、季隆がよろけて尻餅をつく。結蓮はまた太刀を構えると、目の前に広がる過去の光景めがけてそれを振り薙いだ。

「女の私に、その妖術は効かない！」

まばゆい光が一閃し、目の前にあった光景が消し飛んだ。

代わりに広がったのは濃い緑の山肌と、蓮花の浮かぶ池。玉嬉の幻術が解けたのだ。

「**おのれ、小娘……！**」

姿を見せないまま玉嬉が怒りの声をあげる。

結蓮が油断なくあたりに注意を向けていると、下のほうでうめき声がした。

「いて……」

尻餅をついた季隆が頬を押さえている。彼の幻術も解けたらしい。結蓮は急いで駆け寄った。

「申し訳ありません！　制裁は後で受けます」

「ハハ……、何言ってんのこの子は。制裁とかないない。許嫁に殴られるのは俺の趣味だし」

苦笑しながら顔をあげた季隆が、ぽんと結蓮の頭を軽くたたく。

「ありがとね。助かったよ」

その笑顔にほっとしつつも、結蓮は複雑な気分になった。玉嬉が見せた過去が本当のことだったとしたら、この人はとてもつらい経験をしているのだ。なのにそれを微塵も見せようとしない――。

さっと服を払って立ち上がると、季隆が正面を見据えながら懐剣を取り出した。
「許嫁の前で幻術なんかかけるんじゃねえよ。後でやきもち焼かれて大変だろうが」
彼の視線の先には本性に戻った玉嬉が殺気をほとばしらせて構えている。
**「遊びは終わりだよ、坊や」**
「最初っからその意気でこいよ」
ぴり、と空気が張り詰めた。
にらみあった双方が同時に攻撃を再開する。
季隆の水の龍がぐんぐんと伸びて玉嬉を追い詰めていく。玉嬉はそれを避けながら九つの尾で地面をえぐり、二人の足場を奪っていった。
「出でよ、木石丸！」
季隆が血を含ませた懐剣を振り下ろすと、ドンと大きな音とともに巨大な切り株が現れた。それは見る間に無数の枝を伸ばし、地面に這っていく。節目もなく枝が重なりもしない不思議な木は、破壊された二人の足場となった。すかさず結蓮は走り、玉嬉の背中に斬りつける。
「鬼狩姫、来い！」
季隆の叫びが聞こえた瞬間、太刀に見えない力が加わった気がした。斬りつけた太刀が玉嬉の身体にめりこんでいく。
**「ギャアアアア!!」**

足下の巨体がもんどりうった。結運はなおも力をこめる。きっと今この太刀には鬼狩姫が宿っているのだ。だからこんなに容易く斬れたのに違いない。

（――？　なんだろう、あれは……）

傷口から何かが見えた。白くて模様のようなものが書かれている。

水の龍が次々に巻き付いてきた。次の術が発動するのを察し、結運は気になりながらもすばやく太刀を抜いて飛び降りた。

**「おのれ……おのれェッ!!」**

「結運！」

玉嬉の絶叫と季隆の叫びが重なる。彼のもとへと走っていた結運は、何事かと振り向いた。巨大狐の口から炎が噴き出している。瞬く間に迫ってきたそれが視界を覆った。

赤い炎。本能的に危機を感じ、思わず身体に力をこめる。

次の瞬間、目の前に翠色の水が広がった。

「……!?」

きらめきを放つ透明なそれが身体中を包みこむ。業焔を倒した時にも見た、あの水だ。

どうして急にこんなことになったのかはわからないが、火を防げるのなら好都合だ。だが安堵した瞬間、

「使うな！」

横からいきなり手をつかまれる。びっくりして見ると、季隆が厳しい顔で見つめていた。

「その力は使うな」

「……」

身体を包んでいた水の膜が、すうっと地面に流れ落ちた。弾力を持ったそれはとぷんと音を立てて池にしずむ。

突然のことにぼうっとしてしまったが、玉嬉の吐く炎が迫ってくる気配がないのに気付いて我に返る。

見れば、玉嬉の炎を阻むように水の壁がそそりたっていた。その傍には異国ふうの装束を身につけた青年が立っている。結蓮と目が合うと、ふっと消えた。

おそらくは懐剣から呼び出した精霊や神の類、もしくは使い魔だろう。玉嬉の炎に水の力で応戦したのだ。

「季隆どの、今ので呼び出されたのは何体目ですか？」

本来、術式を解くには空中に霊符を描かなければならない。だが緊急時にはそれを省き、強制的に召喚することもあるという。ただしそれには多大な力を消耗する。

今は時間がないからある程度そうすることは結蓮も理解していた。だが続けざまにこれだけやるとさすがに彼の身が危ない。すでに倒れていてもおかしくないほど力を使っているはずだ。

「申し訳ありません、私のせいで余計な消耗を――」

「何言ってんの。君が斬りつけたおかげで玉嬉は窮地に陥ったんだ。あの炎はその証拠だよ」
そう言った彼の顔色が今までになく悪い。結蓮は唇を噛んだ。
もうやめて、とはとても言えない。彼に仇討ちを遂げさせると決めたのだ。
（でも……！）
ギィィ、と玉嬉が奇声をあげる。
「許さぬ！　殺してやる！」
「翡翠丸！」
季隆がすばやく懐剣の鞘をはらい、刃に血を含ませた。
現れた翡翠丸が、玉嬉の吐く炎を黒い翼をはばたかせて押し返す。応戦する判断は的確だったが、季隆の体力が奪われているのは明白だった。
「その術はもうしないでください！　やるならちゃんと術式を解いて……」
「そんな悠長なこと、今は言ってられないだろ」
別の術式を解こうというのか、彼は次の懐剣を手にする。だが急に口を覆って咳き込んだ。
げほっと激しい咳とともに血が飛び散った。
「季隆どのっ……！」
口から血をこぼした季隆が、血まみれの手を見下ろして目を瞠る。だがすぐに表情を戻した。
「これだけ力使ったらしょうがないか。別の手を考えよう」

「別のって……それ以上やったらあなたまで……！」
「やめろなんて言わないでね。言われてももうやめられない」
静かに彼は目線をあげた。翡翠丸の風に阻まれている玉嬉へと。
「ここまでお膳立てしてもらってるのに、勝てなかったら男じゃないだろ」
今この瞬間も山全体に封陰官たちが結界をかけ続けている。そのため玉嬉は逃げられず、季隆に立ち向かってくるのだ。だが彼にしてみれば、復讐のためにそういう状況を作ってもらっているのである。
ぼろぼろになりながらも戦うのをやめない彼に、仇を討たせてあげたい。その思いと、目の前で吐血した彼の姿との間で気持ちが揺れた。結蓮はぎゅっと目をつぶる。
（もし私がこの人の立場だったら、たとえ死んでも目的を遂げたいと思ったはず。その思いは誰にも止めることはできない）
業焔を倒したことで周りが見えるようになった。楽しいと思えることも増えた。
（この人の中にも、滞っているものがあるかもしれない。だとしたらそれを解消してあげたい。そして前に進んでほしい……）
危険だからやめてと口にするのは容易い。だが、自分がしたいのはそんなことではないのだ。あらためてそう確認し、顔をあげた。
「止めません。あなたが戦いを続けるかぎり、私が傍で援護します」

太刀を握りしめ、彼を庇うように前へ出る。
「先ほど斬りつけた時、かなりの手応えがありました。もしや背中が急所なのかもしれません。他と違ってずいぶん刃が入りましたから。そこを狙って時間を稼ぎます。その間に策を考えてください」
翡翠丸の姿が消えた。季隆の力が弱まり、強制的に太刀へ還ったのだろう。
もう玉嬉を阻む者はいない。自分の太刀以外には。
小さく炎を吐きながら玉嬉がこちらに狙いを定めている。結蓮も重心を低くして身構えた。
「――待った」
季隆が奇妙な顔つきで引き留める。
「背中だけ刃が入ったって言ったね。そんな話聞いたことないぞ。鬼狩姫が憑いてたとは言っても、ちょっと変だ」
「私も少し不思議に思いました。でも本当です。斬りつけた傷口から何か白いものが見えて、それで特別な弱点なのかと思って……」
はっと彼が息を呑んだ。
「血泉符だ……景親が仕掛けたっていう。だからそこだけ玉嬉の力が弱まってたんだ」
「背中にしか効いていないということは、限定的な働きしかないのですか？」
玉嬉へと目を向けたまま結蓮は首をかしげる。足止めするにしてもできるだけ情報を集めて

からのほうがいい。

「たぶん、なんらかの理由で血泉符が不完全だったんだ。それを完成させれば……」

もどかしげに懐をさぐり無地の霊符を取り出すと、彼は自分の血でそれに文字を書き始めた。未完成だった景親の血泉符に自身の術式をかけるつもりなのだ。

「もともと景親と紅夏、二人分の血の呪がかかってる。俺も合わせて三人分にすれば三倍の呪力になるから……」

「……四人分なら、もっと強くなりますか？」

驚いたように季隆が顔をあげる。結蓮は迷いを振り切って続けた。

「私の血も使ってください」

時間が経つと蒼く変色する血。これまでは見て見ぬふりをしてくれたかもしれないが、さすがに術式に使えばそうも言っていられなくなるだろう。やっぱり気味が悪いと思われるかもしれない。

嫌われたくはなかったが、申し出を撤回しようとは思わなかった。その時は仕方ない、諦めればいいだけだ。

じっと見つめてきた季隆が、優しく微笑んだ。

「ありがとう。痛いのにごめんね」

「いえ……」

思ったよりあっさりと受け入れられたことに軽く動揺しながら、結蓮は腕に斬りつけた。流れ出た血はまだ赤い。季隆がそれを筆に含ませる。霊符に筆が走っていくのを横目で見ると、結蓮は太刀を手に駆けだした。

突進してきた玉嬉をかわし、九つの尾が狂ったように襲ってくるのを懸命に避けながら背後へ回る。先ほどつけた傷はまだ口を開けており、蒼い血がどくどくと流れ出ていた。

（私の血も、あれと同じ――）

霊符を書き終えた季隆は色の変わったそれを見てどう思うだろう。戦いを終えて戻った時、今までと同じ関係でいてくれるだろうか。

ふさぎそうになる気持ちを振り切り、玉嬉の背へと駆け上がる。目印だとばかりに傷口に太刀を突き刺すと、足の下から絶叫が轟いた。

「小娘がァァ――――ッ!!」

すさまじい速さで襲ってきた尾を避けきれず、たたきつけられて身体が浮いた。勢いのまま地面に転がり、一瞬息が詰まる。

池の向こうで季隆が霊符を構えたのが見えた。

結蓮にとどめをさすべく彼に背を向けた玉嬉へと、赤い模様の躍る霊符が飛ぶ。

「結蓮、どいてろ！」

その叫びに、ほとんど無意識に地面を這って動いていた。

「貴様ッ、何を――」

気配に気付いてか玉嬉が振り向いたが、すでに遅かった。血泉符がぴたりと背に張り付いている。

「景親の魂、返してもらうぜ！」

季隆が宣言すると同時に、あたりは閃光に包まれた。

一瞬後、断末魔の叫びとともに玉嬉の身体が粉々に砕け散った。

いくつも星が駆けている。

ぼんやりとそれを見ていた結蓮は、のぞきこんできた顔に気付いてはっとした。

「大丈夫か、結蓮ちゃん」

うろたえたように呼びかけたのは季隆だ。彼の口元に血をぬぐった跡を見つけ、これは夢ではないのだと慌てて起き上がる。

「あれは……？」

「これまで玉嬉が食らった男の魂だ」

無数の白い魂が空を駆け、各地へ散っていく。まるで真昼の流星のようだ。

二人は無言でそれを見上げていた。
これまで還ることができなかった魂たち。解放された今、誰の元へ帰っていくのだろう。
「……ずっと捜してたんだ。あいつの魂」
遠くを眺めながら、季隆がぽつりと言った。
「身体を見た時、食われたんだってすぐわかった。首に変なあざがあったから」
妖怪や悪霊の類は、首の後ろから人の魂をすすって食らうと言われている。結蓮は静かに彼を見た。
「捜し物はこれだったのですね」
求婚され契約結婚を持ちかけられた時、そういえば彼は言っていた。捜し物が見つからないから、朝廷を追われるわけにいかないと。景親の魂がそれだったのだ。
けれども本当に彼が見つけたかったのは、もっと別のものなのかもしれない。魂が戻っても、あの頃と同じ時間が戻るわけではないのだから。
「――うん。やっと見つけた……」
うなずいた彼が、ふと目を見開く。視線の先を追った結蓮は息を呑んだ。
池の蓮の群生に浮かぶようにして景親が立っていた。正しくは、彼の霊体が。
玉嬉の見せた幻術の中の彼は暗い顔をしていたが、目の前にいる彼はただ穏やかにこちらを見ている。季隆は凍り付いたように彼の視線を受け止めていた。

どちらも何も言おうとしない。言いたいことがありすぎて言えないのかもしれなかった。
しばらくして、均衡を破ったのは景親だった。
「……大きくなったな。季隆」
「……なんなんだよ。その第一声……」
とたんに空気がやわらいだ気がした。はー、とため息をついて、季隆が髪をかきあげる。
「当たり前だろ。もう二十二だ。とっくにおまえの歳も追い越してんだよ」
「そうか……」
再び沈黙が落ちる。
結蓮はそっと季隆の横顔を見た。何か考えているのか眉を寄せて目線を落としている。
きっと彼との確執について質問や確認したいことがあるだろうに。今言わなければもう二度と訊けなくなってしまうのに、やはり複雑なのだろうか。
「――あの約束、覚えてるか？」
景親の問いに、季隆がはっと顔をあげる。
「約束？」
「一緒に出世しようって言っただろう？」
「ああ……」
うなずきながらもなんと続ければいいのか迷うように、季隆は髪をわしわしかきまぜている。

景親が亡くなった今、その約束は永遠に果たされないものとなってしまったのだ。
「私はもう現世での出世は望めない」
「……」
「だから冥府で出世しようと思う」
「……は？」
目を瞠った彼に、景親が笑ってみせた。
「私は一足先に冥府へ下りる。おまえはこのまま現世で頑張る。次に会った時どちらの官位がより高いか、競争しようじゃないか。言っておくが、私は閻王様に取り入る自信はまあまあああるぞ」
冥府にも人界と同じく官僚制度があるといわれているが、それにしても思いがけない発言だったのだろう、季隆は呆気にとられている。景親はそれを優しく見つめた。
「だからおまえはせいぜいここで頑張って、いつか会った時、私を驚かせてくれ。こちらもおまえを閻王様に紹介できる程度にはなっておくから」
ふっ、と仕方なさそうに季隆が苦笑をもらした。ようやく出た彼の笑顔は寂しげだった。
「阿呆か……」
憎まれ口にも笑って応えると、景親は「じゃあな」と言って消えた。

# 終章　告白

桃霞上空をいくつもの星が駆けていく。
昼間に起こった怪現象に気付いた者は少なくなかった。街ゆく人々が空の彼方を指さしては、恐ろしげに言葉を交わしている。
朝廷の一隅にいた彼もまた、気付いた一人だった。
遠く空をあおいだ彼は、流星の正体をすぐに察し、軽く眉をひそめる。
「玉嬉め。しくじったか」
業焔も深撚も玉嬉までも。他にも放った刺客はことごとく破られた。
「……なかなか、赤の天女は手強いらしい。……だが」
ぽつりとこぼし、彼は懐から取り出した包みを開く。
白、青、緑、黒。絹布にくるまれた四粒の宝玉。
まばゆい光を放つそれを見つめ、彼は薄く笑みを浮かべた。
「あと、二つだ――」

座り込んだまま景親の魂を見送ると、季隆はごろりと地面に寝転がった。
「あー……さすがにしんどい。生まれて初めて吐血したわー……」
「大丈夫ですか⁉」
慌てて結蓮はのぞきこむ。季隆が「平気だ」というようにひらひらと手を振ったのを見て、少しだけほっとした。だが次の言葉をどうかけたらいいのかわからない。
それきり、しばらくどちらも口を開かなかった。
蓮女舞の舞台のほうではまさにてんやわんやの大騒ぎになっている。その喧噪が風に乗って聞こえてきた。だがまだ結界が有効なのか、どこか遠い出来事のように感じられる。
「……あいつとは、都の大学で知り合ったんだ」
景親が消えたあたりを見つめながら、ぽつりと季隆が言った。
「都生まれでお坊ちゃま育ちでさ。温厚で、でもしっかりしてて、俺と違ってものすごく大人なやつだった。年下の俺を見くびることもしなかったし、いろんなこと教えてくれた。最初は俺、大学で浮いてたんだけど」
「浮いて……？」

「呪禁道の新しい流派や術を覚えるのが楽しくてしょうがなくて、他のことに興味なかったから。浮いてるのも気にしてなかったんだけど、あいつが他の学生との間を取り持ってくれて、いろいろ世話を焼いてくれてさ。呪禁道以外にも楽しいことがこの世にはあるんだって、初めて知った……」

独り言のように語る彼の眼差しからは、景親への感謝の念が痛いほど伝わってくる。結蓮は黙ってその表情を見守った。

「玉嬉が見せたまぼろしはだいたい事実なんだ。煌に来てしばらくたって、景親は俺を避けるようになった。仕事上の相棒だったのに、一緒に行きたがらなくなった。そのうち、妓楼に通いつめてるってのを人から聞いてさ。あんなふうに怒鳴り込みに行ったのも本当」

「……あのやりとりも、ですか？」

「あそこまでは言われなかったけど……そう思ってたのかもね」

軽く笑ったものの、その笑みは自嘲的なものだった。天才と呼ばれていた当時を思い出しているのだろうか。

「あいつが何考えてんのか全然わからなかったよ。あんなに真面目で優しかったやつが、どうして、って。軽蔑はしなかったけど、正直、失望したね。弁解すらしてこなくて、そのまま疎遠になって……それきり口も利かないまま、あいつは一人で死んじまった」

疲れたように彼は腕で顔を覆った。

「一人でさえなけりゃ……俺が一緒だったなら、あんなふうに死なせることはなかったんだ。一人では任務に出るなって、あいつ、いつも俺に言ってたくせにさ……」

（季隆どの……）

結蓮はきゅっと眉を寄せた。

彼が事ある毎に「一人で動くな」と言っていた理由がようやくわかって、悲しいと同時に少し後悔する。今まで何気なく聞いていたが、そのたびに彼は親友の死のことを思い返していたのだろうか。

「なんでだろうな。あいつが悩んでたこともその理由も、あの頃は全然わからなかったのに、今なら嫌ってほどわかるんだよ。あの時あんなに苛々して喧嘩ばっかりしてなけりゃ、何か変わってたかもしれないのに、って」

顔を腕で覆ったまま、季隆が小さく息をはく。

「なんであの時の俺はあんなにガキだったんだろうな……。もう少し大人だったら、あいつの気持ちもわかってやれたのに。こんな異国で、一人で死なせることもなかった……」

声が少しかすれた気がした。結蓮はどきりとして彼を見つめた。

（ひょっとして、泣いていらっしゃる……？）

いつも明るい彼が、まさか。動揺のあまり硬直してしまう。

自分が知らなかっただけで彼も様々な経験をしてきたのだ。そしてそのことで苦悩し、数え

切れない後悔を抱えて生きてきたのだろう。

その思いを、何かがほどけるように打ち明けてくれた。誰かに聞いてほしかったのだろうか。

その相手として選んでくれたことに、少しうろたえてしまう。

（こんな時、どんな言葉をかけてあげたらいいの）

自分が落ち込んでいた時、彼はどんなことを言ってくれただろう？　同じように励ましてあげたいのにその手段がわからない。

懸命に考えたが結局良い言葉が浮かばず、ただ黙って見守るしかできなかった。

（どうしたら……）

一人で焦っているうちに、いつのまにか時間が経っていたらしい。

ぐいっと顔をこするようにして腕を退けると、季隆が気を取り直したように息をついた。

「って、君にこんなこと愚痴ってもしょうがないか。ごめんごめん、しんみりしちゃったな」

いつものような明るい声で言って、笑いながら起き上がる。

顔を見た限りでは泣いていたようには見えなかったが、結蓮は思わず手を伸ばして彼の襟首をつかんでしまった。

「あのっ、季隆どの！」

「ぐふ！」

季隆が再び仰向けに転がる。頭が地面ではなく結蓮の膝に着地したことだけが救いだった。

「ちょ……やめて……今そういうことしたら、ほんとにやばいから……」
「申し訳ありません！　勢いをつけすぎました……！」
ゲホゲホとむせている彼に結蓮は慌てて頭をさげた。瀕死状態に近いのだ、乱暴なことをしてはいけない。
彼の咳が治まるのを待ってから、結蓮はおずおずと口を開いた。
「景親どのは、あなたにとって本当にかけがえのない方だったのですね」
「……そうだね」
つぶやいた彼の瞳がひどく寂しそうに見えて、胸が突かれるような思いがした。迷いながらも続ける。
「玉嬉の見せたまぼろしのように、景親どのはあなたに暗い思いを抱かれていたと思っていらっしゃいますか？」
「どうだろうな……そうかもしれないね」
「私は違うと思います」
きっぱりと言うと、彼が瞬いて見上げてきた。結蓮は自分が感じたことを正直に口にする。
「もちろん、心の奥底はご本人にしかわからないことです。でも、もしあなたに後ろめたい思いを抱いていらしたなら、冥府に下る前にそれを解こうとなさるのではないでしょうか。二度と会えなくなる前に親友のあなたとのわだかまりをなくそうとされたはずです。けれど景親ど

のはそうなさいませんでした。これからのことだけを口にして、あなたを励ましておいでのように思えました。それは、あなたに対してやましいことがないからだと思います」

景親が季隆に対して劣等感を抱き、友情にひびが入っていったのが本当に事実かどうか、事情を知らない結蓮にははっきり判断ができない。玉嬉の幻術でしか見ていないからだ。

実際に喧嘩別れのようになったのだから、ある程度確執はあったのだろう。才能豊かな親友に対して、景親が負の感情を抱いてしまったことも少しはあったかもしれない。

だが彼は、季隆に逆恨みの恨み言を言うような人物ではなかった。それはこの目でしっかり見たから断言できる。悲運をたどったことを悔いているようには見えなかったのだ。

「あなたはすごい人です。真君様のお弟子になられたほどの力の持ち主なのですから。きっと景親どのも、そんなあなたを誇りに思っていらしたと思います。あなたを嫌って離れていかれたわけではなくて……でなければ……冥府で会う日のことまで約束したりしないでしょう？」

「……そうかな」

「そうです。あなたを見つめる景親どののお顔は、とても嬉しそうでしたよ」

うまく見られずにいたようだったから、彼はきっと気付いていないのだろう。代わりに伝えるくらいは許されるはずだ。

「力不足かもしれませんが……これからは私が景親どののぶんまで相棒として隣にいます。頼りにしてもらえるよう努力します」

関係修復できないまま別れることになった親友を思い、これから先も無念さでやりきれなくなることがあるかもしれない。せめてその時に気持ちを受け止める役になれたら、と思う。

目を伏せたまま、ふふっと季隆が笑った。

「男が弱ってる時に、そういうこと言っちゃだめだよ」

「……すみません。でも本心ですから」

生真面目に頭を下げる結蓮に、彼は軽く顔を背けるようにしてまた笑った。

「今日は優しいね……」

池を渡ってきた風が蓮の花を揺らす。暑さがやわらいだ気がするのは、六蓮天女に舞が届いたからだろうか。

膝の上で季隆の髪が風に遊んでいる。思わず触ろうとしてしまい、結蓮ははっと手を引っ込めた。けれどどうしても目がそらせなくて、おずおずと口を開く。

「あの。頭をなでてもいいですか？」

え？　と季隆が目を戻す。驚いているようだったが、すぐに笑みを浮かべた。

「いいよ。……なでて」

結蓮はこくりとうなずき、ゆっくり手を伸ばす。彼がじっと見つめているので少し緊張してしまう。その気持ちが通じたのか、彼が目を閉じたので、思い切って触れてみた。

だがその瞬間、季隆が思い出したように目を開けた。

「あ、そういや血だらけだったんだ。汚れるよ」
反射的に手を引っ込めてしまった結蓮は、軽くどぎまぎしながら首を振る。
「構いません。血の赤は尊い色です。……私の憧れの色ですから」
自分にはその色の血は流れていない。出血して時間が経つと蒼く変色してしまう。異形の証でもある色に。——だから結蓮にとって赤い血は、畏れとともに羨望の対象でもあった。
ただ黙って見つめてきた季隆が、ふっと唇の端をつりあげる。
「俺は蒼い血も好きだよ」
どきりとして見ると、彼が微笑んだままじっと視線を返してきた。
「すごく綺麗だ」
「……！」
そう言った彼の瞳のほうがよほど綺麗で——そのことに動揺するとともに、結蓮はとっさに目をそらしてしまった。
やはり彼は気付いているのだ。結蓮が人外の者だということに。
血泉符を作るのに血を分けた時から覚悟していた。だが彼の口からあらためて聞くと怖くなった。これまで周囲の人々から投げられた視線や言葉を彼からも受けるのかと思うと、まともに顔を見ることができない。
「結蓮ちゃん、俺を見ろ」



少し強い口調で言われ、おそるおそる目を戻す。
真面目な顔で見上げていた季隆が、くすりと笑った。
「嘘ついてるように見える？」
「……」
しばし沈黙の後、結蓮はそっと首を横に振った。
いい加減で不真面目で軽口ばかりたたくけれど、彼は嘘は言わない人だ。
「ああよかった。うなずかれたらどうしようかと思ったー」
大げさな調子で息をはき、呑気な顔で笑っている。結蓮がなおも何も言えずにいると、彼は微笑んで見つめ返してきた。
「そんなに心細そうな顔しなくていいよ。全部知ってるから。五年前のあの時から、何かあるのは気付いてたよ」
結蓮は瞬いて彼を見つめた。まるで過去に面識があったような言い方だ。
「五年前？　それは、どういう……？」
季隆が「しまった」というように一瞬顔をしかめる。
そのまま黙り込んでいたが、やがて観念したようにため息をついた。
「……俺だよ」
ぽつりと言って、真下から見上げてくる。少し緊張したような眼差し。

「翠玉の御使い様は、俺なんだよ。結蓮ちゃん」
「――――え？」
結蓮はぽかんとして見つめ返した。
どうして急に御使い様のことが出てくるのだろう。冗談にしては唐突すぎるし笑えない。
なんとも言えないといった顔をして、季隆が髪をかきあげる。
「まあ、そんな反応するしかないよなぁ。凛々しくも男らしくもなくて申し訳ないけど、でも、ほんとなんだよ……」
「……どういうことでしょうか？」
「だから、五年前、業焔から君を助けたのは、俺なんです」
区切りをつけて繰り返され、さすがに今度はちゃんと頭に届いたが、さらにわけがわからなくなって首をひねった。
「ああもう。もっと恰好よく名乗るつもりだったのに……」
やるせなさそうにぼやいている彼を、結蓮は眉をひそめて見つめる。
今日になって御使い様ではなかったことが判明した崇怜。彼の場合は手紙があったからすぐに信じることができた。見た目の印象も、想像していた御使い様のそれと近かったから納得がいった。
しかし季隆と御使い様とでは、何もかもが違いすぎている。理想の御使い様像と重なる点が

ないのだ。

「よしっ、わかった、最初から説明しよう」

難しい顔つきで固まる結蓮に、季隆が半ば自棄のように大きく息をはいた。

「五年前のあの日、俺はちょうど地方から都に戻ってきたところだった。後宮のほうから変な気配を感じて行ってみたら、卓子の下にいた女の子を業焔がまさに襲おうとしてた。それで助けに入った。——ここまで理解できる？」

「……はい」

「太子殿下と皇后様はまだ息があった。だから業焔退治よりお二方の救助を優先した。そのせいで業焔を仕留めそこなって、君にもつらい思いをさせることになった。それは責任を感じてる。ごめん」

「……はい」

「その後、人が集まってきて騒がしくなったんで、君を別の部屋に連れてった。君は胸のあたりを怪我して、蒼い液体で服一面が濡れてた。君が怖かったって泣き出したから、俺は飴玉をあげた、けど間違って練り辛子の袋を渡しちゃった。これも責任を感じてる。ごめん」

「……はい」

「別れる時、君は俺に弟子にしてくれって言った。太子殿下を守れるように強くなりたいんだって。そう言ったのは覚えてるよね？」

こくりと結蓮はうなずいた。あの時の約束があるから、今日まで生きてこられたのだ。
茫洋とした反応を続ける部下に焦ったのか、季隆がぱんっと両手を打ち鳴らす。
「はい説明終わり！　じゃあ質問を受け付けようか！　なんでも訊いて！」
結蓮はなおも困惑していた。
どうして彼はこんなに五年前の件について詳しいのだろう？　まるで見てきたかのような話しぶりだが、いまいち現実感がわいてこない。
「あの……」
「はいはい、何っ？」
「……御使い様は翠玉を使った術で私を助けてくださいました。でもあなたはそんな呪具は持っておられないでしょう？」
これまで幾度も一緒に戦ってきたが、彼が翠玉を扱っているのを見たことがない。
「ああ……、これだろ？」
懐からごそごそと何か取り出すと、彼はそれを空中へ放り投げた。
翠色の軌跡が流星のようにたなびいていく。
「誤解してたみたいだけど、翠玉じゃなくて結界呪具なんだ。いつも使ってたんだけどねー。君、全然気付いてなかったよな」
――御使い様が登場した時と同じ、翠色の流星。

結蓮は、ごくりと唾を呑んだ。

「ですが、御使い様は凄腕の術師で……、季隆どのが御使い様だとすると、少し年齢が若すぎる気が……」

彼は現在二十二歳、つまり五年前は弱冠十七歳ということになる。その若さで業焔と対峙し、一時とはいえ退散させたのはさすがに現実離れしている気がする——と思ったのだが。

（……そうか。だからこの人は「天才」と呼ばれていた……）

若くしてそれだけの才能を持っていた人なのだ。真君の弟子になれるほどの——。

気付いたとたん、ぶわりと全身から汗が噴き出すのがわかった。

「まあ俺も若かったけど、君も若かったよね。俺の嫁になるのは嫌だってはっきり言ってくれちゃってねー」

「み、御使い様は、あなたのようにくだけた言葉遣いはなさいませんでした。とてもお綺麗な朝廷ことばを駆使され、それはもう優雅な——」

「あの頃はまだ煌ことばに不自由だったんだよ。今みたいにべらべらしゃべれなかったの。お堅い朝廷ことばを話さなきゃクビにするぞって脅されてたから、それしか覚えなかったんだ」

結蓮の疑問を季隆は次々と打ち砕いていく。とてもでたらめとは思えない流暢な返しだ。

とうとう質問すら浮かばなくなり、へどもどしていると、ふいに手を握られた。

「——〝お嬢ちゃん〟」

どきっとして見下ろすと、季隆が笑って見つめている。
「それにしても、本当に大した小仙女ぶりだ。大人になったら私の嫁になるかい？」
「……」
（その台詞は……御使い様の――）
ぱっ、と脳裏に桃の花びらが舞った。
喧噪の中で御使い様とかわした、言葉の一つ一つを覚えている。手を引かれて一緒に御殿の外へ出た時の、穏やかな空の色も。
『本当に、お弟子にしてくださいますか？』
別れ際の光景があざやかによみがえる。
念を押したくて見上げた御使い様は、逆光のせいか顔がかげってよく見えなかったが、笑っているようだった。
『太子殿下をお守りしたいんだろう？　頑張らないとね』
『いつお弟子になれますか？　今度はいつお会いできるの？』
『ハハ、熱心だな。またすぐに会えるよ』
『本当に？』

『本当さ』

『じゃあ、その時まで待っていますから、お師匠様のお名前をおしえてください』

その時——そうだ、誰かに呼ばれて、御使い様は少し忙しそうに身を翻したのだ。

そして去り際に彼が振り向いた時、確かに結蓮はその顔を見た。

『次に会った時に教えてあげる。それまで元気でいるんだよ』

そう言って笑った顔。今まではどうしても思い出せなかったのに、記憶の中で初めて再生される。

ちょっとつり目がちで整った容貌。快活そうな、でも優しい笑顔。

——今、目の前にある、この顔だ。

「……!!」

「えっ。ど、どうした？　急に真っ赤になって」

季隆がたじろいだように見つめている。はからずも膝枕した彼を結蓮は愕然と凝視したが、やがてはっと息を呑んだ。

もしこれが真実だとしたら、いろいろとまずくはないだろうか？

（だって……つまり……投げたり、関節を攻めたり、首根っこをつかんで引きずったり……顔を見るたびに小言を言ったり、事ある毎に白い目で見てしまったり……そ……それから……）

命の恩人であり、心の師であり、ずっと好きだった憧れの人に対して——。

「……」

「ちょ、今度は何っ？　ありえないくらい真っ青になってるぞ！」

慌てたように彼が起き上がったが、もはや結運にはその声すら届いていなかった。

長い階段の先には地下宮殿が広がっていた。

天然の鍾乳洞に手を加えたもので、巨大な柱がいくつも天井部を支えている。光を放つ鉱石でもあるのかあたりはぼんやりと明るい。

その部屋へ入ると、格段にまばゆさが増した。

「これは……」

そびえたつ巨石を振りあおぎ、琮成は声をうわずらせた。

あざやかな赤。これほどの巨大な宝石がこの世に存在するとは。

それと向き合うかのように、祭壇らしき、こぢんまりとした御座のようなものがある。用途がわからないせいかひどく奇妙な空間に感じられた。

「太子」

「は」

先に来ていた父皇帝に手招かれ、進み出て拱手する。
いつも御簾の向こうにいる皇帝は今、すっきりとした面立ちを自然にさらしていた。
皇帝の隣には見知らぬ男がいる。年の頃は四十前後だろうか。身なりからして官吏ではない。
「こちらは臨道水明真君だ」
さらりと言われ一瞬固まってしまう。すぐに我に返って拝礼したが、冷や汗が出そうだった。
（一体、なんの話が始まるのだ？）
大事な話があると皇帝から連絡があり、封陰省の相長官に連れられてやってきたのだが、内容に皆目見当がつかない。
面食らう琮成をよそに、真君は世間話のような呑気さで相長官に笑いかけた。
「大変だったらしいな。大妖怪が暴れ回って、蓮女舞が途中でおじゃんになったそうだの」
蓮花節から数日。前代未聞の襲撃で儀式が中断し、朝廷は今も完全には落ち着いていない。
玉嬉が国に現れたという事実は故事により不吉とされ、伏せられている。
「はい。扇山は山肌がえぐられ、八つの廟が壊れて無惨な有様でございました」
「だっはっは！　季隆め、ここぞとばかりにやりおったな！」
愉快そうに笑うと、相長官の肩にもたれかかり、心持ち声をひそめる。
「で、妓女たちは無事だったんだろうな？　一人でも食われでもしとったら、わしは玉嬉を許さんぞ？」

「ご安心ください。皆元気に花街へ戻りました。結局後宮入りの話は流れてしまったので残念がってはいましたが」

「おお、そうかそうか。フハハ、後でちらっとなぐさめにいってやるかのう」

花街の美姫たちを夢見ているのか真君は上機嫌だ。本当にあの聖仙なのかと疑いたくなってしまうほどにゆるんだ顔つきである。

ひそかにあやしむ琮成とうらはらに、父皇帝はそんな聖仙の言動に動揺したそぶりもなく話を続けた。

「もう少し時が経ってから話そうと思っていたのだが――、先日の玉嬉の騒ぎといい、その前の業焔やその他妖怪といい、どうやらこれを狙う者の仕業のようだ。早めに話しておいたほうがいいと考え直した。そなたも夢見が悪いようだから」

ちらりと皇帝が相長官に目をやる。黒龍の夢の件はすでに報告されていたらしい。

「さて、まず何から話せばよいか……」

「事の発端から教えてやれい」

真君が面白そうに口をはさむ。皇帝はうなずいて視線を戻した。

「太子は、龍神の太刀の話を知っているか」

思わぬことを訊かれ、戸惑いつつうなずく。

「手にした者の願いがなんでも叶う太刀だと聞いています」

「その龍神の太刀を何者かが抜いた」
「抜いた？　……想像上のものではないのですか？」
自分が知っているのは、お伽噺のような伝聞だけだ。大抵の者がそうだろう。行儀悪く石の台座に膝を立てて座り、真君が口を挟んだ。
「ところが実在するんだよ、これが。しかも各国の蓮女の加護が次々襲われとる。どうやらそれも龍神の太刀の持ち主の仕業らしい」
「はい。その対応のため、封陰省付きの留学生はほぼ全員が帰国しています」
相長官がかしこまって補足する。留学生の件は何かの折に聞いたことがあったが理由までは知らなかった。何か大変なことが起きているのは理解できたものの根本的なところがわからず、琮成は眉をひそめる。
「蓮女の加護、とは？」
「これさ」
真君が指したのは、赤い宝石でできた石柱だった。
「天帝が地上の平穏のため遣わした六人の天女、六蓮天女。それは大地を支える六つの柱の隠語なのさ。白、赤、青、緑、黄、黒。六つの石柱が大地の要だ。壊れりゃ大陸が沈む。どころか天界冥界にも支障が出る」
琮成は言葉もなく赤い石柱を見上げた。

今まで教わってきた創世神話とまったく違う物騒な話を、しかしすぐさま信じていた。皇位に秘密はつきものだし、これまでも信じられない話を聞かされた経験はある。何よりこれだけの面々がそろっていながら暇つぶしに太子をからかっているわけもあるまい。

理解したのがわかったのか、真君が薄く笑って続けた。

「隠語とは言ったが、正確にはちゃんと天女もおるぞ。ただし役目はこの石柱の保護だがな。御神体に仕える巫女みたいなもんか」

「……みたいなもん、とはなんだ」

ふいに女の声が割り込み、琮成はぎょっとして振り向いた。

明らかに人が入れないような岩の隙間から顔がのぞいている。息を呑んで見つめていると、女はひょいとそこから出てきた。

頭の横で髪を高く結った、溌剌とした印象の娘だった。白い紗の衣装を身につけ、右の手首に鐲をはめている。目の前の巨石と同じあざやかな赤い玉製だ。

皇帝と相長官が丁寧に礼をとる。どうやら重要人物らしいと察し琮成は急いで倣った。

ただ一人態度の大きな真君がにやにやしながら女に目をむける。

「幽鬼と間違われたようだぞ、瑶花。相変わらず若作りだの」

「ぶっ飛ばすぞ」

じろりと女が真君をにらむ。若作りも何も、どう見ても十代後半にしか見えない。

まさか彼女が〝御神体に仕える巫女〟なのか。呆気にとられて琮成は見つめたが、ふと引っかかって眉を寄せた。

（瑶花？　――瑶花だと……!?）

臨瑶花。それは煌国を興した初代皇帝の名だったはずだ。

偶然だろうか。それとも、まさか――。

「今日はその件についても話しておこうと思ってな。琮成」

はっとして琮成は皇帝を見る。いろいろありすぎて頭の整理がつかない。礼をとることも忘れていたが、父はそれを責めなかった。

「――次代の蓮女の役目を、豊結蓮に継がせることにした」

言い放たれたその告白に、琮成は今度こそ言葉を失った。

翠玉の御使い様。

お元気でいらっしゃいますか。結蓮は元気にしています。

暑い日が続いていますが、御使い様はご体調をくずされてはいないでしょうか。心配です。

先日も「このままいったら溶ける」と仰っていましたし、やはりあの時水浴びするべきだったと反省しています。

そういえば御使い様、先日ふしぎなことがありました。

同居している婚約者が、自分が御使い様だと仰るのです。

変な方ですよね。いえ、御使い様に向かって変だなんて、無礼を言って申し訳ありません。でも、どうして突然あんなことを仰ったのでしょう。わからないのでこうしてお手紙を書いている次第です。御使い様は、いえ、季隆どのは、私をからかっておいでなのですか？

いいえ、御使い様は私をからかったりなどなさいませんよね。季隆どのならなさるかもしれませんが、御使い様は絶対にそんなこと……、だって御使い様は……、

……御使い様。

……結蓮は、混乱しています……。

# あとがき

こんにちは、清家未森です。おかげさまで六蓮国も三巻目となりました。

作中の季節は夏、それも猛暑という設定ですが、現実の夏も暑さが厳しいですね。皆さんも体調をくずさないよう、くれぐれも気を付けてくださいね！

さて、今回は翠玉の御使い様にまつわるお話がメインになっています。

イラストでは男前な季隆なんですが、「可愛い」というご意見をよくいただくようになって、意外に思いつつも嬉しいです。この三巻で「ちょっとは恰好いいところもあるのね」と思っていただけたらいいなぁと願っています。

それにしても今回のカバーも恰好いいです。Ｉｚｕｍｉ先生、ありがとうございます！

担当様。シリーズ立ち上げから本当にお世話になりました！

読者の皆様、いつもありがとうございます。ゆっくりですが関係が変わっていく二人をこれからも見守ってやってくださると嬉しいです！

それではまた、次巻でもお会いできますように。

清家　未森

BEANS BUNKO

「六蓮国物語　宮廷のニセ御使い」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「清家未森」先生・「Izumi」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

ろくれんこくものがたり
六蓮国物語
きゅうてい　みつか
宮廷のニセ御使い
せいけ　みもり
清家未森

角川ビーンズ文庫　BB64-20　17571

平成24年9月1日　初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――旭印刷　製本所――BBC
装幀者――micro fish

本書の無断複製(コピー、スキャン、デジタル化等)並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-100418-0C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Mimori SEIKE 2012 Printed in Japan

# 第12回 角川ビーンズ小説大賞 原稿大募集!

## 大賞 正賞のトロフィーならびに副賞300万円と応募原稿出版時の印税

**角川ビーンズ文庫では、ライトノベルの新しい書き手を募集いたします。ビーンズ文庫の作家として、また、次世代のライトノベル界を担う人材として世に送り出すために、「角川ビーンズ小説大賞」を設置します。**

**【募集作品】**
エンターテインメント性の強い、ファンタジックなストーリー。ただし、未発表のものに限ります。受賞作はビーンズ文庫で刊行いたします。

**【応募資格】**
年齢・プロアマ不問。

**【原稿枚数】**
400字詰め原稿用紙換算で、150枚以上300枚以内

**【応募締切】**2013年3月31日(当日消印有効)

**【発　　表】**2013年12月発表(予定)

**【審査員】**(敬称略、順不同)
金原瑞人　宮城とおこ　結城光流

**【応募の際の注意事項】**
規定違反の作品は審査の対象となりません。

■原稿のはじめに表紙を付けて、以下の3項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 原稿枚数(データ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も必ず併記)

■2枚目に以下の8項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 氏名(フリガナ)
④ 郵便番号、住所(フリガナ)
⑤ 電話番号、メールアドレス
⑥ 年齢
⑦ 略歴(文学賞応募歴含む)
⑧ サイトをお持ちの場合はサイトアドレス

■1200字程度(400字詰め原稿用紙3枚)のあらすじを添付してください。

**●パソコンデータ原稿の場合**
・必ずフロッピーディスク、またはCD-R(ファイル形式はテキスト、MS Word、一太郎)を添付し、そのラベルにタイトルとペンネームを明記すること。
・プリントアウトは必ずA4判の用紙で、1ページにつき40字×30行の書式で印刷すること。ただし、400字詰めの原稿用紙に印刷は不可。感熱紙は字が読めなくなるので使用しないこと。プリントアウトした原稿は、必ず通し番号を入れ、右上をバインダークリップでとじること。原稿が厚くなる場合は、2~3分冊してもかまいません。その場合、必ず1つの封筒に入れてください。ひもやホチキスでとじるのは不可です。

**●ワープロデータ原稿の場合**
・機種は問いません。ファイル形式、書式、原稿サイズ、プリントアウトに関してはパソコンと同様です。

**●手書き原稿の場合**
・A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可。(台紙つきの原稿は1枚ずつ切り離してください)

**【注意】**
・同じ作品による他の文学賞への二重応募は認められません。
・入選作の出版権、映像化権を含む二次的利用権(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は角川書店に帰属します。
・応募原稿及びフロッピーディスクまたはCD-Rは返却いたしません。必要な方はコピーを取ってからご応募ください。
・ご提供いただきました個人情報は、選考および結果通知のために利用いたします。
・第三者の権利を侵害した作品(既存の作品を模倣する等)は無効となり、その場合の権利侵害に関わる問題はすべて応募者の責任となります。

**【原稿の送り先】**〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19
(株)角川書店　ビーンズ文庫編集部「第12回角川ビーンズ小説大賞」係

※なお、電話によるお問い合わせは受け付けできませんのでご遠慮ください。

9784041004180

ISBN978-4-04-100418-0
C0193 ¥514E

定価：本体514円（税別）

1920193005141

BEANS BUNKO

# 六蓮国物語
## 宮廷のニセ御使い

清家未森

敬愛する太子をお守りするため、上官の季隆と偽装婚約の契約を交わしている太子近衛武官・結蓮は、憧れの恩人・翠玉の御使い様と文通を行う日々。ところが、結蓮に婚約を迫っていた太子の兄将軍・崇怜が、翠玉の御使いは自分だと言い出した!? 一方、花街では、妓女が妖怪に襲われるという事件が相次いでいた。結蓮は、事件解決のため妓女に扮することになるけれど!?

**大人気の中華皇宮ファンタジー、第3弾!!**